

2018 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2018)

目次

1. 各科目についての報告	2
2. 2018年度 Placement Test実施報告	111
3. 2018年度日本語相談室実施報告	117
4. 2018年度立教大学漢字検定試験実施報告	122
5. 2018年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告	123
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告	125
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告	125
8. 日本語教育センターニュースレター発行報告	126
9. 短期日本語プログラム報告 (A)	126
10. 短期日本語プログラム報告 (B)	137
11. センター員活動報告	140
12. 2018年度FD記録	146

2018年度日本語教育センター運営体制

2018年度日本語教育センター会議開催記録

1. 各科目についての報告

2018 年度 J0 授業記録

コース概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜春学期＞aクラス：藤田恵、小森由里、武田聡子、三浦綾乃

bクラス：開めぐみ、東平福美、山内薫

＜秋学期＞aクラス：高嶋幸太、藤田恵、武田聡子

bクラス：開めぐみ、西内沙恵、三浦綾乃

授業コマ数：週 3 コマ

履修者数：春学期 aクラス 10 名、bクラス 10 名、 秋学期 aクラス 16 名、bクラス 18 名

使用教材：独自教材

目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/ (私は) ~です/~人です/専門は~です/どうぞよろしく/~ さんは~ですか?/はい、いいえ/~さんは?/お仕事は?/お住まいは?/お 国は?/N が好きです、好きじゃありません

場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが…
買い物	～ありますか/いくらですか/～円です/～ください
レストラン	～、お願いします/Nで
許可を得る	Nでいいですか/Vてもいいですか
依頼する	Vてください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/Vます・ました/何をしますか・何をしましたか/Vたいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

春学期の a クラスは、10 名が履修登録したが、履修を途中で取りやめた学生が複数おり、学期末まで活動に参加したのは 7 名であった。残りの学生も欠席が多く、新しい文法項目や表現、語彙を導入しても、残念ながら、定着には至らなかった。本クラスにおいては、日本での文化的体験を重視しており、語学的な面でのプライオリティが低かったのではないかと思われる。きちんと出席をしていた学生は、J0 の達成目標となっているひらがな・カタカナが定着し、読み書きができるようになっていた。J0 クラスの履修者は、一学期間のみの日本語学習となる場合が多く、学習意欲が一学期間保てないこともある。全員が学習意欲を継続し、目標が達成できるようにするには、出席への指導を徹底し、クラス全体にその考えを浸透させることが大切であろう。

(b クラス)

春学期の b クラスは、10 名が履修登録をした。全員の学習意欲が高く、学期末まで出席率と参加度が高く保たれていた。また、クラス全体の雰囲気明るく、テキストに関連した語彙や文章、あるいは日本での生活の中で使用したい表現に関する質問が多く出てきた。一方で、少数ではあるが、かな学習やグループ活動を好まずに孤立してしまう学生がいたため、クラス運営が難しい場面も見られた。J0 クラスでは、グループ活動を多く行い、また学生同士の教えあいも期待したい。したがって、今後は、同様の傾向をもつ学生への対応と、効果的な協働に対する動機付けの方法を模索していきたい。

<秋学期>

(a クラス)

秋学期の a クラスは、全体を通して出席率が高かった。しかし、一部の学生は、学期途中で欠席が続き、そのことでのかな学習が大幅に遅れたため、学期末までかなが定着せずに、ローマ字に頼っていた。前学期からの課題となっている出席指導については、今後も担当者間で共有して、履修者への指導を徹底していきたい。また今学期は、出席はしているものの、学習態度に問題があり、参加度が低い学生が散見した。このような学生に対して、クラス活動への参加を促す指導を行うことも次学期への課題としたい。今学期は、TA が 1 名水曜日に入り、指導補助を行った。J0 クラスの履修者数の傾向を見ると、毎学期 2 クラス体制の運営となり、今後も履修者数が増える可能性もある。学生数が増加傾向にあるクラスにおいて、クラスサイズに合った授業デザインと、授業方法の検討、さらに TA の適切な配置について、今後検討していきたい。

(b クラス)

秋学期の b クラスは、意欲の高い学生が多く、ペア・グループ活動にも積極的に参加していた。教室外の活動においても、適切に準備が進められ、学生の満足度も高かった。一方で、単純なパターンプラクティスは、自身のアカデミックな思考に合わないと感じる学生がおり、消極的な様子も見られた。また、以前の学習項目が定着しておらず、同じことを繰り返し説明する必要があったり、語彙が分からず、発話を諦めてしまう学生もいた。日本での生活で使用したいと思う表現に対しては、積極的に学ぼうとする姿勢を見せていたことから、今後は、履修者の学習意欲につながるように、授業活動を工夫し、J0 の学習項目の定着が進むようにしていきたい。

2018 年度 J1 授業記録

コース概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：<春学期> 富倉教子（文法 1）、小柳津成則（文法 2）、西内沙恵（聴解会話）、
小林友美（読解・作文）、小林友美（総合スキル）
<秋学期> 浅野有里（文法 1）、小林友美（文法 2）、東平福美（聴解会話）、
三浦綾乃（読解・作文）、神元愛美子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期 5 名、秋学期 8 名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレッスン	<ul style="list-style-type: none"> ・ Exchanging greetings ・ Learning some survival expressions ・ Learning the writing system of Japanese language ・ Learning basic numbers ・ Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) ・ Learning basic words(Date、 Time expressions)
1	<ul style="list-style-type: none"> ・ Noun sentence ～は～です ・ Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど ・ Noun modification(kinking nouns) ～の ・ Particle “also、 too” ～も ・ Particle(question marker) ～か ・ Interrogatives なに・だれ・どこ ・ Pronominal “one” ～の ・ ”please give me ---“ ～をください ・ Counterword ① ～円、個、才、ひとつ ・ Sentence ending particles ～よ、ね
2	<ul style="list-style-type: none"> ・ Polite speech and casual speech ・ い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。

	<ul style="list-style-type: none"> • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう
3	<ul style="list-style-type: none"> • Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 • Adverbs indicating ‘degree’ • Explaining reasons ので、から
4	<ul style="list-style-type: none"> • Verb groups、 dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating、 drinking
5	<ul style="list-style-type: none"> • Giving and receiving something ① • ～は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ～てください／～ないてください • の : Noun equivalent marker • V て、V て、V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない • Mimetic words ② Watching、 seeing、 speaking
6	<ul style="list-style-type: none"> • ～は Object に V sentence • Topic は V(Intransitive verbs) • Particle に(Time marker) • ～から～まで • Duration on time ～間 • Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい • Time expressions まえに、あとで、てから • ～と思う • ～だろう／だろうと思う

	<ul style="list-style-type: none"> • Mimetic words ③ Condition of the body
7	<ul style="list-style-type: none"> • Sentence of existence and locatives いる、ある • Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 • だけ／しか • N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、 neither) • N1 は A、 N2 は B(Contrast は) • Noun と／や、 Noun/adjective/verb て form、 V-たり V-たり Adjective/verb し • ～かもしれない
8	<ul style="list-style-type: none"> • V-ている(Continuous action、 state) • Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する • が used to describe a condition、 scene before one's eyes • ～中(during、 while、 through) • もう／まだ • ～ませんか、～ましょう • Questions word + か／も • ～んです ①
9	<ul style="list-style-type: none"> • Giving advice ～たほうがいい • Particle に(amount of frequency per time unit) • Adverbial usage of adjectives • Noun になる • Conditional ① : と • Chang of state、 condition(adjective + なる) • Mimetic words ④ Pain
10	<ul style="list-style-type: none"> • に(final destination)／を(point of departure) • V-たことがある(experience) • Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain • Third person's emotion/feeling/pain/desire • Conditional ② : たら • Even if ～ても

授業の方法

J1は週5日のコースであり、文法1、聴解会話、文法2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法 2：文法 1 で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：毎週多くの情報量が導入されるなかで、学期始めから最後まで、学習者はモチベーションも落とすことなく、まじめに、熱心に取り組んでくれた。特に、人数が少なかったせい、クラスが一つとなり、和やかな雰囲気の中で、皆が協力して授業を行っているような状況だったとも思われる。途中、クラスについていくのが難しいように思われた学生も、結果的に持ち直し、最後まで全員が検討し、基本的なレベルまでは達してくれていたように思われる。そうはいても、課題として、どのレベルまで個々が導入したものを、咀嚼し、定着することができたかというところには疑問が残る。

文法 2：全体的に出席もよく、どの学生も授業に熱心に取り組んでいた。宿題もしっかりと取り組んでいるのがよくわかるものだった。この授業は週の前半で学んだ文法や語彙を復習する時間にもなっているが、学生もそれを理解しており、ざっと復習をかねて絵カードやビデオなどを見せて文法を確認し、反応が悪かったものには再度文法の導入を行ってから復習をするための教材に取り組み、反応がよかったものには、プラスアルファの練習を書く練習という形式を中心にして行った。学生数が少ないため、机間指導でフォローができ、学生もわからないところなどは積極的に質問をしてくるなど、学習項目の定着に有意義な時間とすることができたようだ。また、クラスメートも非常に仲がよく、喜んで助け合う姿勢があり、非常によい環境で学ぶことができていたと思われる。今後の課題としては、復習にとどまることなく、より学生の知的好奇心を刺激する活動も増やしていくことであろう。

聴解会話：出席率がよく、明るい雰囲気が進められた。前日に学習した文法は理解しているが、語彙が覚えきれず、スッと運用できないといったことが多々あったが、意欲的に取り組んでいた。また協調

性が高く、コース開始からどんどん学生たちが打ち解けてゆき、お互いに助けあう場面も見られた。この点が応用され、応答練習では個人的な答えを作り話題を展開するなどコミュニカティブに練習できていた。今後の課題としては、語彙の定着を目指す活動をこなしてから、理解した文法を使って運用を積み重ね、定着に結びつけることが挙げられる。また、聴解練習では孤独な取り組みに完結してしまいがちだったので、今後は聴解練習を題材にした運用練習に結びつける工夫をしていきたい。

読解作文：出席率も高く、読解、作文と宿題の提出率も高かった。読解は、日本文化を取り扱った読み物が多かったため、興味深そうに活動に参加していた。学期前半は全員とも問題なく読み進めることができたが、学期後半になり、語彙、分量と難易度が高くなったため、理解に時間がかかった。ただ、漢字圏の学生だけでなく、非漢字圏の学生にも理解が早い学生や、日本文化の知識が豊富な学生もいたため、積極的に他の学生を助ける場面が見られた。そのため、今後はピアリーディングなどの活動の積極的に取り入れたいと思う。作文は、Q&A で内容を固め、構成、モデル文の確認、作文という流れで実施した。学期当初、ひらがな、カタカナの復習から入った学生たちが、回を重ねるごとに新しい表現、語彙を用い、ある程度の分量の作文ができたことに十分な伸びを感じた。添削後、個別にFBはしたものの、時間の関係で全体のFBの時間を取ることが難しいことがあった。そのため、今後は、宿題の作文を利用し、発表やQ&Aなどの活動も組み込むなどの工夫をしていきたい。

総合スキル：本クラスでは、週の前半のクラスで学んだ学習項目の復習と総合的なタスクを行った。特に、理解が難しそうだった項目、練習がより必要となる項目を中心に扱った。クラス仲が良好であったため、学生同士教え合ったり、助け合ったりする場面が多々見られ、ペア、グループワーク、ビジターセッション等、学習活動が活発に実施できたことはよかったと思う。ただ、学期の後半にいくにつれ、難しい学習項目が増えたため、項目の整理や口頭練習に時間を費やすことが多くなってしまった。今後は、日本語の運用力の向上を目標としたアクティブな活動も適宜取り入れていきたい。

<秋学期>

文法1：課題の提出や出席率もよく、授業にも熱心に取り組んでいた。開講時には、1課毎に導入される文法項目と語彙の数が多いためか、まずその量に圧倒され、学習意欲にも影響がみられる学生もいたが、授業が進むにつれ、学習のペースがつかめてきたようだった。授業では導入項目の確認とパターンプラクティスを中心に行ったが、全体的に文型の意味は理解できていても、活用形、接続形の定着がなかなか進まなかったように思う。授業でも接続形などは繰り返し強調したつもりであったが、より文法のポイントに学生の注意が向くよう、今後も指導法を検討したい。

文法2：全体的に授業態度が真面目で、意欲的に取り組んでいた。学期後半は、一時帰国や専門の課題等が理由で、欠席する学生がいたのが残念であった。この授業では、文法1で習った学習項目を復習し、書く練習を中心に授業を進めた。個人で進める時間が多く、授業が単調になりがちであるた

め、適宜、ペアワークやグループワークを取り入れるなど工夫をした。クラス仲が良好であったため、助け合う姿が見られた点、個人の質問を全体で共有し、振り返りができた点がよかったと思う。ただ、既習の学習項目の産出に時間を要したり、同じ誤用を繰り返したりすることもあり、定着に時間がかかった。そのため、運用力に繋げる練習方法について、今後も工夫していきたい。

聴解会話：比較のおとなしいクラスではあったが、終始楽しく勉強していた。各自日本語や日本のアニメや音楽や文化に純粋に興味を持っており、聴解会話のクラスでは、重要なキーワードなどを聞き取って抽出したり、場面や文脈を理解して適切な表現で返答するという作業がよくできていた。試験でも、きちんと毎回出席して真面目に頑張っていた学生が良い成績を取れており、全体的に良い出来であった。今後の課題としては、文法や語彙の正確さには欠けるため、ディクテーションなどで一字一句正確に聞き取って書くことがまだ完璧ではなかったため、細かいところまで正確に定着させられるように努めたい。

読解作文：読解は、学期終盤の長い文章は語彙や文型、複雑な文構造に苦労している様子も見られたが、ある程度の速さで日本語の文章を読めるようになったと思われる。解答する際の文型が正確でない（例：「どうして～」の問題に「～から」で答えない、など）ため、テストで点数を落としてしまう学生がいたので、今後は解答する際の文型表現の指導もしっかり行いたい。作文は、学期末には全員が原稿用紙を正しく使って 600 字程度の作文が書けるようになった。今学期は、教師が学生の作文を添削するという教師と学生間の一方通行のフィードバックのみであったが、学生同士で作文を読み合う活動を入れても良かったと感じる。また、学生同士が構成や内容について意見を交換する機会を十分に確保できるよう時間配分に気をつけたい。

総合スキル：このクラスは日本語の運用能力の向上を目標とし、既習項目を使用したロールプレイを中心に、スピーチや日本人へのインタビュー活動を実施した。活動前には各課で導入された文法や語彙の確認も行った。第一回目のスピーチは緊張からスクリプトを見ながら発表する学生もいたが、回を重ねるごとに改善された。クラスの雰囲気がよく、発表者は聞いてもらう努力を怠らず、聞き手の学生もよく聞き質問していた。ロールプレイは力作が多く、学生たちは日頃の成果を発揮していた。しかし、授業内でやるべきこと多く、ロールプレイの発表が先延ばしになることが多かった。学生たちの努力を無駄にしないためにも、今後は活動と文法のバランスと時間配分に気をつけたい。

2018 年度 J1S 授業記録

コース概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名： <春学期>神元愛美子、森井あずさ、金庭久美子

<秋学期>長谷川孝子、森井あずさ

授業コマ数：週 3 コマ（文法、聴解・会話、読解・作文）

受講者数：春学期 8 名、秋学期 12 名

使用教材：独自教材

目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

J1S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

学習意欲の高い学生と、ついていくのがやっとの学生が混在しているクラスであった。期末試験の結果や最終評価を見てもそれが顕著であった。やる気のある学生はどんどん実力をつけていった。そのような学生は、遅れてもきちんと課題を提出していた。学生同士助け合う様子も見られ、クラス運営としてはやりやすかった。一方、途中であきらめてしまった学生がいた。また聴解はなかなか聞き取れず最後まで苦戦した者もいた。このような学生が出ないようにするために、J1S は J1 よりも進度が速く厳しいクラ

スであることをより周知していくことの必要性を感じた。J1の内容を週3日で効率的に行うために、今後は内容を取捨選択し、進度を考えてみたい。

<秋学期>

文法事項の定着には多少時間がかかったが、コミュニケーションの意欲という点では優れている学生が多く、授業の前後でも簡単な日本語で会話を楽しんでいた。後半、遅刻欠席が見られたが、それぞれのペースで最後まで勉強を続けることができた。やる気はあるが、その気持ちが語学習得に結びつかないタイプの学生が多かったようである。週3回という少ない授業なのでそれに対し自覚を持って学習できる環境にいたら、実力も伸びたのではないかと思う。語彙や文型が定着していないという理由もあるが、授業で練習時間が少なかった聴解で苦戦している学生が何名かいた。聴解の練習時間が明らかに足りず、時間の確保が次回の課題である。

2018年度 J2 授業記録

コース概要

J2は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙500）を身につけているものを対象とする。週5日、毎日スキル別（文法1、文法2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法1で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：<春学期> 富倉教子（文法1）、小柳津成訓（文法2）、森井あずさ（聴解会話）、
嶋原耕一（読解作文）、武田聡子（総合スキル）

<秋学期> 浅野有里（文法1）、平山紫帆（文法2）、森井あずさ（聴解会話）、
嶋原耕一（読解作文）、武田聡子（総合スキル）

授業コマ数：週5コマ（文法1、文法2、聴解会話、読解作文、総合スキル）

履修者数：春学期11名、秋学期12名

使用教材：独自教材

目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようになることである。語彙数については1000を目標に増やす。

文法1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせて基本

的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。

日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解作文：文法 2 で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	1. Can: indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」 4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、Even though *Review のに、が/けど、ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	1. V-方 How to V 2. Vながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、possession、own ~がある 4. Obligation: Must / Have to ~なくてはならない/なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ~ ~なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather

4	<ol style="list-style-type: none"> 1. When～: ～とき～ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・～のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	<ol style="list-style-type: none"> 1. Try doing something and see: ～てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers 名詞修飾 4. Mimetic words ⑧ Nature
6	<ol style="list-style-type: none"> 1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. Vてある 3. Intransitive Vている vs Transitive Vである 4. Mimetic words⑨: Sleeping 5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	<ol style="list-style-type: none"> 1. Vておく 2. ～が V みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favors, some acts) ～てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: Vてほしい・もらいたい・いただきたい 5. ～が・けど(けれども) 6. Imitative words: Caught a Cold?
8	<ol style="list-style-type: none"> 1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る 3. い-adjectives derived from verbs Vにくい/Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose 6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける
9	<ol style="list-style-type: none"> 1. 伝聞 Hearsay, Conveying information getting from another person, media ～そうだ・ということだ・とのことだ 2. Vてしまう 3. Review: Vている、Vである、Vてみる、Vおく、Vてしまう 4. [Question words] か / ～かどうか 5. V1 ないで V2 without doing V1, do V2 6. Imitative words: Hitting, Breaking 7. Compound Verbs ③ Vなおす・Vかえす

10	<ol style="list-style-type: none"> 1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ 2. Decisions: ～ことにする・～ことになる 3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている 4. 比喩の表現 Expressing Resemblance、 Figurative expressions ～ようだ・ みたいだ 5. V-て いく・くる do V and come/go 6. Imitative words : Animals、 Birds
----	---

授業の方法

読解作文（月）、文法 1（火）、聴解会話（水）、文法 2（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行われた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズ I」を行った。また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シート I」を宿題にした。

文法 2：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズ 2」を行った。また、新出文法の理解度を確認するために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。また、毎回、各課の代表的な文型を使った文章のディクテーションを実施した。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シート II」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカッションを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロールプレイ、スピーチ等を行った。また、毎回授業のはじめに、新出文法を理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：毎回授業で新しい学習項目の意味や使い方を提示していたが、学習者がその導入した項目をどこまで理解できたのかを確認する時間的余裕は十分になく、またその理解度は学習者によってかな

り差が生じていたように思われる。基礎的なことがすでに身につけていたり、理解が早かったりする学習者には比較的問題なく進み、さらに興味と理解を深め、自分のものとして習得してくれていたようである。一方、基礎的な知識が定着しておらず、復習を必要としていた学習者には、毎回導入されていく新しい情報量を咀嚼することが時間的にも能力的にも厳しかったようであった。しかしながら、そのなかでも、学習者は学期を通して熱心に参加し、理解しようと個々で勤めていた努力は伺えた。限られた時間のなかで、また様々な背景の学習者がいる中で、各々が新しい情報をどのくらい整理して、自分のものとして体得していくことができるかが今後の課題と思われる。

文法2：全体的に出席率もよく、授業でのタスクや練習などもきちんと取り組む学生が多かった。宿題の提出率もよく、きちんと取り組もうとする様子がわかるものであった。この時間は文法1で導入された文法を定着させることを目的として、書くタスクを中心に机間指導を中心に個人差のある文法の定着の支援を行った。学生も週の前半で学んだことを再確認しようと積極的に取り組んでいたが、特に書く練習であるために、教師も学生も細かい間違いや違いにお互いに気づくことができ、よい復習になっていたと思われる。一方で、一部の学生ではあるが、復習の意義がわからないのか、あからさまに動機付けが下がる学生がおり、その対応として教材の後半にやや難しいものを付け加えることとした。今後の課題としては学生へのフィードバックと支援のありかたの工夫であろうか。今回のクラスは比較的、定着の悪い学生が多かったため、その学生達へのサポートに時間がかかり、できる学生へのプラスアルファでの支援が充分できなかった。さらに、集中力が続かない学生がトイレといいながら離席しつつ戻ってこないこともあり、こういった学生への手当としてどのようなことができるのかを考えたいと思う。

聴解会話：毎回前日習った文法を簡単に復習し、それを使った会話と聴解を練習した。学期当初から学生同士の仲もよく、いい雰囲気だったが、文法理解と語彙定着が難しい学生の多いことが徐々に判明し、学期途中からはとにかく文法・語彙をいかに覚えてもらい、実際に使うようにできるかに苦心した。習った文法を使って実際の場面であるべく自然な日本語を使えること、という目標を持って毎週の授業に取り組んだ結果、ある程度自然な日本語を使って会話ができるようになったようであった。細かい文法がわからなくてもとにかく使ってみる、という楽天的な学生が多かったことは、会話を習得することと同時に会話のクラスを運営していく上でも幸いであった。全体的に自然な速さの聴解が苦手であり、期末試験でも聴解の点数が今一つ伸びなかったため、今後の課題としては、文法を定着させた上でより自発的な発言とより速い発話の聞き取りを習得すること、を挙げたいと思う。

読解作文：受講者はみな真面目だったが、授業外の学習が十分である学生とそうではない学生とで、読み物の理解や作文での正確さに大きな差があるクラスだった。語彙が足りていない学生が多かったため、読解では意味を推測しながら読み進める練習を、多く行った。その結果、逐一辞書を用いないことに学生は慣れていったが、基本的な学習時間が足りていなかったため、テストの点数は伸びなかった。作文については、正確さに問題がある学生が多かった一方で、着実に習った文型を使える

ようになった学生もいた。書きたい内容はみなあるようだったので、どのようにして内容ばかりでなく、正確さにも注意を向けさせるかが課題だと感じた。

総合スキル：このクラスでは、総合的な日本語コミュニケーション活動ができるよう、工夫をした。その週学習したユニットの文型を意識するだけでなく、新しい語彙はどんどん紹介するようにした。その結果、学生が興味を持てる内容を意識して、活動を実施した。今学期は2回、日本人ボランティアの学生を招き、学んだ文型が意識的に使えるような話題を選び、日本人学生との会話活動を行った。またスピーチ発表を一度取り入れた。コミュニケーションにそれほど関心がなく、また得意でもない学生には読解を通して総合スキルが身に着けられるように、皆で楽しんで読める内容の読み物を用意した。その読解の中では、既習の文型が使われており、学んだ文法が意識付けられるように工夫した。個々の持つ語彙力、文型力、発話量にはかなりのばらつきがあり、一人一人の質問に対応していると、なかなか先に進めないということもあった。今学期の最初から、学生には語彙力不足を指摘し、一つでも多くの語彙を覚えるようにと伝えてきたが、最後まで語彙力不足は課題となった。個人の性格によっては、日本人ボランティアとの会話活動を好まず2回とも休んだ学生もいたが、総合スキルというクラスの性質上、日本語を使った総合的なコミュニケーション力を伸ばすということが求められる。発話量や表現力に個人差はあっても、他者との関わりの中で日本語を道具として使っていくための学習は意義があるものと思われる。

<秋学期>

文法1：開講時からクラス内でのレベル差が見られたが、授業中は積極的に発言や質問をする姿が多く見られ、クラス内のレベル差も学生間の助け合いで埋められたことが多かった。その一方で、1学期間を通して、遅刻、欠席が目立ち、クラス全体のクイズやテストの点数もなかなか伸びてこなかった。授業は導入項目の確認とパターンプラクティスを中心に行ったが、「理解したつもり」で学習が止まってしまい、次につながる学習に導くことができなかつた点が反省点である。今後、授業内での導入項目の確認・練習方法の工夫を検討したい。

文法2：遅刻や欠席が非常に多く、全員が揃わないことがしばしばあったが、それでも出席した学生は熱心に学習していた。授業では、その課の文法項目をクラス全体で復習してから各自で短文を作成し、それを教師が机間指導するというのをくり返し行った。当初は与えられたパターンで文を作るということに不慣れな学生もいたが、次第に自分なりの文を書けるようになり、既習項目を自主的に組み合わせて短文を書く学生も見られるようになった。課題としては、語彙の学習が挙げられる。毎週、その課の語彙クイズを行ったが、点数が毎回低い学生が数名いた。今後は語彙学習のモチベーションを高め、練習できるような方法をもっと積極的に取り入れていきたい。

聴解会話：学生たちの仲がよく、大人の対応をする学生が多かったため、雰囲気のとていいクラスであった。ただ、基本的な文法事項がなかなか身に付きにくいタイプの学生が少なからずいたことで、少しクラスのペースが落ち、停滞気味になってしまったこともあった。前日に文法を習い、それが定着しないままに聴解会話のクラスの日になったため、まずは前日習った文法を簡単に復習して

から会話をするようにした。ある程度繰り返して会話が成り立つようになった段階で、少しスピードの速い聴解問題を解くようにしてみた。結果的には、聴解会話の翌日の「文法2」の日にも「全くわかっていなかった」という報告がなされることが多く、果たして会話や聴解で勉強したことは身につけているのか、方法が間違っているのかと悩むこともあったが、とにかく語学は繰り返しが重要だと思い、お互い忍耐強く練習を繰り返した。今後の課題としては、文法を身につけつつ、それを使って実際に日本人とコミュニケーションを取っていけるようになることである。クラスで習ったことを生かして、今後も日本語を使って活動してくれたらいいと願っている。

読解作文：読解は、一語一語確認しながら進めたいタイプの学生がいる一方で、全体像が分かれば細かい部分は気にしない学生もおり、両極端なタイプが混合していた。前者の学生はもっと意味を推測しながら読み進められるよう、後者の学生にはもっと細かい部分まで把握しようとするよう口頭で促したが、なかなかそのような態度に変化は見られなかった。ペアワークを組み合わせながら、様々な読み方があることに気づかせられれば、よかったと思う。作文は宿題の提出率も高く、正確に書いている学生が多かった。最初は正確性にあまり注意を払っていなかった学生も、徐々に助詞や活用に気を付けるようになり、正確性が高まっているのが見て取れた。作文については、クラスの半数程度がJ2の目標を達成していると考えられる状況で、どのようなチャレンジをさせられるか、今後考えていきたい。

総合スキル：このクラスでは、総合的な日本語コミュニケーション活動ができるよう、工夫をした。その週学習したユニットの文型を意識するだけでなく、彼らに必要な新しい語彙はどんどん紹介するようにした。今学期は2回、日本人ボランティアの学生を招き、1回目は、学んだ文型が意識的に使えるような話題を選び、日本人学生との会話活動を行った。もう2回目は留学生のスピーチ発表を聞いて、コメントしたり質問したりしてもらった。会話活動に限らず、読解を通して総合スキルが身に着けられるように、皆で楽しんで読める内容の読み物も用意した。その読解の中では、既習の文型が使われており、学んだ文法が意識付けられるように工夫した。個人の性格によっては、会話活動よりも、じっくりと読んだり書いたりする活動を好む学生もいたため、4技能をバランスよく取り入れることを意識した。今学期は来学期も引き続き立教大学で日本語学習を続ける学生が多いため、J3に上がるためには、引きつづき、文型・文法と語彙の定着が必要であると思われる。

2018年度 J2S 授業記録

コースの概要

J2Sは、J2と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2が週5日で行う内容を週3日で進めるクラスのため、J2よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞開めぐみ、西内沙恵、金庭久美子

＜秋学期＞開めぐみ、西内沙恵、神元愛美子

授業コマ数：週3コマ（文法、聴解会話、読解作文）

履修者数：春学期5名、秋学期8名

使用教材：独自教材（J2と同じもの）

目標

接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1000 に増やすことを目指す。また、J2 で習う文法項目を理解すると同時に、実際のコミュニケーション場面を意識し、運用能力の向上をはかることも目指す。

授業の方法

語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使えるようにするための練習を行った。具体的には、文法テキストの各課を 2 回のクラスで学習するペースを進めた。まず、1 回目のクラスでは、パターンプラクティスを中心とした口頭練習を行い、2 回目には聴解練習、会話練習、短文作成などを行った。文法項目が多い課は 3 回に分けて授業を行った。読解作文については、J2 と同様、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、適宜、授業では扱わなかったジャンルの読み物を宿題とした。

結果と課題

＜春学期＞

クラスの雰囲気は非常によく、協調性があり、お互いに刺激しあいながら学習を進めることができたと思う。少人数で一人一人に目が届きやすく、個々の学生の弱点、強みを把握して授業活動を行うことができた。きちんと予習をして授業に臨み、説明をよく聞き、既習事項を学習した課以降でもしっかり活用していた。アクティビティは全員積極的に参加し、運用につなげることができたと思う。全員漢字を希望し、2名は第5課まで進めた。反省点としては、文法クラスで導入項目が多い課では、導入、簡単な練習に終始し、既習項目と関連付けて練習できるような応用練習の時間が取れなかったことである。今後も効率的な授業運営に努めたい。

＜秋学期＞

ほとんどの学生は教室に入る時間が早く、授業を受ける準備が整っていた。授業では説明をよく聞き、使いこなそうと実践する様子が見られた。文法の宿題は毎回教科書をしっかり確認してしなで行ったようで、出来が大変よかった。毎回の項目を復習し、正確に使用できるまで練習した学生とそうでない学

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようとする 3. V-ようとしたができなかった、V-ようとしてもできない 4. Fraction 三分の一、五分の一 5. Review : 条件 Conditional
5	1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ 2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture 3. ～の多く 4. ～以外、以内、以上、以下 5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて 6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とっくに
6	1. 受身 Passive Verbs

	2. Direct Passive Sentences 直接受身 3. Indirect Passive Sentences 間接受身 4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence 5. Compound Particle ② ～によって 6. Sentence ending particles 終助詞
7	1. Giving an Instruction ～なさい・ないてください・てはいけない 2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止 3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む 4. Review : Expression for Cause、 Reason 5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて
8	1. 使役 : Causative Sentences 2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる 3. ～のは～です (emphasizing)
9	1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらう／くれる／あげる 3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる 4. ～ことに one's feeling、 emotion 5. Noun のこと VS Noun
10	1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる 2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions)

授業の方法

J3は週5日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合スキルの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200字程度の作文を書く練習を行った。

また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行っ

た。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法：明るく活発なクラスで、授業態度も良好であった。毎回導入する学習項目が多く、苦勞していたが、理解しようとする姿勢は常にあり、ペア活動も活発に実施することができた。しかしながら、予習を全くせずに授業に来る学生が多かったため、説明、パターンプラクティスに時間がかかり、予定していた練習ができないことがあった。そのため、毎回の授業で、予習を周知したが、完全には改善されなかった。また、授業内での練習では産出ができるが、次の授業には抜けてしまう学生もいたため、運用力に繋がられるような授業活動ができるよう、工夫していきたい。

聴解会話：日本語や日本文化に興味のある学生が多く、終始非常に明るいクラスだった。学習する語彙、文法、文型への興味関心も高く、それらに関する質問が多かった。しかし、その説明に時間を費やすことが多くなってしまい、その分、聴解のフィードバックが少なくなってしまうのは反省点である。今後の課題としては、自身で語彙、文法、文型を理解する努力をするよう予習を徹底させ、できる限り、聴解と会話に十分な時間を費やすことを目指したい。

読解：授業を始めて数回は、学生たちの「レベル的に難しい」、「このような分量のテキストは読めない」という先入観がなかなか取り払えず、学習意欲をどう引き出すかに苦勞した。わからない語彙があるとそこで止まってしまいがちだったので、読解は推測が大事であること、母語でも全ての語彙を理解してボトムアップで読んでいるわけではないことを繰り返し伝えるようにした。素直な学生たちなので、ちょっとしたことでもほめることを心掛け、また、ペアワーク・グループワークを取り入れて読み進めることで少しずつクラスの雰囲気良くなり、学習に取り組むことができるようになっていった。今回は J3 のテキストを読むには語彙力が少々足りない学生もいたため、どれを読むか、早い時期から絞り込んで進めても良かったように思われる。過去の J3 の報告にもあるが、このレベルでは読解ストラテジーというものをどう指導すればいいのか、さらに考えていきたい。

作文：全体的に学生の日本語レベルが揃っており、また、J3 のレベルに相応していた。そのため、各週で学習した文法や読解などを十分に活用し、作文に生かすことができていた。授業態度がよく、毎週の作文の課題においては、家族来日などの理由で欠席する場合においても課題を他の学生に渡すなど、ほとんどの学生が遅れることなく提出があった。課題の提出は重要視していたが、その一方で、提出後の復習が十分には行われておらず、翌週に担当者が添削を入れた作文を返却した際には、質問が出てくることが非常に少なかった。このように添削された作文を読み返したり、書き直したりすることを行わないことは、毎回の宿題で同様の間違いを繰り返すことに現れた。そこで学期の中盤で作文のリライトの日を設けた。教室内で考え、担当者に質問をしながら書き直す時間を取ったところ、その後の作文において、作文の書き方及び文法・文型・語彙の誤用が減り、作文の

力に向上が見られた。今後の課題としては、定期的にリライトの機会を設けたほうがいいのか、どのようなフィードバックの方法が学生の作文力の向上につながるのか、各学期の学生の様子や学習スタイルの傾向により、考えていく必要があるだろう。

総合スキル：一週間の目標である文型や語彙が非常に多く、学生がそれらを消化しきれていない様子が見られたが、日本人学生との会話やスピーチなどは積極的に取り組み、結果的に楽しみながら日本語力を上げることができたと思う。しかし、運用力に繋げるためには課題も多い。学生の理解度や興味にも注目しながら、運用力を上げるための課題を考えたが、一教師の力では限りを感じる。学生に必要なことは何か、限られた時間の中で何を教えられるか、可能であれば担当教師間で話し合いながら、問題の整理をして授業を進めていくことができれば、さらなる日本語力向上に繋がれると思う。

<秋学期>

文法：導入する学習項目が多いため、項目の難易度や学習者の反応に考慮し、ポイントを絞りながら授業を進めるよう心掛けた。授業では、絵や写真を付した PPT で用法を整理し、パターンプラクティスを中心に練習した。学期始めに、クラスメートとのレベル差に悩む学生がいたが、本人の努力もあり、徐々に力を伸ばすことができた。課題としては、予習をしてこない学生が多く、学習項目の導入に時間がとられてしまった点、授業内には理解できるが、なかなか定着が進まなかった点が挙げられる。今後は、予習復習を徹底させ、定着に向けた練習に時間を確保していきたい。

聴解会話：大変おとなしいクラスだったため、それぞれが個人プレーで学習を行っていたように思う。特に、聴解では淡々と聞き取りが進んでしまい、また、会話では決まった表現以外のオリジナルの発話をさせて、長い会話をさせるのに工夫が要るクラスだった。さらに、J1, J2 で学ぶべき項目が定着していない学生もおり、間違った語彙や文法で会話を進めるため、その都度訂正に時間を割いた。今後の課題としては、授業を通して学生同士の横のつながりを密にし、まずは学生同士が仲良くなって、皆が恥ずかしがることなく自由に発話できるクラスにしたい。そして、学生同士で訂正し合ったり、共同で日本語を学んでいる雰囲気を作っていく必要があると感じた。

読解：学期前半は、物静かな雰囲気のクラスであったが、発言する学生が徐々に出てきたこともあり、いい雰囲気に変わっていった。授業では、基本的に、教科書の読み物の読解と問題を個人でもらい、その後、ペア、全体で共有という流れで進めた。長い文章を読むことに苦手意識がある学生や、分からない言葉があると止まってしまう学生が複数おり、クラスにはレベル差があった。そのため、ペアの組み合わせを工夫したり、テーマに興味を持ってもらえるよう、テーマに関してディスカッションをするなど工夫をした。今後は、母語に頼らず、日本語で読解できる力を育成するための指導方法について考えていきたい。

作文：クラスはテキストに沿って進め、作文メモの作成までを行い、作文を書くのは宿題とした。初めは 600 字ほどしか書けなかった学生も、学期末には J3 で勉強した文型を使って 1000 字程度書けるまでに成長した。一方で、作文の内容は良いのだが、構成が適切でなくうまく伝わらない、理由や

例を列挙する際の表現や接続詞が正確でないため分かりにくい作文になってしまう学生も少なくなかった。今後は「起承転結」、「序論・本論・結論」という作文の構成をより意識させ、作文でよく使われる表現や接続詞についてもさらに丁寧に指導したい。また、制限時間のある期末テストでは、時間内に必要な文字数を書けなかった学生もいたので、授業内で制限時間を意識させて実際に作文を書いてみる練習も必要だと感じた。

総合スキル：学期内の大きい活動としては2回のスピーチと1回のビジターセッションであったが、どれも学生が積極的に取り組んでいた。特にビジターセッションでは実際に日本人と日本語で話せたことが自信や日本語学習のモチベーションのアップにつながったと思われる。しかし、J3で学んだ語彙や文型がそういった活動で正しく使えていたかと言われると疑問が残る。学んだ内容を理解だけで終わらせず、実際の生活場面における運用に結び付けられるような指導を行わねばならなかったと反省している。また、文法の解説や復習に時間を取られてしまい、予定していた発展活動ができなかったこともあった。J3で学んだ文型・表現の運用を促せる活動内容を考えることと、授業内の発展活動にあてる時間配分を今後の課題としたい。

2018年度 J3S 授業記録

コース概要

J3Sは、日本語の基礎を習得し、1000語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週3日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞神元愛美子、浅野有里、保坂明香、三浦綾乃

＜秋学期＞神元愛美子、藤田恵、長谷川孝子

授業コマ数：週3コマ（文法、運用練習、読解・作文）

受講者数：春学期10名、秋学期12名

使用教材：独自教材

目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

J3S は週 3 日のコースであり、J3 で学習する文法項目が既習ではあるものの、それらを運用するまでには至らず、使いこなせない学習者を対象に開講されている。そのため、導入よりも、運用練習に力を入れてコースを運営した。

J3S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、4 コマで 1 課の場合は (9 課以降)、文法の時間を 2 コマに増やした。

1. 文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを中心とした練習を行った。
2. 運用練習：文法で扱った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。
3. 読解・作文：読解では、様々な長さやジャンルの文章を読み、内容理解のほか、自分の意見を述べ合う練習を行った。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200 字程度の作文を書く練習を行った。また、2 課に 1 度のペースで漢字クイズを実施した (希望制)。

結果と課題

<春学期>

春学期の J3S クラスは、和やかな雰囲気が進み、履修者が友好的で互いに学び合う姿勢が見られた。学期前半は出席率、課題の提出率とも高かったが、中盤を過ぎた頃から意欲が低下し、遅刻や欠席が目立つようになり、全員出席となることが少なかった。また、予復習、宿題などの自宅学習にあまり時間をとっておらず、学習内容が運用レベルにまで達することが難しかった。特に、漢字への苦手意識が強く、新しい文法項目導入の妨げになることもあった。J3S クラスでは、希望制の漢字クイズを実施しており、本クラスでも希望者がいたが、学期途中であきらめてしまい、学期末まで漢字学習を積極的に行うという姿勢には至らなかった。クラスの中では漢字指導の時間をとることが難しいため、履修者には能動的に漢字を学ぶ姿勢を期待したい。S クラスにおける漢字学習について、今後検討が必要だと思われる。

<秋学期>

秋学期の J3S クラスは、一部の学生は遅刻と欠席が目立ったが、それ以外の学生は大変熱心に取り組

んでいた。ペアワークやグループワークが効果的に進み、学生同士の助け合いが見られるクラスであった。自宅学習をしている様子も見られ、学習項目の理解もスムーズであった。しかし、一部の学生は、クラス活動に消極的で、クラスメートとの活動にも参加を固辞したため、教師との活動のみとなり、学期末まで当該学生と他の学生との間の関係性が築けないままとなってしまった。教師は、多様な背景を持つ学生への柔軟な対応と考えていたが、場合によっては過度な対応となり、学生が否定的にとらえることもあることから、このような学生への対応は慎重に行っていきたい。また、全体を通して、聴解能力が上がらなかったことも課題として挙げられる。Sクラスでは、聴解練習の時間の確保が毎学期課題として挙げられる。次学期以降は、聴解練習にも適切な時間がとれるように、授業計画をしていきたい。

2018年度 J4 授業記録

コースの概要

J4は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の4クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせ使用できるようになることである。さらにJ4では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

<J4 文法・文型>

担当者名：<春学期> 金庭久美子 <秋学期> 浅野有里

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期 10名、秋学期 10名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J4で扱った文法項目は以下の通りである。

表 J4 文法で扱った文法項目

課	Part1	Part2
1	<ul style="list-style-type: none"> ・受身 ・自発 	<ul style="list-style-type: none"> ・～は～つつある ・～は～（で／に）さえ～ ・Vさえすれば／Aさえあ（い）れば／Nさえ～ば～

		<ul style="list-style-type: none"> ・～とすれば、～（こと）になる ・（たとえ／仮に／もし）～としても～
2	<ul style="list-style-type: none"> ・使役 ・使役受身 	<ul style="list-style-type: none"> ・～にもまして～ ・（たとえ／仮に）～にしても～ ・いくら～にしても～
3	<ul style="list-style-type: none"> ・尊敬語 	<ul style="list-style-type: none"> ・（Vた／A／Nの）まま、～ ・Vつつ～ ・～はVなり～
4	<ul style="list-style-type: none"> ・謙譲語 	<ul style="list-style-type: none"> ・Vことにしている／Vことになっている ・～は～ことから～ ・～は～こととなると～ ・～は～ことなく～
5	<ul style="list-style-type: none"> ・～ようにV ・～ようにする ・～ようになっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・～して、（考えさ／思い知ら）せられた ・（無生物主語）が～を～させる ・～は～だけではなく、～の問題だ
6	<ul style="list-style-type: none"> ・Vたばかり／Vばかり／Vてばかりいる ・Nばかり／Aばかり ・Numberばかり 	<ul style="list-style-type: none"> ・～からといって、～が必ずしも～わけではない ・～ずに～ ・～のか（どうか）については～
7	<ul style="list-style-type: none"> ・～が限られている／～を～に限っている ・限りがある／ない ・V（ない）限り／Nの限り ・V（た）限りでは／Nの限りでは 	<ul style="list-style-type: none"> ・～原因は～ことにある／～のは～からだ ・～と～では～が異なるので～ ・～や～は～のだから、たとえ～でも～ことはない ・～や～は～のだから、もし～たら～
	<ul style="list-style-type: none"> ・Nに限って（はずがない） ・Nに限り ・V（ない）／Nに限る ・Nに限らず 	<ul style="list-style-type: none"> ・～は～ので、～でも、どうしても～てしまう ・～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ・（無生物主語）が～に～を生じさせる ・～たり～たりするだけでは～ ・～は～が～であることを利用して～
8	<ul style="list-style-type: none"> ・Vよう（か） ・Vようと思う／Vようとする ・Vようがない ・Vようとしている ・Vようとししない 	<ul style="list-style-type: none"> ・～時に、～と／ても～ ・私は～て、～ことに気が付いた ・～（こと）は～（のだ）から、もし～なら～
9	<ul style="list-style-type: none"> ・N（clause）というN ・NというN／Number というNumber 	<ul style="list-style-type: none"> ・～すると、～は～が～は～ ・～する時に重要なことは、～か（どうか）ということ （よりは／ことではなく）、～か（どうか）という（点／こと）である ・～ものとして（しまう）

授業の方法

<春学期>

授業は1回に1課のペースで進行した。Part Iとして学期の前半は、学生たちが苦手とする「受身」

「使役」「使役受身」「敬語」を中心に、複合文型を用いて復習を行った。学期の後半は「ように」「ばかり」「かぎり（かぎる）」「意向形を使った表現」「という N」などの中級文型の練習を行った。さらに、意欲のある学生のために Part II として、中級向けの表現を用意した。

Part 1 も Part 2 も、ターゲットとなる文型・文法項目を説明後、文を完成させる練習などを通して、文型・文法項目が理解でき運用できるか確認した。また、各課の Comprehension check と学習した文型・文法を用いた短文作成を毎回宿題にした。

<秋学期>

毎週 1 課のペースで授業を進めた。各課に初級文法の確認と初中級レベルの文法が盛り込まれていたため、特に初級の復習部分は丁寧に進め、中級につなげられるよう工夫した。授業で提示する例文は、易しくわかりやすいものから始め、徐々に難易度を上げていくよう心掛けた。また、テキストの例文はどのような場面で使われているか確認しながら音読した。

結果と課題

<春学期>

全体的に出席率・宿題の提出率がよく授業中も真面目に取り組んではいたが、理解に時間がかかった。特に、前半に学習した「使役」「受身」「使役受身」では、基本的な文の理解、産出はできたが、文脈の中で「使役」「受身」「使役受身」では文意が読み取れず、誤解もあった。練習問題などで繰り返して、ようやく理解できたようだった。後半になってやっと本来の J4 の授業スピードになり、理解が早くなったように思う。また後半は予習がきちんと行われるようになり、授業活動がスムーズになり、宿題の短文づくりでも理解している様子が見ええた。Part II の追加教材を用意していたがあまり時間がとれない日もあった。学習者のレベルによるものだと思うが、Part I の理解を優先させた方がいいと考えている。

<秋学期>

どの学生も前向きに学習に取り組んでおり、いつでも発言や質問ができる雰囲気の中で授業を進めることができたと思う。授業での導入項目に関しては、変換練習や前件、後件の文作成などで練習を行い、定着を試みたが、中間・期末試験では、日頃の学習成果がなかなか点数に結びつかない学習者が複数見られた。今後は、授業内での練習の方法、宿題の短文作成のフィードバックの仕方など、導入項目の理解から運用へつなげる方法を検討していきたい。

<J4 読解>

担当者名：<春学期> 山内薫、<秋学期> 高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 10 名、秋学期 11 名

使用教材：独自教材

目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

<春学期>

プレレッスンから L11 まで、毎週 1 課のペースで授業を進めた。毎週、L8 までは、次週の読解の予習として、語彙調べと設問をさせた。教室では、グループワークで読解の確認を行った後で、全体で筆者の意図や要点、詳細な箇所を理解を確認した。また、L9 から L10 までは速読とし、授業中に配布し、初見での読解を行った。速読では、まず、各学生で語彙を文脈の中で推測しながら読解をし、グループで既知の語彙を共有した上で、全体での確認を行った。授業開始時には、前週の読解で扱った語彙のクイズを行い、授業の終わりには、語彙クイズに関わる語彙が盛り込まれた文章をペアになって読み合うというクロスリーディングを行った。さらに宿題として、毎週、読解の教材で学習した語彙から、自分が特に覚えたいという語彙を 5 つ選択し、短文を作成させた。

<秋学期>

授業の流れは以下のとおりである。授業開始時に前回の読解で用いた語彙に対しクイズを実施し、重要な単語の確認をした。そのあとに、まず前作業として各課の読解文に関連するディスカッション・トピックを提示し、クラスメート同士で話し合ってもらった。次に本作業として本文を読み、答えをパートナーと共有後、全体で内容を確認するという流れで行った。授業の最後には、当該課に登場した重要語句を確認するため、ペアで穴埋めするクロスリーディングを行った。

結果と課題

<春学期>

特外の学生 8 名、学部生 2 名のクラスで、レベル的には特外の学生には語彙の面で難しめであった一方で、学部生には易しめであった。学生同士の仲が大変よく、毎回の読解の確認をするグループ活動では、助け合いながら進めることができていた。予習重視の授業であったが、ほぼ全員がしっかりと取り組んできている様子であった。また、学んだ語彙の短文作成の宿題については、数名の学生以外は毎回提出し、意欲的に復習を行っていた。

クロスリーディングでは漢字に振り仮名がなかったことから、新学期に開始された時には、特外の学生にとっては難易度が上がり、困難を要していた。そのため、コーディネーターの先生と振り仮名を振り、活動を行ったところ、順調に取り組むことができるようになった。ただ、語彙量を消化し切れず、そのことが期末テストの結果に影響した学生が多く見られた。今後は、学期中に適宜復習を入れたり、各自で復

習をするように促したりする等、語彙不足を補う工夫を考えていきたい。

<秋学期>

宿題や読解文、語彙などは毎回の授業において、過不足なく、1 コマの中できちんと収まっていたため、扱う分量としては適切であったと思われる。また、履修学生もほぼ毎回、宿題をこなして来ており、熱心に学習している様子が見て取れた。第 9 課からは初見の文章を読む練習を始めたり、さらに期末試験の前の週には総復習を行ったりしたため、期末試験に対応できるような授業構成に改良された。今後も引き続き、初見の文章でも難なく読み込めるような指導を行っていくことが重要であると思われる。

<J4 作文>

担当者名： <春学期>浅野有里 <秋学期>斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 11 名、秋学期 5 名

使用教材：独自教材

目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけではなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400 字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

<春学期>

授業はテキストに沿って行った。テキストは 1 コマ 1 課のペースで進めた。授業では、まず新出文型を使ったやさしい例文を提示し、意味と接続形の確認を行ってから、テキストの例文の意味を確認した。次にテキストの文章の構成に注目しながら例文を読み、パラグラフ作成を行った。毎回授業の初めに、前回習った文型を使った文完成の復習クイズを行った。

<秋学期>

主に授業の前半で、新しい文法形式を含む単文の読解と作成練習を行い、後半ではモデルのパラグラフを読み、その構成と同じような短作文の作成を行った。作文は基本的にクラス内で書かせたが、じっくり考えたいという場合や難度が高いもの場合は翌週の提出も認めた。書いた作文については返却の際にクラス内で個別にフィードバックを行った。毎回クラスの始めに前回導入した文の構成を含むクイズを行ったが、クイズは予告の上で文を完成させるもの、助詞を入れて完成をさせるもののいずれかのパターンで行った。

表 J4 作文の授業内容

pre-Lesson	初級文型確認の短文完成問題。
Lesson 1 定義	①留学とは、一定期間外国へ行き、その国の学校などで学ぶことだ。 ②私が会社を辞めたことで、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は人を人間的に成長させる。
Lesson 2 意見①	①最近、日本の大学生を見ていて気づいたことがある。 ②日本の経済が悪くなったのは、日本の政治家が無能だからだ。 ③両親の「成績が一番」という考え方が、子供を非行に走らせたのだろう。
Lesson 3 分類	①私は、医者という職業を目指している人は、その目的の点から2つのグループに分類されると思う。 ②この薬には麻薬のような成分が含まれているため、服用すると眠くなる。 ③留学という貴重な経験をその後の人生に役立てたいと思う。
Lesson 4 比較・対照 ①	①日本とタイとはどちらも米を食べる国だが、日本とタイとでは、その食べ方や食べている種類が大変に異なっている。 ②日本とタイはどちらも米を食べる国だ。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類において対照的である。 ③東京の生活は便利だがストレスが多い。一方、地方の生活は東京ほど便利ではないが、ストレスは少ない。
Lesson 5 根拠・判断 ①	①日本人は、間違った平等主義の方向に進もうとしている。 ②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった経済的な問題に取り組んでいる。 ③自分の能力や適性がいかにせよ、転職してもいいと思う。
Lesson 6 定義②	①運動をせずに、食べてばかりいると、太りますよ。 ②もしあなたが、自分さえよければいいと考えているとするなら、それはとてもいけないことだ。 ③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かうことこそ、弁護士の役割である。
Lesson 7 比較・対照 ②	①速さという点では、飛行機は船とは比べものにならない。 ②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。 ③現代人の生活にとって、クレジットカードは必要不可欠なものである。
Lesson 8 意見②	①その会社は給料がいい。しかも、残業がほとんどない。そのため、その会社で働きたい若者は多い。 ②私は、親が子どもをしつけるのは当然だと思う。 ③両親や先生とよく相談した上で、日本への留学を決めた。

Lesson 9 換言・例示	「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」
Lesson 10 根拠・判断 ②	①私は、安定した給料よりも、むしろ自由な時間が多いほうがいい。 ②いつもは節約のために自炊しているが、時には外でおいしいものを食べることもある。 ③一度約束した以上、守らなければならない。
Lesson 11 ことわざの 説明	①そのニュースは、韓国をはじめ、アメリカやヨーロッパ諸国などに伝えられた。 ②お金がなくても、あなたさえいれば、私は幸せだ。 ③日本のことわざ

結果と課題

<春学期>

欠席や遅刻も少なく、課題の提出率もよかった。テキストの語彙リストは例文の理解に大いに役に立っていたが、その一方でリスト外のよりやさしい語彙や漢字にも苦勞している学生も多く、やさしい例文を提示して文型が理解できても、テキストの例文はよく理解できないと感じている学生も少なくなかった。また、構成に沿って文章を書くために、学生は辞書を使用していたが、辞書から適切な語彙が選択できず、かえって読み手に意味が伝わらなくなってしまった。そのため、授業内では一度課題作文を提出して添削を受けた後、再度自分で清書し直すよう促した。テキストの例文をどのように扱うか、今後検討が必要であると思う。

<秋学期>

少人数のクラスでもあり、クラスの雰囲気は和やかで、助け合う様子も見られ、クラス運営はやりやすかった。例文には語彙や内容的に難解なものがあったが、辞書や語彙リストを使いながら、理解しようと努力する姿が見られた。作文は例文と同じようにはいかなかったが、目標とする構成には収まるようにはできていた。ターゲットの構文だけでなく、間違いの頻度の高かった助詞の用法なども後半には改善が見られた。10課11課の「漢字一文字で自分を表す」、「ことわざで自分の経験を語る」というテーマは難しいのではと思ったが、出来てきたものは独創的で面白く、発想が豊かであると感じた。最後に一人ずつ良かったものを読んで発表してもらったが、こういったことが今後の書く学習への自信につながれば良いと思った。

<J4 聴解・会話>

担当者名： <春学期>高嶋幸太 <秋学期>山内薫

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 11 名 秋学期 12 名

使用教材：『新・毎日の聞き取り 50 日（上）（下）』凡人社、『ロールプレイで学ぶ 中級から上級への日本語会話』アルク

目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

基本的に授業の最初にクイズを行い、その後、スピーチ・発表、会話、聴解という流れで進めていった。扱うことが多く、進度に遅れが出る可能性があるかと思われたが、シラバス通りに進められたが、やや理解に時間がかかる履修者もいたため、やや調整が必要だった。

<秋学期>

スピーチ・発表（20分）・会話（40分）、聴解（30分）の3部構成で授業を実施した。スピーチ・発表においては、スピーチ2回（テーマ：最近の出来事、旅行の思い出を伝える）、発表（大学内でのインタビューのまとめ）、練習したロールプレイ披露を行った。会話はロールプレイ（テーマ：注文、支払い、授業後の誘い・断り、勘違い時の対応、人物描写）を練習した。聴解では、教科書を用いて、各週のテーマの聴解を行った。毎週の宿題として、音声データ（モノログ、練習したロールプレイのサンプル会話）を聞き、宿題プリントを提出させ、クイズとして、同様の音声で穴埋めクイズを実施した。期末テストは、聴解とロールプレイの2つに分け実施した。

結果と課題

<春学期>

当初の頃は教材の語彙や漢字が難しく、適宜説明を加えていたが、後半になるにつれて、理解できる漢字や語彙も増えていった。それと同時に、使えるようになった語彙や表現も増していった点が結果として挙げられる。

課題としては、時間配分に関してである。前述のとおり、本授業はスピーチ・発表、会話、聴解という流れで進められるのだが、スピーチ・発表の前のスクリプトの確認などにあまり時間が取れなかったという点である。この部分にもコメントなり、フィードバックなりがあれば、さらに学習者は校正を施せたのではないかと思われる。以降の課題としたい。

<秋学期>

学生同士の仲が良く、授業態度は熱心で、和やかな雰囲気クラスであった。宿題においては、大半の学生が遅延することなく提出する一方、数名の学生の提出がなく、提出の差がクイズの結果に顕著に表れた。スピーチ・発表、特にインタビューは、準備段階から発表まで、全員が大変楽しそうに行っている

様子が窺えた。ロールプレイでの友人同士のカジュアルな会話スタイルでの発話には苦勞している学生もいたが、段階的に慣れていき、期末テストでは練習の成果を発揮できていた。

聴解においては、時間が不足している場合は省略が可能と伺っており、他の活動（特に、スピーチや発表の日）は時間が延び、聴解を省略し、時間を調整した。宿題において各自で聴解に取り組んではいるが、より詳細な点まで聞き取ることができるように、授業でもう少し扱う時間を増やせるように、今後、工夫していきたい。

2018 年度 「J5～J7 文法・文型」 授業記録

コースの概要

J5～J7 の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週 1 回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2 レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2、N1 レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7 のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験 N1 レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名：<春学期>草木美智子 <秋学期>長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 31 名 秋学期 22 名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
---	-------	----

1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions
3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが (に)、やはり (やっぱり)、どうせ、つくづく	
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方	

授業の方法

<春学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。文型の導入においては、絵や写真をふんだんに取り入れ、文型の意味や使い方をわかりやすく示すことを心がけた。また、練習も単調にならないよう、ペアワークなどを適宜行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

毎回、翌週授業で扱う課を読んで、Comprehension check をやってくることを課題とした。授業は1回に1課のペースで進めた。まず文型の意味、使用場面、接続の形、注意点などを説明し、必要に応じて類似文型・表現と比較し、違いを説明した。例文は、テキストの他に、そのときに話題になっているできごとや学生の関心のあることなども使って提示した。その後、学習した文型を使って、簡単な文作成や文完成問題をした。毎回、学習した課の文型を使った短文作成や文完成問題を10程度宿題にし、翌週フィードバックをした。

結果と課題

<春学期>

授業では復習をしながら丁寧に進めていったつもりである。だが、レベル差もありクラスでは十分に

理解できなかった学生もいた点を反省している。また理解はできていても、活用等が十分に定着していない学生もいた。それらの解決策として、毎回の宿題を丁寧に添削し返却時に個別 FB を行った。J5 は扱う項目も多く混乱しやすいので、わかりやすく、かつ実際の場面で使えるようにすることを常に考え、授業を改善していくことを今後の課題としたい。

<秋学期>

全体的にまじめに授業に取り組んでいた。コース終了間際に風邪などで欠席した学生はいたものの、出席状況も宿題の提出状況も良好だった。何名かの学生はコースの最後まで予習をきちんとしており、宿題でもよく考えて文を作成していることが窺えた。その成果はコース後半になって現われてきた。今学期は、期末テストの結果を見ると、形式名詞と副詞に関する問題の間違いが多く見られた。今後はこれらを正しく使えるよう、授業を工夫したい。

<J6 文法・文型>

担当者名： <春学期>a クラス：草木美智子 b クラス：斉藤紀子

<秋学期>a クラス：長島明子 b クラス：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 a クラス 24 名 b クラス 24 名

秋学期 a クラス 21 名 b クラス 20 名

使用教材：独自教材

目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型の理解を目的とする。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由の表現」 ために、ばかりに、からといって／だからといって、あまり 「目的の表現」 V さんがため (に)、V-Volitional と
2	「感情・心情・評価の文型」 ～てしようがない／～てしかたがない／～てならない、～てたまらない、～限りだ、～と いったらない (～ったらない)、～ずにはいられない／～ないではいられない、～ずには おかない／～ないではおかない、～てやまない、～極まる／～極まりない／～の極みだ、 ～の至りだ

	<p>「評価の文型」</p> <p>～だけに、～だけあって、～にしては／それにしては、～のわりに (は) /～わりに (は) /そのわりに (は)</p>
3	<p>「不快を表す文型」</p> <p>～だらけ、～まみれ、～がましい、～たらしい (～ったらしい)、～にもほどがある、～にたえない</p> <p>「非難・軽蔑を表す文型」</p> <p>～ぶる、～じみた、～っぽい、～くせに (くせして)、～なんか／～なんて、～ごとき、～ときたら、～にひきかえ／それにひきかえ、じゃあるまいし (ではあるまいし)、Noun +に (として) あるまじき+Noun</p>
4	<p>「判断を表す文型」</p> <p>～までもない／までのこともない、～には及ばない、～にはあたらない、～ほどのこと (もの) ではない、～かねる、～っこない、～にすぎない、～ないことはない、～までだ／までのことだ、～如何だ／～如何で・によって V、～次第だ／～次第で V、</p> <p>「理性的評価を表す文型」</p> <p>～に足る／値する、～に恥じない</p>
5	<p>「推察・推量を表す文型」</p> <p>～にほかならない／～にほかならぬ+Noun (人)、～にかたくない、～がたい、～かねない、～恐れがある、～ないとも限らない、～まい、～と見える、～げ</p>
6	<p>「人や物の状態・性質を表す文型」</p> <p>～のきらいがある、～がちだ、～気味だ、～つつある、～たてだ、～かけだ、～っぱなし、～まま、AかたわらB、AがてらB、AかたがたB、AついでにB</p>
7	<p>「人や物の状態・性質を表す文型 2」</p> <p>～向きな、～向けな、～ごろ、～盛り、～めく、～つく、～たつ、～放題、～なり、～さ、～み</p>
8	<p>「義務・当然を表す文型」</p> <p>～べきだ、～べきだった／～べきではなかった、～べく～、～べくして～、～てしかるべきだ、～ (ない) わけにはいかない、～しかない、～ (より) ほか (は) ない／～ (より) ほか～ない、～ざるをえない、～ないではすまない／～ずにはすまない／～なしにはすまない～を余儀なくされる／余儀なくさせる</p>
9	<p>「その他の文型 1」</p> <p>～かいがある／～がい、～きつての、～ぐるみ、～こそ、～からこそ／～ばこそ ～んです、～てこそ、～こそすれ、～ずじまい、～たりとも～ない／～な (禁止)、～ふりをする、～たことにする／～たことになる</p>

10	<p>「その他の文型 2」</p> <p>～だに～ない、A くらいならむしろ B 方がいい／方がました／～なさい、A (という) よりむしろ B、せめて～だけでも (いいから) ～、～つ～つ、～つける、～こなす、～慣れる、～抜く、～通す、～切る、～尽くす、～終わる、～終わる、～やむ、～始める、～出す</p>
----	--

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

毎週 1 課を目標に授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。文型の導入においては、絵や写真をふんだんに取り入れ、文型の意味や使い方をわかりやすく示すことを心がけた。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

(b クラス)

基本週 1 課ごとにと進むことを目標にしたが、項目数や難易度の高さにより、思うように進まず、翌週に残すことも多かった。授業では基本教材の例文を OHC で投影しながら特に重要と思われる部分を共有しながら解説した。その後、短文を作ったり、前件、後件どちらかを考えさせるなどの活動を行いながら理解の確認を図った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を課した。

<秋学期>

(a クラス、b クラス)

授業はテキストに沿って 1 回に 1 課のペースで進めた。授業では文型の意味、接続の形、注意点、類似文型・表現との違いなどを説明した。例文は、テキストにあるもののほかに、類義表現が多く出てくる課では、その違いがわかるような例文も提示した。また、テキストの例文に使われている語彙の中で未習と思われるものは、その都度読み方と意味を確認した。その後、学習した文型を使って簡単な文完成問題の練習をした。毎回、学習した文型を使った短文作成や文完成問題を 10 文程度宿題にし、翌週フィードバックを全体及び個別に行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

熱心な学生とやや受身の学生に分かれたが、クラスの雰囲気は良かった。だが、予習前提のクラスにも関わらず、きちんと予習をしている学生は少なかったのは残念である。

課題としては、扱う項目が多すぎて毎回 1 課を終わらせるのに必死になってしまい丁寧に授業ができなかった点がある。例文もいくつかを全体で確認し後は各自で確認するよう指示をしたが、それが徹底できていたかどうか疑問である。J6 は扱う項目、類似表現も多いのに加え、語彙が難解なので予習徹底

をもっと促すべきだったと反省している。また、回を重ねるごとに全体的に活用が苦手、定着していない学生が目立ってきた。そのため後半の宿題では自由文作成と活用を書く文を適宜出すようにした。今後は最初からこの形式を採用したほうが良いと感じた。今後も学生が実際に使える場面を想定し、模索しながら授業を行うことを課題としたい。

(b クラス)

静かではあるものの熱心な学生が多く、クラスの雰囲気は良かった。短文作成の宿題への取り組みの真剣さが個々の学生の伸びと比例している印象で、いろいろ工夫して文を作ってくる学生は定着や理解が良いと感じた。一方ターゲット項目以外の基礎的な部分がわかっていないため毎回適切な文が作れず、かなり細かくコメントを加えて返却してもあまり改善が見られなかった学生もいた。そういった学生が主に D 判定になった。また何度か明らかに何かから例文を引いて宿題をしている学生がいたが、それに関しては指摘や注意が難しいと感じることもあった。教材の例文にかなり難しい言葉が入っており、語彙のいい学びにはなるものの、そこがネックになって文の意味理解ができないという場面もあり、難しさを感じた。

<秋学期>

(a クラス)

履修登録者は 21 名だったが、実際に履修したのは 7 名だった。この 7 名はまじめに授業に臨んでいた。体調不良のため宿題の提出が遅れ気味の学生がいたが、他の学生の提出状況は良好だった。学習項目の文型・表現の理解は全体的によく、宿題の短文作成でも正しく使えていた。まじめに取り組んだ成果はコース後半になって現れ、伸びが見られた。しかし一方で助詞やテンス・アスペクトの間違いが散見した。今後は学習項目とともに、助詞やテンス・アスペクトなども正しく使えるよう授業を工夫したい。

(b クラス)

真面目な学生が多く、熱心に授業に参加していた。また、出席率、宿題提出率ともに高い学生が多かった。積極的に質問や意見が出る雰囲気もよかったと思う。ただ、短文作成の取り組みには多少差があり、これは、試験結果に反映されたように感じる。この授業では、扱う項目が多いため、時間をかける項目を決めて授業を展開していったが、類義表現を多く扱う課では質問があり、解説に時間を割いてしまうこともあった。そのため、類義表現の提示の仕方を今後の課題としたい。また、教科書には難易度が高い語彙があるため、予習の徹底が必要となるだろう。

<J7 文法・文型>

担当者名： <春学期>小林友美

<秋学期>a クラス：数野恵理 b クラス：嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：<春学期>12 名

<秋学期>a クラス 29 名 b クラス 22 名

目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	①名詞＋ながら ②～ながら（逆説） ③～まま ④～つつ ⑤～つつある。
2	意向形 ①～（よ）うか～まいか ②～（よ）うが／～（よ）うと／～かろうが／～かろうと ③～（よ）うが～まいが／～（よ）うが～まいと 語彙とニュアンスの似ている表現 迂闊な、機嫌、体裁
3	「ところ」 ①～どころか／～どころではない ②～ところだった ③～ところに／～ところを ④～ところによると／～ところによれば／～ところでは ⑤～ところまで来る／～ところまで行く 語彙とニュアンスの似ている表現 苦情／不平不満／文句／クレーム／愚痴
4	「まで」 ①～まで／～までに／～までになる ②～まで／～までして／～てまで ③～までだ／～までのことだ ④～までもない とりたての助詞

	こそ、も、とか
5	<p>「時」を表す文型 1</p> <p>①～そばから ②～が早いか ③～や否や／～や</p> <p>似ている意味の使い分け 空き／空（から）、あたたかも／いかにも</p> <p>色々な意味を持つ動詞</p>
6	<p>「時」を表す文型 2</p> <p>①～か～ない（かの）うちに ②～なり ③～たとたん（に）／～た矢先に ④～た弾みに／～た拍子に</p> <p>まとまりで覚えたほうがいい表現</p> <p>①～ても～よりほかに～はない ②～と、～ばかりでなく、ひいては～につながる ③～ので／～ば、～ないで／～ずに 済む ④～たら、～でも／だって、～たくもなる／たくなる ⑤～だけど／だが、どんな（に）～でも、ないよりは（ずっと）まだ ⑥～は～の現れだと解釈できる／受け取れる／思う／思われる／理解できる</p>
7	<p>「時」を表す文型 3</p> <p>①～次第 ②～度に ③～につけ／～につけても ④～につけ～につけ ⑤～折に ⑥～際に／～節に</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①～もしない＋名詞／で／くせに ②少しでも＋意向形＋ものなら、すぐに ③～も考えようによっては ④～（である）ことは、誰の目にも明らかだ ⑤～をもてあます</p>
8	「時」を表す文型 4

	<p>①～かけだ／～かける／～かけの ②～しなに／～がけに ③～際／～間際</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①～に越したことはない ②～のをいいことに ③～は～を物語っている</p>
9	<p>複合動詞</p> <p>①～損なう／～損ねる／～損ずる ②～違える ③～過ぎる／～過ごす ④～まくる</p> <p>覚えたほうがいい表現</p> <p>①～かと思いきや ②～とあれば／～とあっては ③～を皮切りに（して）／～を皮切りとして ④～に至るまで ⑤～を限りに／～を潮に ⑥～をもって／～をもってすれば／～をもってしても</p>
10	<p>副詞の呼応</p> <p>①たとえ／いくら～ても / どんなに～ても ②～たら～で／～ば～で／～なら～で ③～であれ／～であろうと ④～ならいざ知らず／～ならともかく ⑤～ならまだしも／～からまだしも</p> <p>覚えたほうがいい文型</p> <p>①～はおろか／～は言うまでもなく／～は言うに及ばず ②～もさることながら ③～と相まって ④～を踏まえて ⑤～始末だ</p>

授業の方法

<春学期>

授業は1回に1課のペースで進め、毎回、翌週授業で扱う課を読むことを予習とした。教科書の例文で、文型の意味、接続、用法などについて、Q&Aをしながら、確認した。その後、教科書の問題以外に、教師作成の前件後件作りや簡単な文作成問題を実施した。適宜ペア、グループ活動も取り入れた。毎回の宿題では、その日に学習した文法、語彙を使用した短文作成を課した。

<秋学期>

aクラス、bクラス

春学期と同様の方法で、授業を進めた。

結果と課題

<春学期>

出席率が高く、宿題も欠かさず提出するなど、大変真面目に熱心に取り組むクラスであった。毎回、学習した表現を用いて短文作成をする宿題を課したが、積極的に新しい語彙や表現を使用したり、1つのテーマで複数の文型を使用して文作をしたりと、時間をかけて取り組む学生が多かった。このような努力が、中間、期末試験の点数に反映したようだ。J7の文法は、毎回、似ている表現が複数出てくるため、細かい意味の違いに重点を置いて、授業設計をした。宿題を添削すると、学習項目の理解はしているものの、助詞や活用などの誤用が目立ったため、基礎的な部分の復習をする必要を感じた。また、ペアやグループで例文を考えさせる活動も行ったが、授業進度によっては、省略した回もあったため、今後は、運用力を伸ばす活動時間の確保を目指したいと思う。

<秋学期>

(aクラス)

aクラスは「大学生の日本語D7(济理)」と併置のコースで、履修生の大部分が正規の学部の1年生で、その他の学生は大学院生であった。そこで、時間に余裕のある日は、レジユメの書き方や引用の仕方、参考文献の書き方などの確認や練習もした。大学の授業に直結する学習には積極的な姿勢を見せたが、新しい文型の学習に関しては学習意欲の低い学生もいた。課題に真面目に取り組んだ学生は文型が定着したが、身につかない学生もいたのが残念である。読みやすいレポートを書くためには正確さが必要であるが、習った文型を使って文を作らせると、助詞、アスペクトなどの間違いも見られたため、新しく導入する上級の文型の用法だけでなく、基本的な文法の正確さを高めていくことも課題だと感じた。

(bクラス)

bクラスは特別外国人学生とビジネスデザイン研究科の大学院生が在籍するクラスであり、出席者は総じて学習意欲が高かった。ただ、宿題として毎週課した短作文では、ほとんどの学生が自分自身で文を考えてくる一方で、何人かの学生にはインターネットからのコピーが散見された。そしてそのような学生は、文型に対する理解度が低くなりがちであり、中間と期末テストの点数も低かった。普段聞き慣れない文型も多い中で、そのような文型学習への意欲を維持させる工夫をすることを、今後の課題として挙げたい。また熱心な学生から質問が多く出ることにはよかったが、質問に対する説明に多くの時間を割いて

しまうことも少なくなかった。説明と練習の時間配分も、今後の課題である。

2018年度 「J5～J7 読解」授業記録

コースの概要

J5～J7の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5、J6では説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの文章を取り上げ、読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、要約やディスカッションを行なう。J7では、より長い文章を読み、内容理解をした上で要約したりレジュメを作成したりすることを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

<J5 読解>

担当者名：<春学期>保坂明香 <秋学期>神元愛美子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期17名、秋学期10名

使用教材：独自教材

目標

様々な分野の読解教材を数多く読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。また、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに様々な読むスキルを学ぶ。

授業の方法

<春学期>

初回クラスでは、精読や速読など読み方には様々な種類があることを伝え、目的に応じた読み方ができるように、多種の教材を扱った。手紙文、新聞記事、小説等である。基本的には予習先行型で授業を進めた。宿題として、テキストの読解と内容質問の解答、語彙の予習を課し、文意が理解できない部分がある場合は、線を引くように指示した。また、語彙習得のために、読解のクラスの日を選択式の語彙クイズを実施した。

授業は予習先行型であったため、学生の質問に答えることから始め、教師からの口頭質問やペア活動、書いて答える問題等で内容の確認をし、理解が深められるよう努めた。

教材はこれまでJ5読解クラスで使われてきたものを使用した。授業内容「筆者の意見を読み取る」回のみ、教材を新聞の「声」欄に差し替えた。教材はブラックボードに載せ、学生はオンラインツールや辞

書等を用いて読み、要点をまとめ、記事を読んでいない学生に内容を伝える活動を行った。

<秋学期>

授業は、1週間にテキスト1課を行い、時間があれば、内容に沿ったディスカッションを行った。基本的に本文の読解は自宅で行い、内容理解のためのリーディングワークシートを宿題とした。授業ではその確認を行った。スキミングや内容予測等のリーディングストラテジーを学習する際は読み方を指導し、授業内で初見の文章を読んだ。また、授業後半では実際の新聞の社説にも挑戦した。さらに語彙力をつけるために読解教材の語彙リストを配布し、授業開始時に語彙リストから作成した語彙クイズを実施した。

結果と課題

<春学期>

全体的に大人しい学生が多く、ペア活動には意欲的に取り組むものの、クラス活動に対しては消極的な様子が見られた。クラスの雰囲気慣れ学習同士の距離が縮まると、積極性が徐々に増していったが、活発に意見が述べられる、交換されるということは少なかった。

語彙力および聴解力が十分ではなかったためか、口頭で内容質問の解答をするのが難しいことがあったため、パワーポイントやプリントで内容質問を読ませ答えを記入させてから、クラスで共有するという進め方を多く取り入れた。

前述したように、クラスでは様々な種類の教材を扱ったが、未習語彙が含まれた読み物を、推測を使って読むことを苦手とする学生が多くいた。全ての未習語彙を調べてから読むという読み方に慣れているようである。今後も様々な読み方に触れ、目的に応じた読み方が自然にできるようにトレーニングを続ける必要があると考える。

<秋学期>

今学期のクラスはレベル差があったものの、自宅学習をしっかりと行う学生が多かった。学生同士の仲が大変よく、常に助け合い、互いから学んでいた。授業中はペアまたはグループワークの機会が多かったが、まずは学生同士で問題に取り組み、それでも理解できない場合は教師に声をかけていた。読解が得意な学生もピアにわかりやすく説明することで文章の内容をより深く理解できたと思う。

授業では様々な分野のテキストに触れることができた。読解教材の他に実際の社説にもチャレンジし、日本の社説特有の書き方にも触れた。授業を通して読む目的と読み方を意識して読めるようになった。ただ、授業回数に限られているため、授業内で初見の文章を読むことが少なく、応用力をつけることが難しかった。これから様々なテキストを読んでより力をつけてほしい。

<J6 読解>

担当者名：<春学期>aクラス：数野恵理、bクラス：藤田恵

<秋学期>数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 17 名、b クラス 18 名、秋学期 27 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

<春学期>

説明文、意見文、新聞記事、小説など、さまざまな読解教材を取り上げ、読解のストラテジーを意識させる練習を行った。毎回一つ読解の宿題を課し、クラスでは内容確認やディスカッションを行った。読解クラスの目標の一つとして挙げている語彙の拡充のために、読解教材から選び出した語彙リストをオンライン上で配付して予習させ、語彙クイズを行った。授業では予習で読んできたものと同じテーマの読み物を速読で読む練習もした。このほか、要約の練習や分担読解も取り入れ、読んだ内容を他の人に伝える練習も行った。

<秋学期>

授業の進め方は春学期と同様であるが、扱う教材を一部変更した。春学期まで J5-7 で同じ作家の短編小説を扱っていたが、それぞれのレベルで別の作家の小説が読めるように秋学期は別の作家の小説に変更した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

学期のはじめは遅刻が非常に多かったが、クラスの冒頭に漢字語彙クイズがあることがわかって、遅刻が減った。また、漢字圏と非漢字圏の学生の交流が少なかったが、毎回混ぜてグループワークをしていたところ、活発に発言し合うようになった。漢字圏の学生の方が言葉の意味をよく知っているものの、非漢字圏の学生の方が正確に読み取れている場合もあり、お互いに助け合って活動を進めるようになった。要約については学期を通して複数回練習したが、学期末テストでは、正確に内容を把握できていない為に要約がまちがっている学生、理解しているのかもしれないが接続詞の使い方が不適切な為に正しく要約できていない学生も見受けられた。これについては今後の課題としたい。

(b クラス)

履修者 18 名のうち、期末テストまで出席していたのは 15 名であった。このうち非漢字圏は 5 名程度

おり、特に新聞記事の読解で漢字語への配慮が必要な場面があったが、学生自身が未習語彙と漢字語彙の獲得に非常に熱心で、学期が進むにつれて、辞書なしでも読めるようになり、漢字圏の学生との読むスピードの差も縮まっていった。学期中に数回取り入れた構成を意識した読解では、内容理解の助けとなる点を全体に確認してから読むようにし、漢字圏、非漢字圏とも学びが多かったようである。特に漢字圏は、漢字語のみを拾って読んでいき、誤読をすることが多かったが、構成を意識するようになってからは、理解が深まったように思う。今後の課題には、未知語が含まれる読み物を前後から推測して読んでいく練習を取り入れることを挙げる。辞書を多用している学生に対し、前後から推測して読むことをたびたび指導した。上手く機能した学生もいたが、一方で理解が得られずに最後まで辞書が手放せずに、読むスピードが上がらなかった学生もいた。活動目的を学生全体に理解させることと、指導方法の改善が必要であると思われる。上級レベルに進む J6 レベルの学生に対して、読解力が上がる指導を検討していきたい。

<秋学期>

このクラスは「大学生の日本語 C6 (済理)」と併置のクラスであったため、必修科目として履修していたる学部生もいたが、漢字圏の学部生に動機を持たせるのに苦労した。クラス内で速読をさせると漢字圏の学生がすぐに読み終わってしまうため、別のタスクを課すなどしたが、学習意欲を持たせるのが難しかった。

特別外国人学生の学生も読解力に差があったが、学生たちは協力的にグループ活動に臨んだ。春学期に課題であった要約は、今学期は学期のはじめからあまり大きな問題はなく、比較的よくできていた。J6 読解クラスではこれまで新聞記事など比較的短い文章を扱うことが多かったが、余力のある学生もいるため、来年度はもう少し長めの文章を読む機会も設けたい。また、指定されたテーマの資料を探してきて他の学生に説明する活動をするなど、学習意欲を高める工夫をしていきたい。

<J7 読解>

担当者名：<春学期>井上玲子

<秋学期>a クラス：神元愛美子、b クラス：嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 26 名、秋学期 a クラス 24 名、b クラス 21 名

使用教材：独自教材

目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

<春学期>

クラスでは、社会的、文化的背景が盛り込まれた長文のテキスト以外に、新聞記事、小説など、様々なスタイルの文章を扱った。教材は宿題として事前に読んでくることとした。授業ではペアまたはグループで内容確認を行い、その後、内容把握の理解について問う問題を行った。時間があれば、学生の国との比較やディスカッションを取り入れた。また、学期中盤から天声人語も並行して扱った。クラスで要約のポイントを説明した後、100字以内に要約する練習を行った。クラスで要約練習の時間が取れなかった時は、宿題とし、授業冒頭で模範解答を見せながらフィードバックを行った。

学期末には星新一の小説を扱った。ペアまたはグループで内容の確認を行った後、ストーリーの内容を短くまとめるために、あらすじを書く練習を行った。

<秋学期>

(a クラス)

春学期と同様の方法で、授業を進めた。漢字圏の学生が多かったため、内容理解に時間がかからず、毎回ディスカッションも行った。また、レジュメの作成も適宜実施した。天声人語の要約は学期前半から導入し、要約出来るようになるまで何度も宿題にした。学期末には芥川龍之介の小説扱った。その際に宿題としてグループで内容把握をさせ、授業ではゼミ形式で発表させた。

(b クラス)

春学期と同様の方法で、授業を進めた。ただ天声人語は学期前半から取り入れ、要約の練習を多く行った。また学期末には、芥川龍之介と筒井康隆の短編を扱い、あらすじを書くのではなく口頭で説明する練習を行った。

結果と課題

<春学期>

特外生が8名、大学院生が19名の計26名が履修し、受講生の大半が漢字圏の学生であった。漢字圏の学生は、漢字を多用したテキストや新聞記事も早いペースで読み進めていた。しかし、漢字圏以外の学生も数名いたことから、学生間で語彙力・漢字力に差があり、テキストの読解や内容理解の問題を解くスピードに差が出た。テキストを事前に読んでくることを宿題としたことで、問題を解くスピードの差は解消できたように思う。

学期の中盤から天声人語を使用して、要約練習を行ったが、この活動では漢字圏、非漢字圏に関係なく、国で要約練習をしたことがない学生が多く、苦戦しているようであった。クラスで要約のポイントを説明したり、学生が書いた要約を使ってフィードバックをしたりして、要約練習に時間をかけた。そのため、読解練習では内容理解の問題で終わってしまい、学期中盤以降はディスカッションの時間が取れなくなった。今後は学生の意見や自国の状況を述べる時間を確保できるように、時間配分に気をつけたい。

受講生は皆意欲的に参加し、真面目に課題に取り組んでいた。一方で、学期初めや途中から出席しなく

なった学生が数名いた。単位取得が必須ではないのが理由だと思われる。単位取得の有無に関わらず、履修者がそれぞれ自分の日本語学習を意味づけ、積極的に授業に参加できるようにするためにはどのような授業運営が考えられるかを検討していきたい。

<秋学期>

(a クラス)

a クラスは全員、「大学生の日本語 C7」として履修する経済学部と理学部の学生であった。漢字圏の学生が多く、語彙や内容理解で困ることは少なかった。基本的に読解の内容理解問題は宿題にしていたが、読むスピードに問題がなかったため、授業内で初見の文章を扱うこともできた。読解力はあったので、論理的に内容をまとめ、他者に説明するトレーニングと意見交換に力を入れた。毎週のように出したレジュメ作成、要約の宿題は学生からは量が多いと意見が出たが、結果は出たように思う。課題は読解後の活動である。話し合いや学生主導で行うゼミ形式の読解活動を試みたが、学生は消極的でいつも決まった学生が発言していた。そのため、それ以上に理解を深めることが難しかった。個人作業の読解からその先へ、対応できる力をつけられるような授業展開が今後の課題である。

(b クラス)

b クラスは特別外国人学生とビジネスデザイン研究科の大学院生が在籍するクラスだった。漢字圏と非漢字圏出身の学生が混合していたが、時間がかかる読み物は宿題とすることが多かったため、授業内でその差が顕著になることはほとんどなかった。教師として課題に感じたのは、コース内での連続性である。毎週一つの読み物を宿題として課し、授業で内容確認及び他の活動を行う、というサイクルを繰り返していたため、一つのトピックを多角的な視点から見たり深めたりすることはできなかった。新聞記事、論説文、小説という読み物のジャンルに沿ったつながりはあったが、トピック間でもつながりを持たせることができれば、よりよかったと思う。ただ今回のクラスには意欲的な学生が多かったので、学生それぞれが各トピックに意義を見出しながら、モチベーションを維持してくれた。

2018 年度 「J5～J7 作文」授業記録

コースの概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

<J5 作文>

担当者名：<春学期>a クラス：長島明子、b クラス：東平福美、三浦綾乃

<秋学期>三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：<春学期>a クラス 14 名、b クラス 13 名

＜秋学期＞15名

使用教材：独自教材

目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

(a クラス)

授業は毎回1課のペースで進めた。学期中、6つのテーマで800字程度の作文を書いた。授業ではその課のポイントを説明し、テキストの練習に進んだが、課によっては練習の前にペアやグループで構成や内容について話し合った。構成メモは、初めは授業で書いて教師が確認したが、コース後半は宿題にした。フィードバックは、複数の学生が間違ったところなどについて全体で確認し、その後、各自で自分の作文の間違いを訂正したり、ペアでお互いの作文をコメントし合ったりした。

(b クラス)

毎回テキストに沿ってレポートや作文の構成、要約などの方法を教え、その後、宿題で練習問題を使って実際にレポートや作文を書かせたり、要約を行わせ、次の授業で提出させてフィードバックを行うという流れで、授業を行った。できるだけモデルとなるような良い文章やフォーマットを最初に見せて、よく使われている言い回しなどを教えた。その後に独自性を持たせるために、トピックに対する学生の意見を交換させてから書かせた。フィードバックを行う際も、先に学生同士でピア・レスポンスさせ、そのあとに教師がチェックするという形で進めた。

＜秋学期＞

授業は10課から成るテキストに沿って、基本的に1回に1課のペースで進めた。授業でその課のポイントを説明し、テキストの練習に進んだ。しかし、内容の多い課は2日目に1日目で十分に扱えなかった点を説明・練習することもあった。作文の構成や内容を練るために学生同士で話し合うこともあった。課が終わるごとに、800～1000字の課題作文を宿題にした。多くの学生が間違えた文法や表現などはクラス内で全体に向けてフィードバックした。特に意見の引用をするときの文型表現、書き言葉、呼応の表現などを丁寧に扱った。また、課題作文を教師に提出する前に、学生同士で作文を読み合っただけでなく、クラスメートの作文を直したり、コメントしたりする活動を多く行った。学期中はリライトの作業を一度行った。また、学期中盤からはWordで作成した作文の提出も認めた。その際に、パソコンでの作文の書き方も指導した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

コース前半は、原稿用紙の使い方や構成メモの書き方がよくわからない学生もいたが、回が進むにつれて、慣れていき、学期終了時には整った構成で、自分の意見をいろいろな表現を使って述べるようになった。しかし、何人かの学生の作文に、母語の干渉によるものとみられる間違いが散見された。また、要約に関しては、要約の方法は理解できたものの、読解力不足で要点を把握できないため、内容をまとめられない学生が多かった。今後は、誤用訂正や要約練習の効果的な方法を検討したい。

(b クラス)

熱心な学生が多く、クラスの雰囲気はとても良かった。発想も豊かで、書きたいことを上手に伝えるようにそれぞれ工夫をこらしていた。一方で課題もある。昨年度同様、語彙や漢字の知識量に学生同士で差があり、クラスメイトが話したり、書いたりしたものを理解できない学生もいたので、ピア・レスポンスするには工夫が必要であった。また、普段は辞書を使用して書かせていたのだが、期末テストでは辞書が使用不可だったため、普段の作文と期末テストの作文とでは出来に差があった。もう少し自身の言葉を使って書けるように定着させられたら良いだろう。最後に、連続欠席の学生も数名おり、期末テストを受験しなかったのは非常に残念である。

<秋学期>

履修者 15 名のうち、残念ながら 3 名は初回の授業から欠席が続き、結局一度も出席することはなかった。他の 12 名は非常に出席率がよく、熱心に授業と課題に取り組んでいた。互いに作文を見せ合うことを初めは恥ずかしがっていたが、何回か行いうちにリラックスした雰囲気でも互いの作文を読み合い、いいところやアドバイスをしっかりコメントできるようになった。学期中盤からパソコンで打った作文の提出も認めたが、大学生としてレポートや論文を書くための良い練習になったのではないかと思う。授業に際してほしいの学生が予習を行っていたが、そうでない学生もいたため、学生間で理解するスピードに差がでてしまった。特に、モデル作文の理解には個人差が大きく出た。構成や文章表現を確認するためにモデル作文を読むのだが、漢字の読み方や語彙が分からないという学生もおり、作文というよりも読解のような活動になってしまい、結果として練習問題をやる時間が減ったり作文の構成を考えたりする活動が上手くできなかつたり、理解の早い学生を退屈させてしまうことがあった。理解の早い学生、理解するのに時間がかかる学生への対応が適切にできなかったため、これを今後の課題としたい。加えて、学生に予習の大切さを説明し、徹底させることも必要であると感じた。また、今学期はリライトが 1 回しかできなかったのが心残りであった。宿題の返却や作文課題などでスケジュールに余裕があるとは言えないが、今後は、できれば 2, 3 回リライトを行えるようにしていきたい。

<J6 作文>

担当者名：<春学期>a クラス：長島明子、b クラス：嶋原耕一、c クラス：数野恵理

<秋学期>aクラス：井上玲子、bクラス：金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 a クラス 23 名、b クラス 18 名、c クラス 20 名

秋学期 a クラス 13 名、b クラス 17 名

使用教材：独自教材、『Master of Writing』（立教大学）

目標

レポートや作文の構成について学習し、毎回 800 字から 1200 字程度のレポートが書けるようにする。また、自分の意見の論拠となる資料やデータを読み取り、要約し、レポート中に正しく提示できるようにする。その際、きちんとした構成で文章が組み立てられるようにする。

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

テキストに沿って、2回で1課のペースで進め、学期中4つのテーマでレポートを書いた。授業では各課の学習項目を確認し、資料の読解をした。その後、全体で構成について考えた。構成メモは宿題とし、次の回で、ペアやグループで話し合った。引用のしかた、参考文献の書き方は毎回確認し、間違えることが多い学生には個別に対応した。レポートは宿題とした。フィードバックでは、全体で間違いが多かったものを確認してから、個別にもフィードバックした。

(b クラス)

学期中に4本のレポート課題を課すペースで、授業を進めた。各課題については、図表の説明表現や引用表現の練習に加えて、読み物の読解、構成メモの作成、ディスカッションなどを実施した。4本中3本のレポートではリライトする時間も設けた。

(c クラス)

テキストに沿って4つのレポート（1200字程度）を作成した。1回目の授業では各課の学習項目を確認してテーマに沿った資料の読解をし、レポートを書く上で必要な表現や引用の方法を学習したり、どのような構成で書けばよいかを考えたりした。アウトラインを書くことは宿題とし、2回目のクラスではグループでアウトラインを発表して合ったり、クラス全体で引用の練習をしたりした。レポートは宿題とし、提出後、授業で間違いの多かったものをフィードバックして、書き直しをさせた。

<秋学期>

(a クラス)

テキストに沿って、2回で1課を終えるペースで授業を進めた。1回目では、まず、文法、語彙、文型の復習を行い、正確な日本語表現の確認をした。次に、テキストの他に Master of Writing を使用し、引用の仕方や引用する際に使われる表現、参考文献の書き方の確認を行った。最後に、各課のテーマである

課題文（新聞記事）を読み、それを用いて実際に引用する練習を行った。2回目ではレポートの構成をクラスで考える時間を設け、クラスメートと話し合いながらレポートの構成を考えてもらった。レポート作成は宿題とし、WORDで作成したものを Blackboard で提出してもらった。担当教師はスケジュールに組み込まれているフィードバックの時間までに添削をし、フィードバックの時間に学生に返却をした。フィードバックでは、まず修正箇所を赤でマークしたものを返却し、学生に考えてもらう時間を設けた。すべての箇所の修正が終わった学生から順に、教師と一対一で学生のレポートを読みながら修正箇所を確認していった。確認作業が終わった後は、クラスでリライト作成に取り掛かってもらい、クラス内でできなかった場合は宿題とし、再度 Blackboard に提出してもらった。

(b クラス)

J6 作文では、プレレッスンの後、4つのテーマを扱い、レポートを作成することを課題とした。授業では、独自教材のテキスト及び Master of Writing を用い、作文や論文におけるグラフの説明方法、引用方法、及び参考文献の書き方の指導を行った。さらに引用する際、特に盗用・剽窃に対する注意喚起を行った。課題として、意見文を書くための構成メモ、並びにレポートを提出させた。レポートは基本的に Blackboard で提出を受け付け、担当教員が添削し、クラス全体と個人に対しフィードバックを行った。学期中に3回のフィードバックを行い、原稿用紙を用いた書き直しを授業時間内で行ったが、その際の作文においては、学生が自らで考え修正できるように、担当教員はアドバイスをを行った。学生が書き直した作文に対しては、翌週に改めてフィードバックを行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

J6 では引用のしかたや参考文献の書き方を学習するが、引用を用いたレポートを書くのは、ほとんどの学生にとって初めてだったと思われる。そのためコース開始時は引用のしかたの間違いが多かったが、回を重ねるにしたがって、減っていき、最終的に基本的な引用方法は身につけられたように思う。しかし、何人かの学生には、直接引用のかぎカッコを入れ忘れていたり、参考文献を書き忘れていたりするなどの間違いが最後まで見られた。また、全体的に要約や言いかえを必要とする間接引用は苦手で、レポートに使える学生は少なかった。今後は適切な引用方法、参考文献の書き方を徹底するとともに、要約や言いかえの練習も多く取り入れたい。

(b クラス)

b クラスには、特別外国人学生とビジネスデザイン研究科の学生、計18名がプレイスされた。学習意欲が高い学生ばかりではなく、遅刻や欠席が多かったことが一つの課題だった。J6 で繰り返し練習する引用表現については、決まった形を覚えることが難しいようで、最後まで正確に書けない学生も多かった。導入や練習の方法を工夫するなどして、定着するような授業運営を、今後の課題としたい。

(c クラス)

先学期まで5つのレポートを書き、そのうち2つのレポートのみを書き直させていたが、今学期からレポートを一つ減らし、毎回書き直しをするという形になった。前に書いたものを書き直してから新しいレポートに取り組むという流れになったことで、間違いを次のレポートに反映させることができるようになり、学習効果が上がったと思われる。また、2週間に1回レポートを書くのは学生にとってかなり負担になっていたが、学生の負担も軽減された。cクラスは専門のコースが忙しいなどの理由で学期半ばで履修を中止した学生が多かったが、その他の学生は非常に真面目に取り組んだ。また、当初は正しく引用できず盗用・剽窃にあたるレポートを書いた学生が2名いたが、学期後半には概ね正しい引用の仕方を身に付けることができた。ただし、引用する際に、資料の内容を正確に理解できていないこともあるため、引き続き書く力とともに読解力も伸ばしていく必要がある。

<秋学期>

(a クラス)

履修者数は13名だったが、初回の授業から授業に参加した学生は5名と少人数であったため、非常に授業運営がしやすいクラスであった。毎回の授業内活動においては勿論のこと、レポートのフィードバックにおいても個別に時間を取って学生に対応することができた。5名のうち1名のみ非漢字圏の学生であったが、漢字の読解には問題がなかったため、新聞記事の読解も漢字圏の学生のスピードに問題なくついていくことができた。学生は授業態度もよく、ペアまたはグループ活動において課題にも真面目に取り組んでいた。日本語力の高い学生は理解できるまで積極的に質問をして吸収していき、授業で練習した内容をレポートにも反映させていった。一方で、引用方法や参考文献の書き方がレポートに反映されていない学生がいた。日本語の文法、表現の正確性やレポートの体裁を重視するあまり、剽窃に対する認識が欠けていたのではないかと考える。フィードバック時に個別に対応することで多少改善が見られたが、このクラスの目標は何か、それを達成するためのポイントとは何かを常に学生に意識させる工夫を授業で盛り込んでいくことが今後の課題である。

(b クラス)

17名が授業登録を行ったが、最終的に期末テストを受験したのは7名であった。最後まで出席した学生は、授業態度はよく、課題にも真剣に取り組んでいた。残念ながら一部の学生は授業登録をしたにもかかわらず、一度も出席しないか、或いは最初の1ヶ月で履修を辞退した。bクラスは非漢字圏の学生が4名いた。課題文は全てふりがなのない文章のため、非漢字圏の学生にとってハードルが高いが、課題文をテキストファイルで与えたところ、web上の学習サイトを利用するなどして、自分で読み方や意味を調べ、授業前に課題文を理解した上で授業に参加した。そのため、ピア活動で構成メモを持ち寄って話し合いをする際にも、お互いの意見交換が活発に行われた。最後まで残った学生はJ6レベルで学んだことを生かし、大変いいレポートが書けるようになったと思われる。授業では引用の表記の仕方を中心にを行ったが、学生からどんな場合に引用が必要なのかという質問を受け、後半の授業では、定義、現状の提示、意見のサポートとして引用を用いる練習を増やした。作文の授業なので形式の指導は重要であるが、引

用について学習者がすぐに理解できる教材の必要性を感じた。今回の学生の要望も踏まえて、今後もよりよい教材開発を行っていきたい。

<J7 作文>

担当者名：<春学期>平山紫帆

<秋学期>aクラス：山内薫、bクラス：藤田恵

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期29名

秋学期 aクラス13名、bクラス10名

使用教材：独自教材、『Master of Writing』（立教大学）

目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

<春学期>

授業は3回に1課のペースで進め、学期中4本のレポート課題を課した。各課の前半はテキストの課題文を読み、内容についてグループで意見交換をした後、構成メモを作成した。後半はレポート課題で使用する資料を受講者自身が準備し、それをもとに構成メモを再検討し、さらにピアで推敲をするようにした。課題を提出した翌々週にはフィードバックの時間を設け、間違いやすい表現を確認したり、各自の提出課題へのフィードバックをもとにリライトを行ったりした。

<秋学期>

授業は3回に1課のペースで進め、学期中4本のレポート課題を課した。各課の前半はテキストの課題文を読み、「内容理解とテーマの整理」についてグループで意見交換をした後、構成メモを作成し、レポートの準備を行った。後半はレポート課題で使用する資料を受講者自身が準備し、それをもとに構成メモを再検討し、さらにピアあるいはグループで推敲をするようにした。レポートの内1回は、課題に基づいたアンケートを作成し、収集した後にレポート作成を行った。フィードバックは、学期中に3コマを使用し、各自の提出課題に対するフィードバックをもとにリライトをし、再提出を課した。

結果と課題

<春学期>

今学期は、必修の正規学部生、正規院生、特外生の合計29名がプレイスされた。途中でリタイアした学生もいたが、最後まで大人数のクラスであった。そのため、毎回、グループ活動を取り入れ、グループ

で資料の検討やディスカッションを行った。学部 1 年生から大学院生まで、様々な学生がいたが、非常に熱心に取り組む学生が多く、毎回のディスカッションはどのグループも非常に活発に意見を交換していた。学生同士で考えを深め、新たな視点を見つけることができていたのは非常に良い点であった。

また、当初は論拠に基づいた文章を書く作業に慣れていない学生も多く、自分の意見だけを述べていたり、引用がどこからどこまでなのかが不明確なレポートも見られた。しかし、引用の方法をくり返し扱い、練習を重ねた結果、次第に適切な引用ができるようになってきた。

だが、学期末になっても、引用をレポートのどの部分に取り入れ、論を進めるかという点に問題のある学生が散見された。今後はどこで引用をすればいいかという点に関してもっと意識ができるよう、指導と練習を工夫していきたい。

<秋学期>

(a クラス)

落ち着き、静かな性格の学生が揃っているクラスであったが、教員からの問いかけに対する発話や質問は多くあり、作文の学習に対する熱心さが窺えた。また、ペアやグループディスカッションの際には、積極的に話し合っている姿が見られた。学期開始時より連続欠席の学生 4 名（ビジネスデザイン学科）、また数名の学生が連絡なく欠席することがあったが、他の学生は遅刻や欠席はほぼなく、授業に対し、非常に真剣に取り組んでいる様子であった。学習したことを十分に理解し、段階的な上達が見られ、期末テストにおいても、その成果を十分に発揮できていた。また、盗用・剽窃に対する意識が高いクラスで、作文においては、独自の意見が現れる内容となっていた。

今後は、学生がより熟考できるようなフィードバックの方法について考えていきたい。

(b クラス)

秋学期の J7-b クラスは、10 名が履修登録したが、実際にクラスに参加したのは 8 名であった。3 名が正規院生、5 名が特外生であった。非漢字圏の学生もいたが、J7 作文の授業活動に必要な漢字力を十分に身につけており、語彙力も高かった。8 名とも非常に学習意欲が高く、運営しやすいクラスであった。学期の前半に提出されたレポートは、課題の文字数を埋めるだけのレポートが目立ったため、FB ではレポートの構成を意識させるように指導した。その結果、学期が進むにつれ、序論、本論、結論までの構成が意識されたレポートが作成できるようになり、期末テストでもその成果が見られた。正規院生からは、専門科目のレポート作成においてもこの練習が効果的であったと肯定的なコメントが得られた。一部の正規生にとっては、作文クラスは課題作成の負担が大きく感じられるようであるが、自身の専門科目に役立つ内容であるということを周知し、作文クラスの履修を促していきたい。

2018 年度「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コースの概要

聴解・会話は、J5 は初中級、J6 は中級前半、J7 は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週 1 回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

<J5 聴解・会話>

担当者名：<春学期> a クラス：神元愛美子、b クラス：小林友美

<秋学期> 草木美智子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：<春学期>a19 名、b14 名 <秋学期>17 名

使用教材：梶本総子・宮谷敦美『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版、宮城幸枝他『毎日の聞き取り plus40』凡人社

目標

J5 は初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

毎回の授業ではまずディクテーションクイズを行い、スピーチ発表、聴解、聴解に関連した会話練習を行った。スピーチは全部で 2 回実施し、第 1 回目はグラフ説明を行い、第 2 回目は各自が興味ある時事問題について調べて発表した。各自テーマを決め、アウトラインを作成し、クラス全体で発表をした。会話練習は相手と場面に応じたスピーチスタイルを意識し、場面に合わせて様々な表現を使用できるように練習した。表現確認後にロールプレイ練習を行い、最後はミニドラマを作成し発表した。期末テストは聴解とロールプレイを実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

クラスの雰囲気がよく、学生たちは授業に意欲的に参加していた。スピーチはクラスメイトの発表を聞く機会が多く、後半になればなるほどピアの発表から学び自分の発表に活かす姿勢が見られた。教師からのフィードバックを活かし、ピアの発表から良い点を学び、力をつけることができた学期だった。ただ、その一方でスピーチ発表に時間がかかってしまい、後半の会話練習時間を十分に確保できなかった

のが今回の反省点である。限られた場面での練習しかできない回もあったので、今後は学生の発話量を確保するために、テキストの表現を予習させ表現導入の時間を短くする、スピーチと会話練習のバランスを受講者人数に合わせて調整する等状況に合わせて対応していきたい。

(bクラス)

積極性には欠けるが、真面目に取り組む学生が多く、授業活動に意欲的に取り組んでいた。その一方で、授業態度が不真面目な院生が数名いた。本授業は活動が多いため、このような学生の対応の仕方やモチベーションの維持が課題となった。聴解力は個人差があり、学期前半は、CDのスピードについていくのが難しい様子だったが、徐々に慣れていき、聞き取り練習やディクテーションもよくできるようになっていった。ロールプレイやミニドラマ作成のペア、グループ活動も、主体的に取り組んでいたが、ターゲットの表現や話のスタイルの定着が難しい学生もいた。そのため、聴解、会話練習を繰り返し練習する時間を確保する必要があると感じた。

<秋学期>

全体的に真面目で明るい学生が多かったように思う。そのことが授業にもプラスに働いたように感じた。特に会話のペア練習では積極的に各課の語彙、重要表現を使い会話していた。ロールプレイ、ミニドラマ発表等も嫌がらず熱心に取り組んでいた姿勢は評価したい。毎回の授業では、できるだけ大学での授業、発表を視野に入れて指導をした。特に2回のショートスピーチ(グラフ、時事問題)は今後にも活かせるように、スライド、レジュメ作成等の例を挙げて基本から丁寧に指導した。結果、1回目のショートスピーチよりも2回目の方に成長が見られた。また、他の人の発表もよく聴いており、活発な質疑応答ができたのも良かった。今後も大学生生活で活用できる会話と発表方法の指導を心がけたい。

<J6 聴解・会話>

担当者名：<春学期> aクラス：長谷川孝子、bクラス：藤田恵

<秋学期> 草木美智子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<春学期>a22名、b19名 <秋学期>29名

使用教材：瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク、荻原稚佳子・斉藤真理子・増田真佐子・伊藤とく美『日本語上級話者への道—きちんと伝える技術と表現』スリーエーネットワーク、鎌田修他『中級から上級への日本語なりきりリスニング』the Japan Times など、生教材(テレビニュース)

目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話やスピーチでは、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、ディベートにおいては、資料を用いて根拠のある意見が言え

るようになることを目標とする。

授業の方法

毎回授業の前に自宅学習としてテキストの音声を聞いてくることを課し、授業の前半に同じ音声を使ったディクテーションクイズを行った。授業の後半は聴解とそれに関連した会話練習を行った。また、テキストで学習したトピックに関連したスピーチとロールプレイを学期中に 2 回ずつ実施した。この他にニュースの聴解とディスカッションを行い、それに関連した内容でディベートを行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

会話の課題からは、日本語表現、聞き手に分かりやすい構成、人前で話すことの難しさ、発表前の準備の大切さなどを学んだと思う。聴解では、会話やニュースの主題や構成を意識する練習になったようである。しかし、学習者が求めている弱点の克服までにはまだ課題がある。会話では、活用、発音、イントネーション、日本語の自然な表現、伝わる話し方、聴解では、連体修飾や省略を理解しながらの細部の把握など、日本語力を高めるための練習が足りていない。今後は、学生に必要な課題を考えるだけでなく、日本語の定着に必要な練習時間も考えて進める必要があると思う。

(b クラス)

履修者 19 名のうち、継続してクラスに参加していたのは 15 名である。聴解では、身近な話題と社会的な問題を扱い、学生の興味をひくものであった。音声の中に多く使われているあいづちができるようになることを、今学期の目標に挙げた学生もおり、ターゲット部分も学生のレベルに合ったものであったように思う。同じトピックでのスピーチとロールプレイも積極的に参加していた。ニュースの聴解では、初回はほとんど聞き取れなかった学生もいたが、社会問題で使われる語彙の習得にも焦点をあてて授業を進めたところ、徐々に内容を聞き取れるようになっていった。学期後半から扱ったディスカッションとディベートは、表現の導入から産出への流れをスムーズ作ることができ、学生たちの参加度も非常に高かった。今後の課題には、即時に応答できる力を身につけさせる指導を取り入れることを挙げたい。ディベート後の学生自身のふりかえりに、相手チームへの反論で上手く対応できなかったことを挙げる学生が多かった。この点を改善できるように授業計画を立て、学生を指導していきたい。

<秋学期>

全体的に真面目で熱心な学生が多かった。毎回の宿題、課題もきちんと期日を守り、提出する学生がほとんどだった。ペア、グループ活動を好む学生が多かったことも授業にプラスとなり、練習や話し合い等も毎回活発に行われている様子が見られた。毎回の授業では、授業後半で行われるディスカッション、ディベートに向けての準備として、できるだけ社会的な話題、時事問題などを多く取り上げるように努めた。その積み重ねもあり、ディスカッション、ディベートのテーマ選択、話し合いもスムーズに行うこと

ができた。真面目な学生が多かったこともあるが、授業時間以外でもグループで連絡を取り合い、事前準備もきちんとしてディスカッション、ディベートに臨むことができたのが良かったと思う。今後も大学生、社会人として明確に意見が言えるような練習ができるよう努めていきたい。

<J7 聴解・会話>

担当者名：<春学期>aクラス：高嶋幸太、bクラス：嶋原耕一

<秋学期>aクラス：山内薫、bクラス：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：<春学期>a16名、b12名 <秋学期>a16名、b14名

使用教材：荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤真理子『日本語超級話者へのかけはしーきちんと伝える技術と表現―上級から超級へ』スリーエーネットワーク
生教材（テレビ番組の録画および DVD）

目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

授業は聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解では、「ガイアの夜明け」「カンブリア宮殿」等の DVD を視聴し、内容把握と語彙や表現の確認を行った。DVD 視聴後は、テーマである社会問題についてグループでディスカッションを行った。定期的に日本人学生ボランティアも募集し、ディスカッションに参加してもらった。ディスカッション後は、要約と意見をレポートとして提出することを課題とした。会話は『日本語超級話者へのかけはし』を使用し、ロールプレイとプレゼンテーションを課題としながら、特に相手にわかりやすく伝える練習を行った。期末テストとしては、プレゼンテーションと DVD の内容要約を実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

当初の頃は課題が多いと言っていたが、授業の流れを把握するにつれて、その声は減っていった。また、出席者における課題の提出状況はよく、未提出ということはあまりなかった。

ただし、今回の a クラスでは日本人学生とのセッションを終盤に 1 回行っただけであったため、母語

話者とのインタラクションがやや少なかった感が否めない。その点を次回以降の課題としたい。

(b クラス)

12名の学生がプレイされたが、ほとんど遅刻も欠席もなく、学習意欲も高い学生ばかりだった。聴解のために視聴したDVDは、みなよく理解できており、回を追うにつれて要約は正確になり、ディスカッションも深まっていた。ロールプレイには前半の3週を費やしたが、J7レベルになると大抵の日常的事業には対処できるため、どのように動機づけをするかが課題だった。またフィードバックでは、自身のロールプレイやスピーチの音声を聞かせたが、冷静に自身の声を聞き問題を分析できる学生ばかりではなく、工夫の必要性を感じた。今後の課題としたい。

<秋学期>

(a クラス)

大変明るく、授業態度が大変よく、一体感のあるクラスであった。意見や質問も積極的に出て、それらの発言を皆で共有し、広げるなど、広い教室の中でも全員が協働して進めようとする姿勢が窺えた。授業活動だけではなく、課題の提出に関しても真剣に取り組んでいる様子であった。学期開始時より連続欠席の学生4名(ビジネスデザイン学科)、及び、学期中より研究や専門の集まりのため欠席が重なっており、学期末には出席を諦めてしまった学生1名(正規生)がいたが、他の学生は、遅刻もほぼなく、体調不良の時以外は欠席する者はいなかった。今後も教室でのディスカッションの機会を増やすとともに、学生が各自の学習強化点を見つけられるよう、発表後のフィードバックにおける具体的な方法について考えていきたい。

(b クラス)

全体的に真面目で、熱心に授業活動に取り組む学生が多かった。DVDは、興味を持って視聴し、内容もよく理解できていた。時事問題や社会問題に関心がある学生が多かったように思える。要約文の課題は、授業前半では、改善点が多かったものの、回数を重ねるごとに、ポイントを押さえながら要約できるようになっていった。日本語ボランティアとのディスカッションでは、活発に意見交換ができ、学生たちの満足度が高い活動となった。要約文、発表は、評価シートを用いて教師が中心にフィードバックをしたが、十分に時間が取れなかったことが反省点である。今後は、要約文や発表テーマを全体で共有するなど、フィードバックの仕方を工夫していきたい。

2018年度 J8 授業記録

コース概要

J8は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生(日本語を母語としない学生)の履修

も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<日本の文化・社会 A>

担当者名：<春学期>丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 8 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、最後のまとめとしてプレゼンテーションを行う。

結果と課題

本科目は正規学部留学生対象科目「大学生の日本語」との併置科目である。正規学部生が 1 名、特別外国人学生が 7 名履修した。日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。視聴覚教材を主として展開するテーマと、読解教材を主として展開するテーマをそれぞれ 2 テーマ用意し、ディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行った。

トピックはいくつかの候補の中から学生の希望を反映させて選定した結果、インフラ開発と、日本の経営、ソーシャルイノベーションとなった。最終プレゼンテーションとレポートは日本社会に関するトピックを各自選び、課題に取り組んだ。授業開始時に、いいプレゼンとは、いいレジュメとはという活動を行い、日本語力の点でこの授業で期待することを伝えた結果、履修者は全体的に個々の授業活動の目的を理解した上で積極的に活動に取り組めたと思う。レポートの書き方の中で必ず扱われる引用のしかた、出典の書き方も取り上げた。

授業で取り上げた各トピックについて、DVD や読解資料などの複数の教材を使用して、各自が毎回欠かさず課題を行い、日本の文化・社会的文脈に関する知識も得ながら各テーマについて理解を深めることができた。

<日本の文化・社会 B>

担当者名：<秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 14 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して、日本の社会や文化について考え、理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本の文化・社会に関するテーマを 4 つ選出し、それについての映像教材を見たり、資料を読んだりした。主としてテーマについてのディスカッションや発表を中心とした授業を行い、最後にまとめとして最終プレゼンテーションを実施した。

結果と課題

学生からの要望が高かった「日本の就職活動」「日本の食文化」「日本の住宅事情」「日本のインバウンドビジネス」という 4 つのテーマを選出し、1 テーマにつき 3 週かけ、それぞれを学んでいった。過去に本授業を行った際は母語話者とのインタラクションが少なかったため、今年度は 3 週に 1 度、立教生への発表やディスカッションを実施する取り組みを加えた。その結果、履修学生からは、さまざまな意見が聞けてよかったという好意的な感想が寄せられた。全授業をとおして、充実した授業内容にするためには、インタラクションの機会を適宜設けることが重要だと感じられた。今後の課題としては、今期の授業ではアカデミックな文章を書く機会がやや不足していたように思ったため、文書作成の機会を設けることも視野に入れたほうがよいと感じた。

<日本の文化・社会 C>

担当者名：<秋学期>丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 14 名

使用教材：独自教材

目標

高度な日本語能力を運用して日本社会や文化に関するテーマの中から、受講生の興味・関心に沿うものを選び、そのテーマに沿って授業を進める。

授業の方法

「日本の企業風土」「日本的経営」「日本型サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲ

ストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

結果と課題

J6～8 の 3 レベルの学生を対象として開講し TA を配置した。ゲストスピーカーによる講義の前の事前学習、後の事後学習は基本的にグループディスカッションや、分担読解の課題を行い、履修者の主体的な学習を促した。本科目は小レポートに 3 回取り組む設計になっている。1 回目の小レポートは引用や出典の示し方など、レポートの書き方の基本が押さえられていないものが散見され、フィードバックを丁寧に行うようにした。その結果、回を重ねるごとに質が上がっていった。全体的に履修者は非常に学習意欲が高く、学期末まで学習動機を下げることなく、積極的に取り組んだ。

<日本語の諸相 A/B>

担当者名：<春学期>沢野美由紀 <秋学期>沢野美由紀

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 8 名、秋学期 10 名

使用教材：独自教材

目標

一つの言語としての日本語を取り上げ、他の言語と比較した場合に特徴的な日本語の側面を理解する。擬音語・擬態語、様々な感情表現、微妙なニュアンスを表す副詞、位相や役割語など、日本語の特徴的な側面を取り上げ、それについての論文を読んだり、調査したりする。

授業の方法

<春学期>

まず初回の授業で、日本語のどのような側面に興味を抱いているのか、意見の交換を行った。今回の参加者は日本語の語彙やその成り立ち（外来語、混種語、語呂合わせ）や漢字（中国と日本の漢字との比較）などに興味を持っているということがわかったので、それぞれ大まかなテーマを 1 つ決め、3 回ずつ調査、発表をしてもらった。発表者には前の週にテーマを伝えてもらい、ディスカッションをするために発表者以外の学生にもできるだけそれに関して調べてくることを課題とした。また、最終発表として、それまでに調べた内容と、ディスカッションで得られた気付きなどを基にまとめたものを発表し、レポート作成もあわせて行った。

<秋学期>

①若者言葉、②日本語の擬音語・擬態語、③外来語、④役割語などを取り上げ、関連する資料を読んで日本語と他言語の比較もしながらディスカッションを行った。また、各学生に日本語に関して①～④を含め興味を持つテーマについて、3 回ずつの発表を課した。最後に、それまでに学んだ項目や

発表に関連して内容を深めたものを最終発表とし、それをもとにレポートを作成した。

結果と課題

<春学期>

日本語に対し、尽きることのない興味を持つ学生の集まりで、毎回活発にディスカッションが行われ、しばしば休み時間になっても意見の交換が続いていた。各自、興味を持つテーマはやや異なっていたようだが、他の学生の発表を純粋におもしろがり、日本語の奥深さについてもっと知りたい、学びたいという気持ちになっているのがひしひしと感じられ、非常に有意義なクラスであった。ただ、日本語力にややばらつきがあり、プレゼンテーションに慣れている学生とそうでない学生がはっきり分かれていたため、日本語のクラスと考えた場合、どのような指導の仕方をすればいいのかという点が難しく感じた。今後はこの点を課題としたい。

<秋学期>

継続してクラスに出席した学生は7名であった。それぞれが日本語に深い関心を持ち、学習意欲も見られたが、日本語力に差があったためかディスカッションや発表の質疑応答では発言する学生が決まっていた。日本語の諸相について考えるという点では、お互い刺激しあい、少なからず学ぶところはあったと思われるが、指名してもなかなか意見をまとめることができない学生もいたため、活発に意見の交換が行われたとは言えない状況であった。

春学期終了時に、プレゼンテーションに慣れていない学生への指導の仕方を今後の課題としたが、今期はこの点に留意して行ったため、数名の学生は伝えたことを実践しようと努力をしていた。しかし、指導方法についてはまだ考える余地があるため、次回以降は更に工夫を重ねたい。

<日本語論文読解>

担当者名：<春学期>（池袋）小森由里、（新座）谷 啓子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）7名、（新座）2名

使用教材：独自教材

目標

日本語で書かれた学術論文の内容が読めることを目指し、日本語論文の構成語彙などについて学ぶ。

授業の方法

初回に論文とは何かを考え、個々の専門分野に関する論文を探す手法を学ぶ。その後、各自が探した専門の論文（担当論文）や教師から提示されたサンプル論文を素材に「論文の構成」を確認していった。その中で、論文特有の表現を学び、分野による論文の違いを共有した。後半は担当論文を先行研究の扱い、データの種類、調

査方法などの面からさらに分析した上で、全体構成を発表した。最終課題として、担当論文についての詳細なレジュメを作成し、口頭発表とディスカッションを行った。

また論文読解に関連して、「参考文献や引用のルール」「調査方法」、最終発表に必要な「レジュメ作成」や「口頭発表上の注意」などを練習とともに内容に組み込んだ。

結果と課題

(池袋)

履修生 7 名でコースを始めたが、途中で 1 名が出席なくなり、コース後半には 6 名の学生となった。6 名のうち 3 名は非常に熱心で、積極的に質問をし、何事にも理解を深めようとする姿勢で授業に臨んでいた。このような学生たちの態度は他の学生にも良い影響を与えていた。最終発表では、6 名全員がレジュメに担当論文の内容を単にまとめるだけでなく、論文に対する適切なコメントを記しており、クリティカルに論文を読むことができていた。また、発表後のディスカッションでは、専門外の論文であっても、発表内容を理解し、有意義な意見交換を行うことができた。

最終的には学生は担当論文全体を読み取ることはできてはいたが、論文の序論・本論・結論をそれぞれ取り上げその構成や表現を指導する段階で、本論を扱う時間を十分に取らなかったため、混乱している学生が見受けられた。また、最終発表ではレジュメ作成の指導が中心となり、口頭発表についての指導が十分ではなかった。少人数のクラスであるため、学生が理解できていない点や弱い点を見極め、そこをきめ細やかに指導するための時間配分を工夫することを今後の課題としたい。

(新座)

履修者は学部生 2 名 (2 年次、4 年次) であった。論文読解、作成の経験は少なかったが、どの課題にも積極的に取り組んだ。担当論文は観光分野と福祉分野である。履修者が少ないため、触れる論文のバラエティをふやすべく、前半の構成は担当論文を 2 本ずつ閲覧し、実物の学会誌も多く参考にした。

履修学生がレジュメ作成に不慣れであったため、後半時間に余裕ができたところでレジュメ作成の練習を多めに行った。それぞれの担当論文は長いものであったが、2 人共要点をよくまとめ、専門的な概念などをフォローしながら分かりやすい発表となった。自分の専門分野の論文でないと質問が思いつかないようであったが、その場合は内容より論文のタイプとしてどうか、という議論に発展できればよかったと思う。

また、選んだ論文が総論的なものだったので、展開という点であまりメリハリがない、ということに学生本人が途中で気づくということがあった。今後論文を選んでもらう際の参考としたい。

<日本語論文作成法>

担当者名：<秋学期> (池袋) 小森由里、(新座) 谷啓子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 (池袋) 7 名、(新座) 2 名

使用教材：大島弥生他『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 第2版』ひつじ書房, 2014.

浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版, 1997.

北原保雄監修（独）日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計画作成法』凡人社, 2009.

目標

卒業論文や学術的な論文作成に必要とされる語彙・文型・スキルについて学び、高度な日本語論文作成能力を身につけることを目指す。日本語の論文の構成、スタイル、使用される語彙や接続表現、文型の特徴について学び、自らそれらを用いて構成の組み立てや短文作成などを行う。その後実際の論文作成を行い、実践力をつける。

授業の方法

前半は論文の探し方の指導後、各自の専門分野に関する論文を探し、1本担当論文を決めて分析し、論文の大まかな構成を把握した。専門や関心の異なる分野の論文に触れることで、論文にも様々なパターンがあることが確認できた。昨年度からピア・レスポンスを意識したテキストを追加し、活動に盛り込み、互いのコメントから修正点を見つけて改善につなげていった。

後半は、テキストで研究計画書の書き方、論文に必要な表現等を学びながら、各自が取り組みたい論文の準備を行った。テーマ探しから始まり、研究課題を検討、並行して先行研究の収集と整理を行った。それぞれの作業に関してはワークシート等にまとめ、適宜発表した。計画書を執筆する段階では教師とブラックボードやメールでやりとりし、コメントを参考に修正を重ねた。最終課題として各自の論文の研究計画書と文献メモを作成、発表した。

結果と課題

(池袋)

履修生は正規学部生7名であったが、そのうちの1名はコース後半になって欠席が続き、脱落してしまった。1限ということも関係してか、全体的に遅刻が目立った。ただ、授業中は非常に真面目に取り組み、積極的に質問していた。研究計画書は、簿記の起源、会計学、米国の保護主義、消費税導入の是非など各学生の専門分野に関わるテーマを選択し、最終的には6名が計画書を提出しその内容を発表した。発表時には活発な意見交換が行われ、質疑応答によって計画書の内容を深めることができた。計画書を完成することができたのは学生にとって大きな自信になったようである。しかし、作成段階では、計画書に関する課題の提出が遅れたり提出しなかったりと、学生間で進度がまちまちであったため、ピア活動を導入することができなかった。

学生の学習意欲を継続させ、ピア活動を取り入れることによって学生間でコメントのやり取りができるように授業運営をすることを今後の課題としたい。

(新座)

履修者は正規学部生の2年生であった。履修の理由としては、「論文にふれてみたい」「レポート・論文的な表現を身につけたい」等であった。2人が同じ学部、出身国で全体にスムーズに進んだ。遅刻や欠席も少なく、各課題に真面目に取り組んだ。テキストの内容について、またそこから派生しての質問もよくあり、説明をすると熱心にメモをとっていた。

計画書作成の段階では、少人数のため時間をかけて内容を検討できた。ピア活動でも率直に意見を出し合う様子が見られた。まだ2年生のため、キーワードとなる専門分野の用語の使い方がぶれることがある。先行研究から様々な定義にあたって、そこからふさわしいものを選んだり、新たに定義する経験を重ねてほしい。それぞれが専門分野で興味のあるテーマを見つけられたので、今後その研究のために必要な勉強(例インタビュースキル)などを深めてほしいと思う。

<キャリアジャパニーズA>

担当者名：<春学期>(池袋) 富倉教子、(新座) 佐々木藍子、<秋学期>(池袋) 富倉教子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期(池袋)10名、(新座)3名、秋学期(池袋)5名

使用教材：『立教就職ガイド2019』『立教就職ガイド2020』

『外国人留学生のための就活ガイド』

(参考資料『外国人留学生のための日本就職オールガイド』)

授業の方法

<春学期>

(池袋)

授業では、『立教就職ガイド』、『外国人留学生のための就活ガイド』を中心に、他教材、大学キャリアセンターHP、センターの方からの情報などを基に、パワーポイントなどで基礎的な知識、概要を提示し、その後、学習者が作業を行う形で進められた。活動としては、ペアで話し合ったり、宿題として書いてきたものを読み合ったり、面接官と学生になって面接の練習を行ったりした。またクラス全体で社会的なトピックなどについてディスカッションを行ったりもした。

(新座)

本授業は3つのステップに分けて授業を進めた。第一ステップでは就職活動の概要と流れ、自己分析を取り扱い、日本の就職活動について理解を深めた。第二ステップではエントリーシート、履歴書の書き方、書類送付の仕方について取り上げ、就職活動に必要な作文スキルの向上を目指した。第三ステップでは第一ステップ、第二ステップで学習した内容を踏まえ、実際の面接でよく出題される質問の回答について検討し、個人面接・集団面接の練習を行った。また、適宜企業分析やビジネス敬語の練習をするほか、

ゲストスピーカーとして野澤和世氏を迎えるなどし、就職活動への意識を明確にした。

<秋学期>

(池袋)

授業では、『立教就職ガイド』、『外国人留学生のための就活ガイド』を中心に、他教材、大学キャリアセンターからの情報などを基に、日本での就職活動に関する基本的な流れ、知識等を学びながら、実際に「自己PR」や「志望動機」といったエントリーシートで出題されるであろうトピックで書く練習をしたり、面接の練習を行ったりした。また面接時の質疑応答や集団ディスカッションを想定して、クラス全体で社会的なトピックについて話し合うといった活動も行った。さらに、専門の方にお越しいただき、現在の日本企業の動向、就職状況など講義をしていただいたりもした。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

登録者は10名だったが、実質的には6名で授業を行った。授業では、日本の就職事情や日本で就職するということ(他の国との違い)など概要から始まり、自己分析から自己PR、学生時代に頑張ったこと、など自己を振り返る活動へと移行。さらにそこから卒業後の自画像、どこでなにをしたいのかを想像しつつ、一方で希望する企業分析、志望動機へとつなげていった。最後に、ビジネスマナー、面接の流れ、面接での応答などを練習した。

学習者は必ずしも日本での就職を考えているというわけではなく、様々な理由で授業をとっていたようであった。そのためか、学期初めはほとんどが漠然と授業を受けているような様子であったが、学期が進み途中専門家による講義も入り、徐々に学習者の態度も変わり、現実味を帯びて「日本での就職」について考えるようになってきたようであった。それは作文や授業中に質問してくる内容からも伺えた。学期最後には、就職について一般論ではなく、個々のレベルに落とし込むことができたように思われるが、個人差もあり、面接時の対応も含め、さらに内容を深めていくことが今後の課題である。結果として、学習者が日本で就職するしないにかかわらず、自己を振り返り、強みを発見し、進みたい道を少しでも見ることができたのではないかと思われる。

(新座)

履修者は正規学部生3名であった。そのうち4年生の学生1名は、大学院への進学を希望していたが、日本の就職活動に対する興味から受講していた。他の2名は3年生で、1名は日本の会社でアルバイトをしており、インターンシップにも積極的に参加していた。もう1名は、どこで就職活動をするか、まだ悩んでいる学生であった。このように様々な学生で構成されたクラスであったが、エントリーシートや志望動機の作成ではどの学生も同様に苦戦していた。日本語の作文スキルも必要であるが、限られた字数の中で、自分らしさをどのように表現すればよいか分らなかったようである。また、事例として盛り込む内容が日本社会において、どう評価されるのかわからず、マイナス評価につながる内容を書いて

しまう学生もいた。教師のフィードバックを受け、何度か書き直しを重ねることで、少しずつ良いものになっていった。このような文化的な事柄の学習は、学生にとって容易ではないため、今後は適宜、文化的な情報も扱いつつ、授業をすすめていく必要があると考える。

<秋学期>

(池袋)

秋学期は履修者5名と小さめのクラスだったが、全体的にまとまっており、学生も活発に意見を交換し合い、ペア活動も行っていった。実際に日本での就職活動を考えているものも数名おり、また他の学生もクラスの活動に熱心に取り組んでいたため、「就職」ということに対して、内容的にも掘り下げていくことができた。書く活動を通して学生の変化が見られ、また面接時の回答などからも成長が伺えた。一方で「志望動機」などまだ一般的になってしまう傾向も見られ、それをどれだけ個人のものとし、実際に企業にアピールできるようになるかは今後の課題である。

<キャリアジャパニーズ B>

担当者名：<春学期> (池袋) 沢野美由紀、<秋学期> (池袋) 井上玲子、(新座) 佐々木藍子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期(池袋)11名、秋学期(池袋)3名、(新座)2名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

就職試験(SPI)の国語分野の問題を毎回課題として出し、その答え合わせと解説を主として授業を進めた。復習として翌週にクイズを行い、期末テストの前に模擬テストを解いてみる時間も設けた。また、単調にならないよう、関連するテーマ、例えば四字熟語やことわざなどに関して課題を出し、クラスで発表を行った。

<秋学期>

就職試験(SPI)の国語分野の出題範囲から毎週1~3つのテーマを選び、問題を解きながら必要な知識や対策を学習した。また、毎回授業開始時に前回は扱った内容の小テストを行った。学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを実施し、その翌週に期末テストを行った。

結果と課題

<春学期>

一回出席しただけで来なくなった学生もいたが、日本での就職について考えているという学生が多いためか、課題をしてこない学生は皆無であった。ただ、やや静かなクラスだったので、どの程度理解しているかが把握しにくく、ペアで説明しあったりすることで理解の程度を確認し、定着を図った。毎回難し

いと言いながら、地道に勉強することで力がついていったと思われる。が、ネイティブの学生でも難しいと感じる内容なので、ある程度の力があることが前提であり、非漢字圏出身でついてくるのに苦労している学生に対し、どのように工夫してフォローすべきか考えさせられた。この点についてどう対応するか考えることを今後の課題としたい。

<秋学期>

(池袋)

今学期の履修者(3名)は、日本での就職に興味はあるものの、本格的に就職活動は行ってはいない学生であった。学習への意欲は高く、全員予習をしっかりと授業に臨んでいた。また、毎回の授業で積極的に質問が出て、非常にいい雰囲気ですべてを進めることができた。履修者の中に、インターンシップに参加する等、少し就職活動を経験した学生が1名いたため、授業内で自身の就職活動の体験談の話をしてもらい、情報共有の時間も少し設けることができた。授業自体は特に問題なく進めることができたと思うが、今学期、就職活動経験者がいたので、もう少し授業内でその学生の生の声を聞く時間を取ってもよかったかもしれない。このような情報交換は就職活動をしたことがない学生にとっては非常に有益だったようで、真剣に耳を傾けていたのが印象的だった。今後は就職試験(SPI)問題の解き方だけでなく、学生のニーズを把握し、それに応えられるような授業運営を心掛けたい。

(新座)

今学期は、正規学部生2名が履修した。両学生ともに、将来的に日本での就職を視野に入れているため、授業への取り組みは大変真面目で遅刻欠席も全くなかった。学生たちはすでに就職セミナーや会社説明会にも積極的に参加していたため、毎週の授業の最初に就職活動状況の報告をし合うこととした。この活動は互いにより情報交換の場となり、さらに就職活動に関する悩みや今後の進路について話すことで、今後自分が何をすべきかについて考える良い機会になったようである。

また、就職試験(SPI)の問題については毎回こちらから配布する教材をやるだけでなく、本番のSPIを見据え、出題傾向についても確認しつつ学習を進めていた。少人数のクラスであったため、学生に合わせ柔軟に指導することができたが、受講生の日本語レベルには差があり、また就職試験の問題において、得意・不得意な内容も異なっていたため、その対応が難しかった。今後はその点についても工夫していきたい。

<ビジネス日本語口頭 A>

担当者名：<春学期>(池袋)平山紫帆、(新座)佐々木藍子、<秋学期>(池袋)小森由里

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期(池袋)18名、(新座)5名、秋学期(池袋)9名、

使用教材：独自教材

参考：『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』、『BJT 模試と対策』

目標

ビジネスで必要とされる構文または談話レベルの日本語力（聴解・発話）を身につける。

授業の方法

<春学期>

（池袋）

ビジネスシーンの「会議」「電話」「商談」という3つの基本的な場面を設定し、そこで必要とされる機能（「会議」であれば、「提案」「説明」「賛成」「反対」など）を毎回1~2つずつ取り上げ、口頭練習や聴解練習を行った。具体的には、会話の相手を「社内／社外」、「上司／同僚」等に分け、それぞれの相手に応じた適切な表現を学習し、ペアやグループでロールプレイを行った。各場面を学習した後は、ロールプレイテストを行い、翌週、フィードバックを行った。さらに、ビジネス場面での聴解力をつけるため、ビジネス日本語能力テストの聴解問題も並行して進めた。

（新座）

本授業ではビジネスシーンでよくみられる「会議」「電話対応」「商談」の場面を取り上げ、それぞれの場面をさらに細分化し、そこで必要な会話力、対応力を養成するよう進めた。各回の進め方は、まずその回の場면을提示し、プレタスクとしてロールプレイを行った。プレタスクでどのような対応や表現が必要かを考えた後、ブランクのあるモデル会話を提示し、まずは学生自身でブランクにあうよう穴埋めをした。それからモデル会話を流し、聴解練習すると同時にモデル会話を完成させる。そして、そのモデル会話を使って、口頭練習を行った後、プレタスクで行ったロールプレイを再度行い、まとめとした。また、並行してビジネス場面での聴解力を養うため、ビジネス日本語能力テストの聴解問題も行った。

<秋学期>

（池袋）

ビジネス場面を想定した聴解および会話練習を行った。聴解練習では、ビジネス用語や表現に注意させながら、情報を聴き取らせた。会話練習では、会議、電話対応、商談と大きく3つのテーマを取り上げ、各場面で用いられる表現、構文、談話展開を指導した。会話はペアで練習させ、各テーマの終了後にロールプレイのテストを行った。テスト時には、学生同士で良かった点および改善すべき点を書かせコメントを交換させた。

結果と課題

<春学期>

（池袋）

今学期は、履修者が18名と大人数であったため、グループでの練習を多く取り入れた。グループ内のメンバーには口頭能力に多少の開きがあることもあったが、毎回、熱心に練習し、学び合う姿が見られ

た。相手や状況による使い分けを意識した練習を重ねたことで、学生たちの口頭能力に大きな向上が見られた点は良い結果であると考えられる。

しかし、課題もある。まず、個別のフィードバックも、毎回可能な限り行うようにしたが、やはり十分だったとは言えない。一人一人が自分の発話を客観的に振り返ることができるような活動を取り入れるなど、工夫をしていきたい。また、今回、学生によっては、ビジネスシーンのイメージがわからない学生もいた。ビジネスの場面が具体的にイメージできるように、導入や練習を改善していきたい。

(新座)

履修者は正規学部生 5 名であった。2 年生の学生が 3 名、3 年生の学生が 2 名であった。ほとんどの学生が日本での就職を希望していたため、熱心に授業に取り組んでいた。中には、日本の会社でアルバイトしたり、接客販売のアルバイトをしたりしている学生もいたため、現場の話を聞きながら、進めることができた。

どの学生も、最低限の敬語の知識はあるものの、授業で扱ったビジネス場面に慣れておらず、授業開始時は敬語がうまく使えなかった。しかし、授業が進んでいくにつれ、少しずつビジネス場面や敬語に慣れていく様子が見られ、授業が終わるころには、それまでに学習した内容を部分的にうまく活用してその課のロールプレイに取り入れられるまでになった。

この授業では定期的にロールプレイテストを行ったが、そのロールプレイテストで日本のビジネス場面ではあまり良い印象を与えない対応をした学生がいた。それは、母国では問題のない方法であった。しかし、日本では通用しないため、今後は学習者の背景にある母文化との違いについても、丁寧にフォローしていくよう努力したい。

<秋学期>

(池袋)

正規学部生が 6 名、特外生が 3 名履修した。しかし、9 名のうちの 3 名は欠席が続き修了することができなかった。真面目に出席していた 6 名は、毎回のロールプレイのペア・ワークに積極的に取り組んでいた。ロールプレイのテストには、学生は表現や談話展開の仕方をしっかりと復習し臨んでいた。テストは 3 回行ったが、各テーマの効果的な締めくくりになったと考えられる。会話練習は、実践的ですぐに役に立つ内容だったと学生から好評であった。ビジネス場面で使われる敬語や待遇表現も導入したが、多くの学生にとって、ウチとソトの概念は難しく定着しにくかった。待遇表現が身に着くよう指導方法を改善することを今後の課題としたい。

<ビジネス日本語口頭 B>

担当者名：<春学期> (池袋) 平山紫帆 <秋学期> (池袋) 平山紫帆、(新座) 佐々木藍子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 (池袋) 13 名、秋学期 (池袋) 8 名、(新座) 0 名

使用教材：BJT 対策問題集 (語彙リスト)

目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力を、ソリューション・デザイン型活動を通して身につける。

授業の方法

まず、初回の授業で、ソリューション・デザイン（SD）型活動の狙いや意義、進め方を説明した。また、フォーマルな会議スタイルでSD型活動を進めるために、会議で使用する日本語表現を確認した。2週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」をテーマに、SD型活動を進めていった。具体的な進め方としては、まず、プレタスクとして、そのテーマで必要となる概念やキーワードを考える時間を設けた。その際には、はじめから教師が概念を紹介するのではなく、学生たちが自分たちで考え、教師が必要に応じて補足するという方法をとった。次に、それぞれの概念を担当者が調べてグループ内で発表した。そうしてテーマを考える上での大きな枠組みを共有したところで、タスク（商品開発の場合、飲料メーカーの新商品開発）の提示を行い、グループごとに調査や検討を進めていった。そして、案が固まった段階で、まず1回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画したものを一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

毎回のSD型活動は社内会議という設定で行った。そして、議事録を作成し、毎回、上司に会議内容を報告するという活動を取り入れた。

結果と課題

<春学期>

（池袋）

学生たちは、よく協力し合い、話し合いを重ねて商品案や解決策を生み出していた。どのグループもアイデアの光る商品や効果的な解決方法を自分たちの力で考え出せていた。また、口頭表現についても、当初はフォーマルな会議スタイルでの話し合いがなかなかできず、友だち同士のおしゃべりになってしまう人が多くいたが、回を重ねるごとに、場を意識した適切な話し方や話の進め方ができるようになっていった。

こうした成果が得られた一方で、課題も見られた。まず、教師はSD型活動中に、学生たちの口頭表現や談話展開を観察し、授業の最後にフィードバックしていたが、最後ではなく、その場でのフィードバックがほしいとの意見があった。活動の流れを止めずに、フィードバックを効果的に行う方法を考えていきたい。

<秋学期>

（池袋）

学期当初のグループ活動は、意見が活発に出ず、話し合いが滞りがちになったり、細部にこだわりすぎて会議が進まなかったりすることがあった。しかし、話し合いを重ねるうちに、それぞれが意見を出し合うようになり、スケジュールを意識しながらその日の議題を決め、計画的に会議を進められるようになった。口頭表現に関しては、今学期は個別や全体のフィードバックに力を入れ、会議中の問題のある表現や談話展開について詳しくフィードバックするように心がけた。その結果、学期前半には直接的で攻撃的な反論や押し付けるような提案などの不適切な表現が見られたものの、相手に配慮した表現ができるようになった。

一方で課題もある。今学期も議事録を取り、上司役の教師に報告をするという活動を行ったが、グループ内でのやりとりには何ら支障がない学生であっても、報告になると説明に詰まったり、まとまりがつかなくなってしまったりすることが度々あった。今後は練習の回数を増やすなど、工夫していきたい。

(新座)

履修者がいなかったため、開講されなかった。

<ビジネス日本語（文書）>

担当者名：<春学期>（池袋）小森由里、<秋学期>（池袋）開めぐみ、（新座）嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期（池袋）22 名、秋学期（池袋）5 名、（新座）5 名

使用教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネスメール・ビジ

ネス文書 適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』（スリーエーネットワーク）

目標

日本でのビジネスに必要な日本語能力（読解、作文）について学び、使えるようになる。

授業の方法

<春学期>

(池袋)

教材にそって、コース前半はお知らせ、依頼、照会などのビジネスメールを、後半は議事録、稟議書、報告書などのビジネス文書を取り上げた。クラスでは、メールや文書の作成に役に立つ言葉や表現を導入し、それらを用いてメール文や文書を作成するという実践的な練習を行った。作成練習では、習得すべき重要な表現に注意喚起するため、メール文や文書の数か所を空欄にしたタスクシートを配布し、そこに必要な表現を書き入れさせるという形式で練習させた。また、毎回宿題を課し、授業で扱った設定と類似の状況で、メールや文書を作成させた。翌週のクラスで宿題を返却し、学生の間違いの多かった箇所を

指摘したうえで、模範解答を示しフィードバックを行った。期末課題としては、コースの中で扱ったものに類似した状況でメールと文書を作成することを課した。

<秋学期>

(池袋)

ビジネス場面に応じた適切な形式を用いて簡潔かつ効果的なメールが書けることを目標とし、各課をクラスワークと宿題で構成した。授業は大きく 3 パートに分けて行った。パート 1 では宿題のフィードバックを行った。OHC で書かれた文章を示し教師からの講評だけでなく、学生同士のコメントも取り入れながら問題点の改善方法を確認した。パート 2 では、導入課で使用する語彙・表現を確認しテキストの短文作成練習を行った。パート 3 で書く作業に入ったが、まずその課の文書の構成、必要とされる情報、書く際の注意点、設定状況について全体で確認し、理解ができたうえで個々に書き進めた。毎回 1 課ずつ導入し、クラス内で課題 1, 2 を書き、ピアエディティング、全体で見直して問題点を抽出し、改善方法を話しあい書き直すといった流れで進めた。課題 3 は宿題とした。

(新座)

テキストの流れに沿って、課ごとに表現を練習し、確認後タスクをこなしていった。タスクでは、それぞれ持参したパソコンを使って作成させ、教師に提出する前にピアチェックをさせた。ピアチェック後に修正を加えたものを教師が確認し、フィードバックを与えた。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

22 名という比較的大きいクラスで始まり、2 名の学生がコース途中から出席しなくなってしまったが、残りの 20 名の学生は出席率も宿題の提出率も高く、真面目に取り組んでいた。ビジネスメールも文書も書いたことがないということであったが、授業中は、積極的に質問し、熱心にタスクシートを作成していた。メール文の件名や挨拶表現、構成、ビジネス文書の書式なども、練習を重ねることで習得している様子が窺えた。毎回不慣れなメール文や文書を作成し宿題として提出することは容易ではなかったようである。実際にコース初めには、期限内に提出できなかつたり、宿題と指示したものと異なるメールが送信されたりするなど混乱が見られたが、徐々に宿題の作成および提出に慣れ、全員が宿題をすべて提出することができた。学生達が本コースを履修した動機の一つとして、敬語の習得があげられていた。ビジネスメールや文書の作成を通して、敬語の運用を学ぶことはできたと推察されるが、敬語の間違いは頻繁に見受けられた。敬語の練習が十分に受け入れられるよう授業方法の工夫をすることを今後の課題としたい。

<秋学期>

(池袋)

履修生 2 名は漢字圏出身、残り 2 名 (1 名は途中脱落) は韓国語話者で日本滞在期間が 2 年と長く、

全員日本語力が高くレベル的には概ね同程度であった。少人数であることと、日本語力にばらつきがなく総じて作文力が高いことが幸いしてスムーズなクラス運営ができた。

授業では、書く作業に活動が固定しないよう、書き始める前にその場面設定における問題点や可能な対応について話し合う時間を設け履修者がより主体的に課題に取り組めるように心がけた。テキストで扱ったのは実用的な内容で、分量的にも適切で学生のからの評判もよかった。ピアエディティングおよび全体の推敲活動では、2～3週目までは遠慮がちなコメントが多かったが、回を重ねるにつれより深く内容に踏み込んだコメントが出るようになり、毎回建設的な意見交換ができた。ビジネス文書の要諦である3C (Correct, Concrete, Concise) を常に意識し、正確、簡潔に読者視点で分かりやすく書くことを目指し、冗長な文章を簡潔な形に変換していく練習を行った。コース中盤以降は、語彙の選択や文の長さおよび文書のレイアウトに工夫がみられるようになり、これらの練習に一定の効果があったことが伺われた。

一方で、授受にかかわる待遇表現についての混乱、社外社内あてメールの敬語の使い分けなど、文法レベルのエラーや語彙選択の問題も見られた。今後は、日本語力の高い学生でも間違ってしまうこのようなニュアンスの違いについても、適切に説明し練習を課し、定着につなげられるようにしたい。また、それぞれの場面にあった文書形式を学ぶことを重視しながらも、言葉選びなど可能な範囲で自分なりの工夫をこらす姿勢を尊重し、ビジネス文書であっても楽しみながら書く姿勢が身に付くような授業運営を行いたい。

(新座)

履修者は5名だったが、継続して出席したのは3名だった。また3名にも遅刻や欠席が多かった。また履修者が少数であったにも関わらず、ペア活動に協力的でないこともあり、なかなかお互いに助け合う雰囲気にはならなかった。もっと早い段階で、お互いのことを知ってもらう工夫が必要であったように思う。また個人作業に時間を割くことがどうしても多かったので、もっとペアワークの時間を確保できるよう、次回は時間配分に気を付けたい。ただ目標であるビジネスメールと文書の習得については、3名ともに大きな進歩が見られ、最終課題でも教えたことがしっかり身につけていることが確認できた。

2018 年度 Japanese Language and Japanese Culture A、B、Japanese Language and Japanese Society A、B 授業記録

コースの概要

すべての特別外国人学生を履修対象とし、履修のための日本語レベルは問わない。日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

<Japanese Language and Japanese Culture A>

担当者名:<春学期>嶋原耕一

授業コマ数: 週 1 コマ

履修者数：春学期 25 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本文化への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語の語彙や表記、慣用表現などについて、その背景にある文化的・歴史的なことがらに触れながら学んでいく。授業は英語と簡単な日本語で行われる。講義も行うが、学生同士のディスカッションや調査なども頻繁に行うようにした。トピックとして扱ったのは、日本の地理と観光、アニメ、生活習慣、日本のマナー、日本の祭りなどであった。日本のマナーはゲストスピーカーを招いて講演を聞いた。学期末には、学期中に扱ったトピックと関連させて学生自身の国や社会と比較するなどのプレゼンテーションを行った。

結果と課題

受講生の日本語レベルはゼロ初級から上級まで様々だったため、基本的には英語を用いて授業を展開した。みな日本の文化や体験に積極的であり、授業内で扱ったことを深めるだけではなく、生活の中で気づいたことや体験したことを授業で共有してくれる学生も多かった。毎回授業の始めにミニ show&tell を実施したが、こちらの想定以上に長いプレゼンテーションをする学生も多く、本題を深める時間が取れなくなってしまうことがあった。学生に期待することをしっかりと説明する必要があると感じた。また、英語のディスカッションを難しく感じる学生もおり、日本語グループと英語グループを作ることが多かったが、そのためメンバーが固定的になりがちであった。英語での講義中の質問にも、英語巧者が答えることがほとんどだったため、もっとクラス全体でインターアクションが取れるような工夫が必要だと感じた。今後の課題としたい。

<Japanese Language and Japanese Culture B>

担当者名：<秋学期>嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 29 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本文化への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語の語彙や表記、慣用表現などについて、その背景にある文化的・歴史的なことがらに触れながら学んでいく。授業は英語と簡単な日本語で行われる。講義も行うが、学生同士のディスカッションや調査なども頻繁に行うようにした。トピックとして扱ったのは、日本の労働、冠婚葬祭、スポーツ、音楽、ジェンダー問題、茶道などであった。茶道はゲストスピーカーを招いて実施した。学期末には、学期中に扱ったトピックと関連させて学生自身の国や社会と比較するなどのプレゼンテーションを行った。

結果と課題

履修者が29名と多く、クラスとしての一体感をなかなか出せなかったことが、教師として感じた課題である。文化を扱う授業であり、異なる文化背景の学生が多く集まるクラスであるため、各自の文化について気軽に共有できる雰囲気を作る必要がある。しかし29名いると、教室内での移動やお互いの名前を覚えることも難しく、同じメンバーで固ってしまふことが多かった。クラスの雰囲気作りを、今後の課題としたい。ただ最終発表及び最終レポートでは、それぞれに授業で学んだこと深めてくれ、学習成果を披露してくれた。各自授業から学んだことがあったようで、よかったと思う。

<Japanese Language and Japanese Society A>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期24名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語と日本社会に関するテーマを毎回1つずつ扱った。地域方言、社会方言、名前の変遷、ボディランゲージ、日本語の表記体系、日本の教育制度などである。授業は、冒頭にそれぞれのテーマについて10程度の質問を学生に投げかけ学生間で考えさせた後、講義を行い質問の答えを示すという形式で進めていった。授業後半には、各テーマについて日本と学生の出身国との比較についてグループでディスカッションさせ、その結果を発表させるなどして、学生の積極的な参加を促した。また、体験学習として書道と茶道を取り上げた。茶道は、表千家の教授をゲストスピーカーにお招きし、茶道に関して講義していただき、お点前を披露していただいた。期末レポートは、授業で扱った「地域方言」「名前(ファーストネーム)」「若者言葉」「男性語・女性語」「キャンパス言葉」の中から1つのテーマを選択し、インタビュー

調査やアンケート調査を実施し、その結果を分析したうえで、学生の出身国との比較などについて論じさせた。コースのまとめとして、最終授業でレポートの概要を発表させた。

結果と課題

受講生の日本語のレベルは、J0 から J8 までさまざまであったが、学生達は、毎回熱心に取り組んでいた。授業冒頭にテーマに関する質問を投げかけ学生同士で考えさせた後に、教師が説明するという授業方法は、学生の興味を引きつけたようであった。授業の最後に毎回書かせたリアクションペーパーに、質問についていろいろと考えるのが楽しいというコメントが記されていた。20 名以上の比較的大きいクラスであったが、学生達が積極的であったため、クラスをスムーズに運営することができた。期末レポートでは、各テーマについて学生自身が 10 名から 20 名程度を対象に調査を行い、その結果をまとめさせたが、教師の期待以上に深い分析・考察がなされていた。最終日に振り返りとして、コース全体の感想に加え、今後学びたいテーマを調べたところ、着物や華道などの日本の伝統的文化やポップカルチャーなどが挙げられていた。これからも学生の興味のあるテーマを導入し、学生の日本語・日本社会への理解が深まるよう授業内容を工夫していきたい。

<Japanese Language and Japanese Society B>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 31 名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業では、日本語と日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ扱った。テーマは、人称詞、色・動物のイメージ、日本の食生活、日本の衣生活、日本の宗教、日本の祝祭日などである。それぞれのテーマについて講義をしたうえで、グループやクラス全体でディスカッションをし、学生の積極的な参加を促した。また、俳句を作るという体験学習も行った。敬語について講義をした翌週に、グループで日本人学生にインタビューして敬語に対する意識調査を行い、結果を発表するという活動も取り入れた。さらに、ゲストスピーカーとして神職を招き、神道についての講義をお願いした。期末レポートでは、授業で扱った家族間呼称をテーマに母語の呼称体系と日本語の体系とを比較対照させるものか、敬語について日本人を対象に意識調査したものをまとめるものかのいずれかの課題を選択させた。

結果と課題

今年度で 2 年目のコースであるが、受講者数が 31 名という初年度の 2 倍の大きさのクラスとなった。学生数が多いため、クラスに活気がある反面、学生一人一人に目が行き届かないという問題点が感じられた。総じて、学生はディスカッションや活動に積極的に取り組んでいた。学生の日本語のレベルは J0

から J7 までさまざまであったため、ディスカッション時に日本語と英語とのグループ分けに苦心したが、授業後のリアクションペーパーから、学生たちが日本社会だけではなく出身国の社会文化についても意見交換ができ、授業内容に満足していることが窺えた。他方、遅刻欠席の多さが昨年度よりも際立っていた。クラスが大きいため自分一人が欠席しても目立つことはないし高を括る学生がいたのかもしれない。大きいクラスであっても、コースを通して学生の学習意欲や緊張感が維持できるようなクラス運営を行うことを今後の課題としたい。

2018 年度 日本語演習 授業記録

コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習 1 は J2 レベル、演習 2 は J3 レベル、演習 3 は J4 及び J5 レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習 1 では「アニメ／日本の歌」、演習 2 では「映画／まんが」、演習 3 では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習 1～3 の詳細は以下の通りである。

<演習 1>

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本のアニメや歌を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、日本人の考え方などについての理解を深める。

授業の方法

アニメを通して学校（教育制度、お弁当、掃除、部活動、先輩後輩、受験、防災訓練）、住まい、就職活動、結婚、年中行事などについて学び、自国の文化・社会との相違点や共通点について話し合ったり、発表したりした。日本人学生ボランティアを呼んで、それまでに学んだ内容について日本人学生の体験談や意見を聞いたりする機会も設けた。また、日本の歌を聞いて歌う時間も作った。年間行事に関連して、春学期は七夕飾りの作成、秋学期は書き初めを行った。期末はインタビュー・プロジェクトを実施し、

それぞれが関心を持つテーマについて日本人にインタビューし、その結果をレポートにまとめて口頭で発表させた。

主な使用言語は J2 レベルの簡単な日本語とし、必要に応じて英語も使用した。

結果と課題

<春学期>

春学期は J2 の学生の履修率が非常に高く、J2 は 11 名中 10 名が演習クラスを履修した。日本語力が低めの学生が多く、これまでより英語の使用率が高くなったが、なるべく J2 の学習進度に合わせて、既習文法と語彙を使えるよう工夫をした。インタビュー・プロジェクトは今学期も好評で、実際に日本人に話を聞くことで日本文化・社会への理解を深めることができたという学生が多かった。ただし、発表、レポート、ともに、構成や盛り込むべき項目を伝えているにもかかわらず、インタビュー対象者について説明がない学生もいた。今後は、発表やレポート提出の前に、必要な要素が入っているか、自分の準備したものを見直す時間を設けるなどしたい。

<秋学期>

秋学期は J2 の学生 4 名と J2S の学生 2 名が履修した。前回、発表やレポートに、必要な要素が抜けている学生がいたため、今回は構成や必ず盛り込むべき項目について繰り返し伝えたところ、この部分に問題のある学生はいなくなった。春学期まで、中間の発表は学期前半に扱った教育のテーマについて自国と比較するという課題だったが、今学期はビジターセッションで日本人学生に質問した内容を報告して自国と比較させた。発表で使う日本語も紹介しておいたので、中間の発表は全員が日本語で発表を行った。日本語力の低めの学生も、熱心に取り組む、よい発表ができた。

このクラスはスピーチ 1 回、発表 2 回があり、そのほかにワークシートの提出といった宿題があったが、ワークシートの宿題は提出状況がよくなかった。毎週必ず宿題があったわけではないため、スピーチと発表以外の簡単な宿題は忘れてしまうようであった。来学期は宿題を毎回出すなどして、意識させたい。

<演習 2>

担当者名：<春学期>金庭久美子 <秋学期>清水知子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名、秋学期 9 名

使用教材：独自教材

目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの映画やマンガを取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。ま

た、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

<春学期>

「日本の衣食住」をテーマとし、「和食」「弁当」、「制服」、「日本の家」等のトピックを取り上げた。それぞれの内容に関わる日本のドラマや映画を部分的に視聴し、気づいたことを話し合ったり、自国の状況を紹介しあって比較を行ったりした。また、学期の途中には、自分たちの国のドラマや映画を紹介し、そこから読み取れる文化的な特徴や日本文化との違いを分析するプレゼンテーションも行った。学期末には授業で学習したテーマの中で気になっていることを一つ取り上げ、自分の国と日本との違いや、その背景についてまとめることをレポート課題として提出させた。

<秋学期>

日本の「衣食住」を理解することを目標に授業を展開した。授業では、「衣・食・住」から、いくつかテーマを選定し、テーマに合った内容のマンガやドラマ、映画を視聴し、ディスカッション・発表をするという順で進めていった。母国との違いや感想を述べるだけでなく、その背景や理由まで考えるよう促した。また、学期中盤には、日本と自分の国の違いを紹介するプレゼンテーションを行い、学期末には、授業で学習したテーマの中で気になっていることを一つ取り上げ、自分の国と日本との違いや、その背景についてまとめることをレポート課題として提出させた。

結果と課題

<春学期>

複数回映像を使用したのが、ワークシートを与えたため、日本の文化的な特徴にポイントを絞って見ることができ、その後のディスカッションにもつなげることができた。ディスカッションは積極的な学生が多く、毎回活発に意見交換が行われた。その際、日本語で伝えることが難しい場合は英語の使用を認めた。どの学生も日本語への意欲が非常に高く、クラス全員がまずは日本語で話そうとする姿勢が見られた。うまく説明できない場合は学生同士で補い合い、理解し合っていた。学期の中盤に行われたプレゼンテーションでは自国らしさを表す映像を皆に紹介する授業を行ったが、それぞれの国を端的に表す映像を示し説明しており、お互いに関心を持つことができた。プレゼンテーションは聞き手を意識し行っており非常によかった。発表は日本語だがスライドは英語にする、日本語で発表した後で英語で解説するといった方法で行われた。最終レポートでは授業内容に結び付け、「衣」「食」に関するテーマを選び内容的にはよかったが、日本語でのレポートは2名のみであった。日本語で書くためのフォーマットを与えるなどして、もう少し日本語の使用を促すべきだったと感じた。

<秋学期>

前年度と同様に、作品の視聴前後にワークシートに書かせて準備作業の時間を取るようにした。履修者

が 7 名(2 名はコース開始後まもなく履修取り消し)と少人数のクラスであったため、学生一人一人に発言の機会を与え、日本文化や日本社会の背景の考察、自国との比較を行った。グループでの話し合いも適宜取り入れた。コース開始直後は静かな印象だったが、授業回数を重ねるごとに発話が増え、話しやすい雰囲気になっていった。難しい内容については英語での発言も OK としたが、発言の 100 パーセントが英語にならないように促し、少しでも日本語でまとめさせるように仕向けた。また、学生の英語発話のあとには、教師がわかりやすい日本語に言い換え、その表現を確認した。プレゼンテーションは、自国のドラマやアニメを紹介したいという学生の思いの伝わる立派な発表だった。難しい語彙や表現はなるべく避け、わかりやすい表現で発表しようという姿勢も多々見られた。学期末のレポートで学生が取り上げたテーマは「食」「住」の分野であった。授業の内容とリンクさせること、ネットからのコピーは NG、日本語では文体を整えること、という指示は守られていたが、参考資料を提示していないものが見られた。また、英語での提出が 7 名中 4 名と過半数を占めたことから、レポート作成にあたっては、日本語使用に向けて具体的指導を入れたほうがよかったと感じた。

<演習 3>

担当者名：春学期：井上玲子 秋学期：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 14 名、秋学期 7 名

使用教材：独自教材

目標

プレイスメントテストで J4、J5 レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

<春学期>

クラスでは短編小説と川柳を扱った。学期の前半は日本語学習者向けの多読教材の中から、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』と『鼻』を、学期の中盤からは吉本ばななの『キッチン』を読んだ。毎回、小説を読んでくることを宿題とした。小説は場面ごとに担当者を決め、毎回 1~2 名がレビューを行った。その後、該当場面の心理描写・情景描写をディスカッションポイントとして取り上げ、意見交換を行った。また、映画化された『キッチン』の DVD を鑑賞し、小説との違いなど各自興味を持ったテーマについてプレゼンテーションを実施した。

川柳は、短歌や俳句と比較して提示し、「サラリーマン川柳」などのウェブページを紹介した。「サラリーマン川柳」から各自気に入ったものを選び、その川柳の意味、どうしてその川柳を選んだのか、毎回 1

～2名に発表してもらった。また、川柳を作成する課題を出し、発表を行った。

<秋学期>

クラスでは短編小説、詩、俳句、川柳、短歌を扱った。小説は『むじな』、『雪女』（小泉八雲）、『注文の多い料理店』（宮沢賢治）、『デューク』（江國香織）を読んだ。詩は、谷川俊太郎と相田みつをの作品を、短歌は、俵万智の『サラダ記念日』を扱った。作品ごとに担当者を決め、毎回一名がレビューを行い、その後、担当者が提示したディスカッションポイントをもとに、クラス全体で意見交換をした。学期末には、ビブリオバトルで本を紹介してもらい、それに関してレポートを課した。そのほか、「お～い、お茶」のサイトから各自が気に入った作品を紹介する活動や、自身で俳句・川柳を作成し、発表する活動も実施した。

結果と課題

<春学期>

事前に該当箇所を読み、理解してから授業に参加していたので、積極的にディスカッションが行われていた。受講生の中には文学が専門の学生や元々文学が好きな学生がいたので、その学生たちが中心となってディスカッションが行われていった。学期の前半は教師がディスカッションポイントを提示し、それに沿って意見交換を行っていったが、途中から学生にディスカッションポイントを考えてもらった。また、『キッチン』では4つのグループに分け、学生が主体となって、ゼミ形式で授業を行った。最初、学生は自分たちで長い時間授業を運営することができないと言っていたが、どのグループも事前に話し合い、ディスカッションポイントやそれに対する自分たちの意見をしっかり準備して授業に臨んでいた。結果的には授業時間ギリギリまで意見交換を行い、授業時間をオーバーするまでファシリテートしたグループもあった。学生同士の方がより活発に意見が飛び交っていたので、早い段階で学生に任せてもよかったのかもしれない。

ほとんどの学生にとって、日本語学習者向けの多読教材から『キッチン』への移行は日本語のレベルが急に上がったと感じたようであったが、大半の学生は原作をしっかり読み込んで授業に臨んでいた。しかし、一部の学生にとっては、辞書で語彙を調べても内容把握が難しかったようで、ディスカッションで自分の意見が言えない学生が数名いた。ディスカッションの前に時間を設け、理解できている学生と内容を確認し合いながら、最後まで原作を使用して読んでいったが、途中段階で翻訳版を紹介してもよかったように思った。

川柳についても、皆意欲的に授業に参加した。ただ、川柳を作る活動では「なかなかアイデアが出ない」、「5、7、5の形式で作れない」といった学生もいたが、最終的には全員素晴らしい作品を発表してくれた。

<秋学期>

日本文学が好きな学生や、授業で日本の作品を読みたいという学生が集まった。学期始めは、積極性に欠け、決まった学生が発言するという雰囲気であったが、回を重ねるごとに自由に発言しやすい雰

困気へと変わっていった。そのため、学生間での協働が見られ、学生主体の授業が展開された。発表は、各自オリジナリティーある内容であり、リラックスした雰囲気の中で行われた。授業では、事前に作品を読み、分からない表現の意味調べと印象に残ったところに印をつけるという予習を課したが、読解力にレベル差があったため、難易度が高い作品を扱う回では、読解に苦勞する学生が数名いた。そこで、授業で扱う作品と担当者決めに、検討の必要性を感じた。

2018年度 総合日本語4-6 授業記録

コースの概要

J4～J6の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

<総合日本語4-6A>

担当者名：嶋原耕一

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期19名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解を軸に、内容確認、グループ・全体ディスカッション、個人・グループ発表を行った。扱ったテーマは、「観光地」「祭り」「江戸しぐさ」の3つである。読解教材は、内容は同じであるが、学生の各レベルに合わせたものを準備し、授業外で読んでくることを宿題とした。また、読解で扱ったテーマに関する作文の宿題を2回出した。毎回の授業にはTAが参加し、ディスカッション、作文のフィードバック、学生のレベル差への対応など、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

春学期はJ4の学生が多く、J6の学生が少なかった。どのレベルの学生の学習も進むように考えながら、授業を展開し、できるだけ異なるレベルの学生同士でグループワークに取り組ませた。振り返りでは、「相手に合わせて表現を変えたりするのは練習になった」という学生がいた一方で、特にJ4の学生から「難しすぎた」という声も聞かれ、課題を感じた。TAが入る授業でもあるため、TAにはJ4の学生を重点的にサポートしてもらおうなど、対策が必要だったと思う。今後の課題としたい。

<総合日本語4-6B>

担当者名：谷啓子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 14 名

使用教材：独自教材

授業の方法

VTR「クローズアップ現代」（NHK総合）を素材に、「①若者の消費」「②未婚化」「③育メン」の3テーマから現代日本社会を考えた。各テーマの流れは、0週目：VTRに出てくる語彙シートを配布、意味調べは次回までの宿題→1週目：テーマに関わるウォームアップワーク→語彙シートの確認とフォロー→内容をメモしながらVTR視聴→メモした内容をグループでシェア（VTRは前後半に編集されているため、第2週もこの流れを繰り返す）→グループディスカッションである。グループディスカッションは各グループから出た意見を代表がまとめて発表し、全体でシェアした。

各テーマの終わりには学習した表現を復習するための復習プリントを配布した。まとめの課題として、テーマ①については作文（だ・である体を指示。字数はレベル別）、テーマ②については図表の表現を使ったミニ発表を行った。最終課題として、扱った3テーマから最も興味を持ったものを選び、各自視点を絞って口頭プレゼンテーションを行った。

結果と課題

全体に積極的に参加し、提出物の状況も良く、よい雰囲気であった。前半は遅刻欠席が少なかったが、後半、例年のない暑さや疲れから遅刻や体調不良による欠席が増えた。

J4が6名、J5が3名、J6が5名という上と下にレベルが分かれる構成であったため、特にフォローが必要そうなメンバーについては個別にフォローを心掛け、TAさんにもみてもらうようにした。課題の指示はプリントで配付したが、J4の数名が一部理解していないことがあったので個別に確認するなどして注意したい。

今期はテーマ2のミニ発表について、図表の表現の説明をリニューアルし、発表にも表現を使うようにしたところ、J4のメンバーもよく使えており、それが最終発表や作文でもいかされた学生もいた。

前回からの課題であった配布物の整理については、テーマごとに最初に配布できるものはまとめて配ることでかなり改善できた。同じく前回からの課題のDVDのメモシートであるが、違うものを用意するより視聴後のシェアタイムにフォローが必要なメンバーを中心にみるようにし、各グループにこれまでより多くヒントを与えた。

各テーマ最初の語彙確認の中で、関連する語彙を使っての活動を行い（例：各国の初婚平均年齢インタビュー）、続くDVDで内容確認、その感想を言い合うディスカッション→まとめ作業、という流れが、レベルに関係なく関連する語彙・表現を使ってのアウトプットにつながっているのが実感される期であった。今回はこの流れをさらに整えていきたい。

<総合日本語 4-6C>

担当者名：嶋原耕一

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 18 名
使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解教材を軸に、内容確認、ディスカッション、発表、作文を行った。扱ったテーマは、「若者」と「日本の外国人」である。読解教材は、J4、J5、J6 それぞれのレベルに合ったものを用意し、語彙リストを添付した。作文は、読み物のテーマに沿ったものを宿題として 2 回出した。また、毎回の授業には TA が参加し、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

クラスには、J4～6 の学生が偏ることなく在籍していた。レベル差がある中でお互いに学びがあるように、一回目のグループワークではレベルの異なる学習者を同じグループとした。

しかし、J6 の学生がまとめる役に回ることが多く、J4 レベルの学生には発言を控えてしまう者もいた。その結果、うまく機能していたグループもあったが、一部の J4 学生はあまり役割をこなさずに、グループワークを終えてしまった。その結果を受け二回目のグループワークでは、控え目になってしまう学生は J4 同士で固めてみた。するとうまく機能し、みな積極的にグループワークに参加してくれた。レベル差があるクラスの中で、全員の積極的な参加を促すためには、それぞれの性格を見ながらグループを決める必要があると感じた。もう一つ課題としては、J4 学生にも伝わる発表するよう、J5 と J6 学生には指示したが、必ずしもその意義が正確に伝わっていなかったことが挙げられる。分かりやすさに配慮することは、日本人と話すときにも有効なコミュニケーションのストラテジーだが、J5・J6 学生の中には、それが自身の語学力向上を妨げると考えるものもいたようである。そのため、発表で難しい言葉ばかりを用い、J4 学生がその発表についていけない、ということが見られた。今後、レベル差がある学生が一つのクラスで勉強することの意義を、より強調して伝えていく必要があると感じた。

<総合日本語 4-6D>

担当者名：谷啓子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 20 名
使用教材：独自教材

授業の方法

日本の四季と年中行事を題材に、関連する語彙や表現を学んだ。その中で担当した語彙を調べてシート

にまとめる、短い発表を行う、グループで話し合う、作文を書く等、様々なスキルを使うことで運用力を伸ばすよう計画した。映像素材としては、NHKのDVD「しばわんこ和の心」を部分的に使用した。

初日オリエンテーションでは、この授業に必要な日本の暦や時代区分、季節について確認し、資料を配布。比較のために履修者の出身地の季節についてシートに記入してもらった。その後は1課「冬」、2課「春」、3課「夏・秋」の3課を順に進めた。

各課（季節）は2～4回から成り、「ことば調べ」の読み確認→担当のことばを調べる（宿題）→発表→VTRで内容確認→グループディスカッション（その場でフィードバック）→小課題（作文または発表）→まとめプリント、の流れである。

「ことば調べ」は、テーマに関する語彙（例：鳥居）を1語担当し、シートに簡潔にまとめ、数分で発表する。その際、画像などの視覚資料を見つけた場合はOHCで見せながらクラスメイトに説明した。その後、その季節に関するDVDを視聴、語彙を映像とともに確認し、理解を深める。

グループディスカッションは4～5人の小グループで行い、学生の司会のもと、DVDについての感想を述べたり、出身地ではどうかを紹介したりする。そこに教師またはティーチングアシスタント（TA）がつき、適宜メモをとってフィードバックを行った。フィードバックは教師やTAから一方的にするのではなく、よりよい表現をメンバーで考えてもらうよう意識した。

まとめプリントはレベル別の復習プリントである。その課の語彙の読み、コロケーション、学んだ表現を使っの短作文などである。課が終わる日に配布、次回提出とした。

第13・14回で最終課題として今期扱った内容から個々にテーマを見つけ、7分程度のプレゼンテーションを行った。

結果と課題

履修者数が昨年度より7名増の20名、J4も多かったため、授業のスケジュールや方法を修正しながら進めた。グループディスカッションを録音してその場で聞き直してフィードバックするのが総合Dの特徴であるが、今期は録音せず、教師やTAがボードにメモをとってフィードバックする形にした。これまではレベルより出身や性別など、意見のバラエティを重視してグループを組んできたが、今期は比較的近いレベルでバラエティあるグループを組んだ。

なお、ディスカッションには表現プリント「使ってみよう」を用意している。ディスカッションに入る前にグループで確認するのだが、今期はグループ内のレベルがそろっていたため、J4が多いグループでは丁寧に時間をかけて、J6が多い場合はさらっと確認する程度ですぐ話し合い、という具合にできた。特にJ4、5の学生は意識して新しい表現を使おうとしていたのが印象的であった。「使ってみよう」や復習用のまとめプリントの内容や使い方を修正したこともあり、扱ったテーマ（例 年末年始の過ごし方）についての会話や作文はレベルに関係なく表現が豊かになったように思う。

履修者が増えて改善の必要性を感じたのは最終課題のテーマ選びや方法である。取り組みたいテーマが重なったり、1人あたりの発表時間が減り、聴く時間が増えて受け身になってしまったりする。第3課

夏・秋のまとめ作業としてグループで図表を読み解き発表する活動を入れているが、学生一人一人の発話量も多く、自主的な学びになっている印象があるので、今後はグループ発表の形も検討したい。

2018 年度 漢字 授業記録

コースの概要

どのレベルの学生でも履修することができるクラスである。学生は自分でレベルを選択し、学期中 2 回ある立教漢字検定に向けて、その範囲の漢字語彙を学習する。

担当者名：＜春学期＞嶋原耕一、＜秋学期＞谷啓子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 33 名 秋学期 35 名

使用教材：独自教材、立教漢字検定テキスト

目標

履修のための日本語レベルは問わず、全レベルの学生が履修することができる。漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字の語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

授業の方法

立教漢字検定のテキストを用いて、各学生が決めたレベル、分野に沿って学習を行う。2018 年度は B1～B6 レベル、I-A～I-G を対象とする。授業ではテキストに沿ったワークシートを中心に、個別学習とピアラーニングを行う。また、毎回、自身の受験レベルの範囲にある漢字を使った漢字語を教室外で見つけて発表する「漢字発見」の活動と、クイズを行う。

結果と課題

＜春学期＞

春学期は履修者が 33 名となり、TA がクラスにつくこととなった。J0 から J8 まで様々なレベルの学生がいたが、TA もいたことにより、J0 に対するケアは十分にできたのではないかと考えている。ただ、特に中級の学生で、最初のレベル設定を高くしすぎた学生は、テキストとクイズの難しさに戸惑う者もいた。あまりに知っている漢字や熟語がなさすぎ、途中でやる気をなくしてしまう学生もいたので、初回授業でのレベル決定の誘導を、工夫する必要があると感じた。ただ大半の学生は、淡々と学習を続け、立教漢字検定に合格する者も多かった。一人では漢字学習を進めることが難しいと感じる学生も、このようなクラスがあるからこそ、努力できるのではないかと思う。

＜秋学期＞

秋学期の漢字 B は中級レベルがスタートしたこと、前コマの科目と漢字 B の履修者層が重なることもあり、35 名の履修があった。今期 J0 の学生はいなかったが、J3 以下の学生への対応として配布物や説明用のパワーポイントは漢字にはルビ、英語を併記した。

学生たちは初級 B6・B1、中級 I-A～G レベルから漢字検定にトライするレベルを選ぶことになる。初日オリエンテーション時にクラス内で選び、その場で検定の申込みをするのだが、J4 以下の学生が I レベルを選ぶと、ワークシートや課ごとのクイズの難しさに、後から変更を希望するケースがある。原則変更ができないため、次期はレベル別の目安をより分かりやすく示して適正なレベル選択ができるようにしたい。なお、昨年度の運営上の課題であった国際センターとの連絡や検定の手続きは改善され、スムーズに運んだ。

授業全レベル課ごとに確認のためのクイズを実施した。1～5 課は各課のワークシートが終了した次の回に、5 課まで終了した次の回では 5 課分のまとめクイズを行った（12～13 レベル分のため、クイズの配布に時間がかかる）。漢字の読みを書く問題では、J4 以下の学生はひらがなの表記のミスで点につながらない場合があった。

最終回はまとめ活動として、色紙に漢字を書いた。自分の名前に漢字をあてるか、好きな漢字を選び、筆ペンで書いたら千代紙や色で飾り付けを楽しんだ。皆非常に楽しんでおり、よい記念になったとの声が聞かれた。

2018 年度 Business Japanese I / Business Japanese A 授業記録

コースの概要

Business Japanese I / A は、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。Business Japanese I は J4, J5 レベル、Business Japanese A は J6, J7 レベルの学生を対象とする。

<Business Japanese I>

担当者名：数野恵理、富倉教子、平山紫帆、沢野美由紀、山内薫

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 5 名

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

この科目は、将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具

体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの3本柱で展開した。

本授業の主な流れは、①朝のロールプレイ、②オリジナル教材を用いたキーフレーズの導入ならびに会話練習、③帰りのロールプレイである。①と③では、出勤・退勤時に同僚と交わされる日常会話を練習した。②では、商談、会議、電話応対等のビジネス場面で適切に対応できるよう、導入と練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやりとりを想定した応用練習を行った。さらに、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴解練習も行った。

学期中6回実施したゲストセッションでは、コース前半は顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品・新戦略の提案を行った。セッションは録画をし、後日フィードバックを行った。

結果と課題

BJIは5名登録したが、1名は最初の数回出席したのみで、実際にクラスに出席していたのは4名だった。J4が2名、J5が2名で、学生たちの日本語力にはかなりレベル差があったが、お互いに協力し合いながら日々の活動に取り組み、日本語、ビジネス用語、慣習などを熱心に学んでいた。J4の1名は大学院の授業や課題の忙しさから、中間以降欠席しがちになり、コース半ばで諦めかけたが、どうにか最後まで頑張った。

週に一度の聴解練習では、当初ビジネス用語やスピードに戸惑う学生もいたが、次第に慣れていった。ただし、敬語を聞いて意味や動作主を判断するのはまだ難しいようで、更なる練習が必要である。

ビジネス経験豊富なゲストを迎えたゲストセッションでは、回を重ねるごとに説明の仕方や受け答えが上手になり、ゲストからの質問もより高度なものになっていった。J4の学生はまだ語彙力を伸ばしていく必要があるが、将来どの学生も日本人とのビジネスに自信を持って臨めるだろうと思われる。

今後の課題として、二つ挙げたい。一つは授業の開始と終了前に行うロールプレイのバランスである。学生の課題の進捗状況などの関係で、「帰りのロールプレイ」の実施が、「朝のロールプレイ」に比べ、少なくなってしまった。来年度は曜日あるいは週ごとに強化するロールプレイを変えるなどして、両ロールプレイを定期的実施するようにしたい。もう一つは教材開発である。今年度は主に学期前半のプロジェクトについて、初級を終えたばかりの学生にとっても無理のない内容となるよう、また、実際のビジネスの流れに合った形になるよう、設定や順番を見直し、一定の効果が見られた。来年度は、学期後半のプロジェクトについて見直しを進めたい。ビジネス場面で求められる提案のプレゼンテーションにより近づけるために、ゲストからの質問やコメントを生かして教材を開発することを課題としたい。

<Business Japanese A>

担当者名：金庭久美子， 富倉教子， 平山紫帆， 沢野美由紀， 山内薫

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 2 名

使用教材：独自教材

目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの3本柱で展開した。

本授業では、ゲストセッションに向けて課題を設定し、その課題が達成できるようにさまざまな表現を導入し、実際の現場で使えるようにしている。本年度の課題は「新製品の売り込み」「新製品販売状況報告」「取引先への謝罪と説明」「問題の対応策の検討（社内会議）」「自社説明（プレス）」等である。

結果と課題

履修者 2 名のうち、1 名は日本語専攻で日本語にはほぼ問題がないが、ビジネスについては専門知識を十分に持っていなかった。一方、もう 1 名は経済・経営についてハイレベルの知識を持つが、日本語のレベルとしては前者より低く、時折文章中の未習語彙につまずくことがあった。タイプの異なる 2 名であったが、一学期を通して、両者ともモチベーションを落とさずに、それぞれの個性を発揮し、協力して授業ならびに活動に取り組んでいた。思慮深く、個々の考えを明確にもっているため、「ビジネス」という環境を通して垣間見る日本の社会や文化、慣習など様々なトピックで議論ができた。

ゲストセッションに向けた準備・練習では、2 名とも、非言語面では指導することがほぼなかったが、ビジネスで用いる敬語などの形式的な言語表現が多少疎かになってしまったことがあった。そのような場合、ビジネス表現を鵜呑みにするのではなく、批判的に捉える姿勢が顕著で、「なぜそうした表現をするのか」という質問が頻繁に出た。解決策として文化的な背景や理由について考えてもらったり、適宜説明を行ったりした。日本のビジネス上の考え方や慣習についての理解も深まったと思われる。

一方、課題として感じたことが 2 つある。1 つ目は専門用語指導である。発表のための語彙などを直したいと思っても、本人には譲れない部分があったようで、それが企業勤めをしているなら理解できるのか、専門的で理解しづらいのか、判断が難しく、このような学生を指導する立場として、専門分野について知る必要性を痛感した。2 つ目は学習目標の設定である。2 名が抱えているだろう課題（日本語の正確さや内容の重視等）をどこまで改善し、また各々が持つ個性（利点）を生かし、引き上げるのかについて、それぞれに応じた学習目標の設定が難しかった。今後も学生の状況に合わせた指導方法を探っていく

い。

2018 年度 異文化コミュニケーション研究科 TESOL-J プログラム 授業記録

コースの概要

異文化コミュニケーション研究科 TESOL-J プログラムに在籍する学生向けに、2016 年度に新規に立ち上げた科目である。日本教育センターの担当科目では、日本の教育機関で英語教員として働くことを目指す学生が、勤務後に必要な日本語会話や日本のマナーを学べるようにデザインした。

<Japanese in Educational Settings: Classroom and Kyoomuka>

担当者名：藤田恵

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期 0 名

使用教材：独自教材

目標

日本の教育機関で働く英語教員が教室と教務課等で使用する日本語を学び、実際に使えるようになる。

授業の方法

履修者がいなかったため、開講されなかった。

結果と課題

履修者がいなかったため、開講されなかった。

2018 年度 大学生の日本語 / 総合日本語 6-8 授業記録

コースの概要

「大学生の日本語」は正規学部生の 1 年生が大学における学習を日本語で行えるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。「総合日本語 6 - 8」として短期留学生や大学院生も履修可能であり、様々な背景をもつ学生が、共に学ぶ機会を提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<大学生の日本語 A6, 7, 8> <総合日本語 6-8A>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。

春学期は引用、定義と分類、図表の説明、列挙などの機能表現を導入し、6～8枚スライドを用いた5分のプレゼンテーションを計5回行った。1～4回はグループ内で発表した後で代表の学生がクラスの前で発表、5回目は全員がクラスの前で発表した。

使用教材

独自教材

[社会・経営]

担当者名：＜春学期＞長谷川孝子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：(池袋) 春学期 16名

結果と課題

発表自体初めての学生がほとんどを占めたが、課題やクイズを繰り返すことで、発表の基本を身に着けることができた。パワーポイントの見やすさ、内容の論理展開などに気をつけながら、基本の表現を使って発表することができるようになった。1学期間の達成度としては、十分だと思われる。次の段階としては、話し方にも注目させたい。発表原稿を読むだけでなく、構成メモを見ながら話す練習、ポーズや声の強弱などに意識を向けさせる練習などを多く取り入れれば、更なるレベルアップに繋がると考えられる。

[法学・異文化]

担当者名：aクラス：小森由里、bクラス：小林友美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 aクラス 18名、bクラス 10名

結果と課題

(aクラス)

大半の学生が日本語での発表、パワーポイントの作成をすでに経験していた。そのため発表に慣れており、発表に必要な表現などもある程度は身につけていたようである。発表自体に慣れてはいても、アカデミックなコンテキストでの発表については未習得なものがほとんどで、パワーポイントの形式や体裁、出典の示し方、参考文献の書き方、先行研究の扱い方、論理展開などに問題が見られた。しかし、発表へ

の慣れから、本コースの重要性が理解できず、授業を通して学ぼうとする姿勢を持たない学生が数名おり、コース途中から、真面目に取り組む学生とそうではない学生とにクラスが二分されてしまった。本コースでは、異なるテーマで発表を5回行ったが、教師のコメントを反映させ、回を重ねるたびに、パワーポイントの作成や発表が良くなっていく学生と、初回の発表から全く改善が見られないものとは大きく分かれてしまった。クラス全員にコースの意義を認識させ、学習の動機づけを行いながら指導することが今後の課題である。

(bクラス)

積極性には欠けるが、授業活動に真面目に取り組む学生が多く、出席率、課題の提出率が高かった。学期前半は、教師の指示とは異なる課題作成やターゲットになる項目を意識しない等、不安な点が見られたが、回を重ねるごとに、教師の指示やF Bに注意しながら、学習した表現や構成、発表の仕方を用いて発表できるようになっていった。ただ、F Bした部分を意識すると、その他の部分が抜けてしまうこともあったため、その都度、意識化させ、繰り返し練習する必要性を感じた。また、クラスの仲が良好であったためか、緊張感なく、練習、発表をする学生がいた。そこで、今後は、発表方法を工夫し、聞き手を意識した発表の仕方の指導に力を入れたい。

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期24名

結果と課題

人数の多いクラスだったが、熱心な学生が多く、グループでの発表練習にも積極的に取り組んだ。日本語7レベルの学生が引張ってくれて、6レベルの学生にも良い刺激となったと思う。春学期は調べたことと自分の意見をしっかり区別して述べるということを一つの目標にしており、大部分の学生はきちんと区別ができるようになったが、最終発表でまだ事実と意見の区別をしっかりとできていない学生も少数いた。秋学期も引き続きこの点に注意していきたい。また、皆の前で発表する際はスクリーンやパソコンを見るのではなく、聴衆の方を見ながら話すということも指導してきたが、人数が多く、4回目までの発表は代表者のみがクラスの前で発表し、他の学生はグループ内で発表をする形だったこともあり、最終発表で半数程度の学生はまだアイコンタクトが不十分だった。聴衆を意識した話し方については次の学期の課題としたい。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 11 名

結果と課題

2 回に 1 回の発表は負担が多いかと思っただが、学生は前向きに取り組み、導入や終結部分は後半 3、4 回目にはどの学生もほぼできるようになっていた。各回の目標になっていた定義、列挙、図表の説明、アンケート結果などもクイズを行うことで目標とする構文を学んでいったようだった。クラスの雰囲気明るく、助け合いも多かったので、クラス運営は行いやすかった。課題としては時間的な制限もあり、スライドからスライドへの繋ぎ、結果から考察へどう考えを深めればいいのかなどの指導が十分に行えなかった。また発音や話し方のメリハリの指導などがもう少しできると良かったのではと思う。再履修生が前半は来ていたが、後半欠席が続き単位が与えられなかったこと、特別外国人学生の一人が提出の仕方やスライドなど提出物が滞り、最終発表に至らなかったのは残念だった。

[心理・福祉]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 11 名

結果と課題

クラス開始時には非常に静かな印象のクラスだったが、回が進むごとに課題やクイズを通して理解を深めていく様子が見られ、それに伴って発表も形になってきた。最終発表のテーマもそれぞれの興味を持っていることを取り上げ丁寧に準備した様子が見受けられた。個人的な質問や確認の多いクラスで、その分、個々の学びが深かった印象がある。課題としては後半のまとめから考察に移るあたりの接続の表現、発表時間の意識などが挙げられる。アンケートの設問が少し答えにくかったのか、結果が思うようになかったという学生がいた。アンケートについても作成後、実施前に少しフィードバックする、ピアで聞き合うなど確認できる時間があるとよかったのではと思う。出席度、参加度が低く少し扱いに戸惑う学生が 1 名いたが、そのことによる他の学生へ大きな影響がなかったことは良かったと思う。

[経済・理学]

「大学生の日本語 A-8」は「J8 日本の文化・社会 A」と併置のため、「J8 日本の文化・社会 A」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 A-7」は「J7 聴解会話」と併置のため、「J7 聴解会話」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 A-6」は「J6 聴解会話」と併置のため、「J6 聴解会話」部分を参照のこと。

[GLAP]

「大学生の日本語 A」は「Japanese Language and Japanese Society A」と併置のため、「Japanese

Language and Japanese Society A」部分を参照のこと。

＜大学生の日本語 B6, 7, 8＞＜総合日本語 6-8B＞

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レジュメ、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

『上級日本語教科書 文化へのまなざし』のうち「国際共通語」、「フリーターと仕事」、「翻訳」に関する3テーマを扱った。資料1は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料2はAとBから各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、レポートの書き方の指導を行い、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

[社会・経営]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期17名

結果と課題

このクラスは「大学生の日本語」として履修している学部生が11名、「総合日本語」として履修している特別外国人学生・大学院生が6名のクラスであった。上級生も履修していることもあり、学部1年生は良い刺激を受けたのではないかと思われる。読解資料を読んだ後の話し合いも非常に活発だった。話し合いの後で、それをまとめて報告する機会が数回あったが、これが苦手な学生がいたので秋学期も引き続き練習していきたい。レジュメ、レポートについても学期の初めに比べ、かなり上達したが、レポートはまだ引用の仕方が不適切な学生もいるので、秋学期の課題としたい。また、課題の提出が遅れがちな学生も複数いたため、タイムマネジメントも気をつけるよう指導していきたい。

[法学・異文化]

担当者名：aクラス：井上玲子、bクラス：数野恵理

授業コマ数：週1コマ

結果と課題

(a クラス)

学期開始時に、学生が自律的に協働学習できるように、このクラスで 1 年間一緒に勉強していく仲間であることを意識させた。元々、積極的に発言する学生が多かったためか、読解のグループ活動、レポートのピアエディティング、レジюмеを用いた内容説明など、自主的かつ積極的に活動に取り組んでいた。受講生は非常に明るく協力的であったので、一学期間を通して、非常にいい雰囲気です授業運営することができた。また、受講生は全体的に学習意欲が非常に高く、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていた。そのため、ほとんどの学生が良好な成績を修めた。秋学期も引き続き学生の学習意欲の維持に努めたい。

課題として挙げられるのは、レジюмеの作成とレポートの引用の仕方を引き続き指導していく必要があるということである。レジюмеやレポートの書き方を着実に身につけることができた学生がいる一方で、なかなか定着しない学生もいた。レジюмеを作成する際、テキストの内容が十分に読み取れておらず、短すぎるレジюмеや文を抽出したのみで適切な箇所を箇条書きにしてまとめられていないレジюмеがいくつか見られた。レポート作成の際には、引用の仕方がまだ効果的にできていない学生がいた。秋学期も引き続き指導していきたい。また、受講生一人一人にフィードバックの時間が十分に取れなかったことも今後の課題であり、どうすれば授業内で効果的なフィードバックができるかを検討したい。

(b クラス)

日本語力が低めの学生が多く、学期のはじめは日本語での指示が理解されていないことがあったり、すぐに母語で話そうとする学生もいたりした。また、読解内容についての話し合いでは自分の意見を短く伝えるだけで、クラスメートの発言に対する反応がなく、話し合いと言えない状況であったため、必ず他の学生の発言の後に、確認をしたりコメントをしたりするように指導した。学期後半はやや改善されたものの、日本語力が追いつかず、あまり活発な話し合いとは言えなかった。

レポートについてはクラスで扱った内容（序論・結論部分の書き方、引用の仕方など）をしっかりと吸収して、構成のしっかりした分かりやすいレポートが書けるようになる学生もいた。一方で、授業を休みがちだった学生は、課題を提出したものの、クラスで扱った内容が十分に身につかないまま、一学期を終えることになってしまったのが残念である。また、語彙・文法面での不正確さが目立つ学生が数名いたが、レポートなどの個別フィードバックの時間に指導することしかできず、正確さを身につけさせることが難しかった。アカデミックな力を養うと同時に、基本的な日本語力を伸ばしていくことが課題である。

[文学]

担当者名：保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 25 名

結果と課題

授業活動に積極的に取り組む学生が多く、読解の解答、ピア編集活動等では意見交換が活発に行われ、その中で、学び合う姿勢、互いを尊重する姿勢が見られた。授業中も質問が多く能動的に学んでいたが、学期後半になると疲れを見せる学生が増え、意欲がやや低下する様子も見られた。

今学期、学生はレポートを 2 回作成したが、その準備と書き直しの際に、レポート作成の上で必要な知識を導入した。引用の仕方や構成の作り方、論拠の立て方など、作成時に特に重要となる点にフォーカスしたが、十分な時間をとることが難しく、十分に理解できない学生もいた。学生の中にはレポートを一度も書いたことがない者もいるため、もう少し段階を踏んだ指導をしてもよいかもしれない。例えば、序論の構成を学んだ週は、序論が書けようになることだけを目指し、この達成度を評価するという方法である。14 週を経て、論証型レポートが書けるようになるために、少しずつ必要な要素を積み重ねていくという方法があってもよいかもしれない。

また、レポートの書き直しを通して、文法や語彙の正確性を高めることも目指したが、クラスサイズや時間の制限があり、一つ一つの誤りについてしっかりと検討する時間が持てなかった。J6 レベルの学生の中には、日本語で正しく文や段落を構成できない学生もいるため、彼らにとっては正確性を高めるための練習や授業活動が必要だと感じる。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名

結果と課題

今学期は 6 レベルの学生が増えたが、全体的に積極的にクラス活動に参加し、レポートやレジユメの作成に熱心に取り組んだ。レジユメの作成においては、資料の内容が十分に理解できておらず、短い文をそのまま書き抜いてしまう、見出しと要約内容が合っていないなどの誤りが見られた。来学期は適切な箇所を抽出してレジユメが作成できるように指導すると共に、文章の読解力を身に付けさせる必要がある。また、レポート作成においては、全体の構成、引用・参考の方法、参考文献リストの作成、図表の表現を中心に授業を進めた。ほとんどの学生は課題やクイズを通して正確な表現を身に付け、自分のレポートに活かして書けるようになったが、自己流で書くことが改められない学生も見られた。来学期は今学期の基本的な学習事項を復習しつつ、論理的な文章を書くためには整った形式や適切で正確な表現が不可欠であるということを引き続き指導していきたい。なお、再履修者は授業にほとんど出席せず、単位

の取得ができなかった。日本語授業は大学生活全体の勉学に欠かすことができないと思われる。何らかの対策が必要であろう。

[心理・福祉]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 13 名

結果と課題

今学期は 6 レベルの学生が増え、これまでレポートを書いたことのない学生が多かった。クラスではレポートにふさわしい硬い表現、引用・参考の方法、参考文献リストの作成など基本的な学習を中心に進めた。また、図表を説明する表現を使ってデータを効果的に用い、レポートの客観性と論理性を高めることを学んだ。学習項目を着実に身に付けることができた学生がいる一方、不正確な表現をなかなか改められない学生も見られた。レジュメ作成においては、学期の初めは文章の要約や見出しの付け方などに慣れておらず苦労していたが、ペアワークを通して自分とは違うまとめ方を参照でき、聞き手や読み手に分かりやすく示す方法を学べたようである。今後の課題としては、レポート作成が挙げられる。段落分けや書き言葉など基本的な誤りがまだ見られる。来学期は文章全体の構成、接続・引用表現など基本的な段階を繰り返し復習し、正確さ、適切さを身に付け、レポートの帰結に向けて論理的な展開ができるよう指導していきたい。なお、長期欠席で単位の取得ができなかった学生がおり、次年度の履修に何らかの対策を講じる必要があると思われる。

[経済・理学]

「大学生の日本語 B-8」は「J8 日本語論文読解（池袋）」と併置のため、「J8 日本語論文読解（池袋）」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 B-7」は「J7 作文」と併置のため、「J7 作文」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 B-6」は「J6 作文」と併置のため、「J6 作文」部分を参照のこと。

[GLAP]

「大学生の日本語 B」は「Japanese Language and Japanese Culture A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 C6, 7, 8> <総合日本語 6-8C>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。

秋学期は比較対照、図の解説、識者の見解への同意、部分的な同意と反論などの機能表現を導入し、6～8枚スライドを用いた5分のプレゼンテーションを計5回行った。各回の主な目標となる機能表現が含まれるスライドの1枚分についてはスクリプトも提出させた。1～4回はグループ内で発表した後で代表の学生がクラスの前で発表し、5回目の最終課題は全員がクラスの前で発表した。

使用教材

独自教材

[社会・経営]

担当者名：長谷川孝子

授業コマ数：週1コマ 履修者数：秋学期17名

結果と課題

学習者はパワーポイントの見やすさ、内容の論理展開などに気をつけながら発表練習を繰り返し、発表の基本を身につけることができた。また、クラス全体の前で発表練習をする際、目線と発表の姿勢を繰り返し意識させた結果、聞き手を意識した発表を心がけるようになっていった。しかし、声の抑揚やスピード、間の取り方など、話し方の技術に関しては、練習時間とフィードバックが明らかに足りていない。時間の確保が問題となるが、これら話し方の技術も教える必要があると思われる。

[法学・異文化]

担当者名：aクラス：藤田恵、bクラス：小森由里

授業コマ数：週1コマ 履修者数：秋学期aクラス18名、bクラス12名

結果と課題

(aクラス)

秋学期の法・異aクラスは、18名のクラスとなった。履修者全員が春学期の「大学生の日本語A」を履修し、ある程度の知識が身につけていたため、個々の課題と目標をたてることから始めることにした。履修者から出てきた目標は、クラス全体に向けての発表を緊張することなく進めるようになりたいというものであった。教師からは、初回の発表をもとに、参考文献の書き方、各スライドに載せるべき情報と

その順序、スライドのレイアウトといった改善が必要な点を、個別に与えるようにした。その結果、最終発表までにはそれぞれの課題の達成や改善が見られた。このほかに、クラスの目標に直接的な関連はないが、課題の形式が教師から指示されたものと合致しているか、提出時にどのようなファイル名にするべきかなど、大学での学びに必要なと思われる事項も、指導するようにした。今後の課題としては、履修者の本クラスの動機づけを挙げる。一部の学生は、学期の初めに動機が上がらず、クラス活動に消極的な態度を見せていた。このような学生には、自身の興味、関心と、クラスでの学習項目が異なることが要因としてあったようだが、教師からの指示とは異なる形式の課題を提出した場合は、学習目標が達成できていないという評価がされることもあるため、まずは、指示された形式に則った課題の作成を促すようにした。態度が柔軟になるにつれ、学びを得ていることを感じ、徐々に伸びていったが、学期初旬から同様の学びを得る機会が与えられなかったことが非常に悔やまれる。したがって、今後は、履修者に対し、活動の目標を明示し、積極的に参加をするような動機づけが行えるようにしていきたい。

(b クラス)

履修者数は 12 名と比較的小さいクラスだったが、欠席が目立つ学生と真面目な学生とに二分されていた。出席や課題の提出を促しても脱落してしまう学生がいる反面、クラスの半数の学生は無欠席で課題の提出や発表にも意欲的に取り組んでいた。初回のクラスで先学期を振り返り口頭発表やスライド作成について各自の問題点を意識させたが、真面目に取り組んでいた学生は、本コースでの 5 回の発表を通して、各自の課題を克服することができたのではないかと思われる。最終発表のスライドでは要点が簡潔に整理され見やすく工夫されており、また発表も聞き手を意識し堂々としたものが多かった。ただ、発表時の漢字の読み間違いや先行研究の要約の不備など、全体的に日本語力に問題が残った。口頭発表の技術が習得できるだけでなく、日本語力も向上するよう指導することを今後の課題としたい。

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 27 名

結果と課題

このクラスは 2018 年度春学期に「大学生の日本語 A」を履修した学生に再履修の学生が数名加わり、24 名という人数の多いクラスとなった。先学期の発表で、識者の意見などに賛成する場合に、出典を明記せず自分の意見のように発表する学生がいたため、今学期は識者の見解を引用して、それに同意する、また、一部同意してから反論するという発表課題を課した。これによって、引用した内容と自分の意見をしっかり区別することができるようになった。また、スライドの体裁や発表の表現もよくなった。

発表の仕方も内容も一年で非常によくなった学生も多かったが、問題の残る学生もいた。まず、日本語力がやや低めの学生は資料の内容理解が間違っていて、同意している内容が資料とは異なるということ

があった。また、一部同意（譲歩）して反論するという場合にも、主張が矛盾する学生が数名いた。さらに、日本語力自体は高い学生でも、聴衆の読んでいない資料を引用して紹介する場合、背景の説明が不十分でそもそも何の話をしているのかよくわからないということもあった。読解力や論理的思考力の育成は今後も課題となる。また、このクラスは必修であるが、数名が長期欠席で不合格となってしまった。再履修の学生や春学期に欠席の回数が多かった学生については学期のはじめにもう少し学生から話を聞くなど工夫したい。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 11 名

結果と課題

このクラスは「大学生の日本語」と特別外国人学生を対象とした「総合日本語」が併置されているため、春学期からの継続の学部生が 9 名、再履修が 3 名、それに 1 名の特別外国人学生という構成であった。大半の学生は、A からの継続で内容やクラスの進行に慣れていたこともあり、授業の流れについてくることができていると思う。特別外国人学生も比較的早い段階でクラスに馴染んでいた。クラスの雰囲気は明るく、発言も多いクラスであったが、その分、スクリプトが付いていないなどケアレスミスも多かった。

今期は前半の図解や比較、また後半同意や反論など、自分の考えを深めなければいけない課題が多く、発表の形は指導できたものの、考えを深めるという部分がどれほど十分な指導ができたのかはやや疑問である。特に後半の課題では引用はできてもそこから同意や反論、また提案への結び付け方がうまくできていない学生も多かった。ただ最終発表では構成も含め、すべての発表者が自分の意見を述べることができている。スクリプトを作らせることで、発表の言葉の使い方の確認ができたことも良かったと思う。再履修の学生が 1 名はほとんど出席せず、もう 1 名も十分に活動に参加できていなかったことは残念だった。

[心理・福祉]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 12 名

結果と課題

春学期からの継続の学部生 9 名に加え、総合日本語 C の特別外国人学生 3 名が参加し、前期より活気の

あるクラスになった。学生は一つ一つの課題に丁寧に取り組んでいくことで、発表の構成や出典の扱い方をきちんと学んだ印象がある。観映のクラスと同様に、各テーマの発表の段階では考えを深めることが難しそうであったが、発表の基礎的知識は身につけられたのではと思う。最終発表では各自自分なりの提案ができていた。自分と向き合うタイプの学生が多かった分、他者へのコメントや質問はあまり積極的にできていなかった。学生同士でも学べるクラス運営の方法を指導面での課題としたい。2名の学部生が途中で離脱してしまったことは残念であった。

[経済・理学]

「大学生の日本語 C-8」は「J8 日本の文化・社会 B」と併置のため、「J8 日本の文化・社会 B」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 C-7」は「J7 読解」と併置のため、「J7 読解」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 C-6」は「J6 読解」と併置のため、「J6 読解」部分を参照のこと。

[GLAP]

「大学生の日本語 C」は「Japanese Language and Japanese Society B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society B」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 D6, 7, 8> <総合日本語 6-8D>

目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

『上級日本語教科書 文化へのまなざし』のうち「個性と学び」、「ポップカルチャー」と、新しく生教材の「AI」に関する読み物の3テーマを扱った。資料1は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料2はAとBから各自読み物を選択し、その内容について発表できるようにレジユメの作成を行った。さらに、レポートの書き方の指導を行い、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社。

井上智洋、2018、『人工知能と経済の未来—2030年雇用大崩壊』、文春新書。

小林雅一、2017、『AIの衝撃—人工知能は人類の敵か』、講談社。

[社会・経営]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 17 名

結果と課題

このクラスは「総合日本語 6-8D」と併置されているため、春学期に「大学生の日本語 B」を履修した学部生に、新しく「総合日本語 6-8D」の特別外国人学生が加わった。「総合日本語 6-8D」の学生はレポートやレジユメの書き方を初めて学ぶため、他の学生が「大学生の日本語 B」で学んだ引用の仕方、参考文献の書き方、レジユメの書き方を一から説明する必要があった。

学期前半は継続の学生と新規の学生でかなり差があったが、学期後半になって継続の学生と同程度にアカデミックライティングのできる学生も出てきた。しかし、J6 レベルで新しく総合日本語を履修した者はレポートやレジユメの書き方に加え、日本語力も他の学生に比べると低いため、かなり苦労した。

継続の学部生と再履修の学部生は、専門のクラスやアルバイトなどの忙しさから、春学期に比べ、課題の提出が遅れる学生や提出状況の悪い学生が多かった。しかし、最後までしっかり取り組んだ学生たちは、レポートもレジユメも確実に上達し、大学生らしいレポート、レジユメが書けるようになった。ピア・エディティングの時間にも形式面だけでなく、内容・構成面に関して建設的なコメントをし合う様子が窺えた。

今後の課題としては 3 点挙げたい。第一に、秋から総合日本語として本クラスを履修した学生についてだ。今回 2 名が学期の半ばで、課題の難しさなどから履修を諦めてしまった。新学期のオリエンテーションで説明をしているが、秋学期は継続の学生が日本語の力もアカデミックな力も春学期より高いため、新規の学生は周りの学生と自分の力を比較してしまいがちだ。コースの紹介の際に実際に使用している教材を見せて毎週の課題の量を知らせる他、継続の学部生は J7 レベルの力があることを伝えるなどして、より具体的にコースのイメージが持てるように努めたい。第二に、総合日本語と併置のクラスでは、学生たちの足並みを合わせるため、学期前半は継続の学部生はアカデミックライティングに関して復習が多くなってしまった。今年度は間接引用を秋学期から導入・練習しているが、継続の学生にもう少し間接引用の練習をする時間を与えられるとよかった。第三に、このクラスは学部の学生にとって必修科目だが、課題の提出状況が悪く不合格になる者もいた。様子を見ていると、学習意欲がないというより、タイムマネジメントができていない印象であった。1 回目のレポートを出す段階でつまづいている学生もいたため、来年度はレポート提出までのスケジュールを見直したい。

[法学・異文化]

担当者名：a クラス：井上玲子、b クラス：金庭久美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：a クラス 18 名、b クラス 12 名

結果と課題

(a クラス)

履修者は、春学期に「大学生の日本語 B」を履修しているため、授業の進め方については学生もすでに把握しており、春学期に引き続き、スケジュールに沿ってレジюме及びレポート作成の課題を行った。

レジюмеに関しては、秋学期も短すぎるレジюмеや文を抽出したのみで適切な箇所を箇条書きにしてまとめられていないレジюмеがいくつか見られた。文献の内容を理解し、よくまとめられている学生の許可を得て、その学生のレジюмеをクラスで配布し、抽出した内容やレイアウトなど自分の作成したレジюмеと比較してもらった。クラスメートが作成したレジюмеは多くの学生にとって参考になったようで、次のレジюмеではわかりやすく見やすいレジюмеになっていた。

レポート作成の際には、個別のフィードバックの他に、レポートの構成を意識してもらうために、毎回レポートの書き方ワークシートを配布した。その結果、章立てや構成がしっかりと考えられていて、わかりやすいレポートの書き方になっていた。

今学期残念だった点は、課題の提出率が低かったことである。またレポートを提出した学生の中には引用しなかったり、指定された字数や参考文献の数に達していなかったりと春学期に比べて、課題への取り組みが低下していった。他の授業の課題などで忙しく、このクラスの課題に十分に組み込まなかったのも理由の 1 つのようであるが、春学期とほぼ同じスケジュールで進んでいたため、扱う資料の内容は春学期とは違うものの、単調に感じてしまった学生もいるようであった。1 年間のクラスにおいて、学生のモチベーションをどのように持続させていくか、今後の課題としたい。

大半の学生はこのクラスの目標を達成したように思うが、引用の仕方や参考文献の書き方、レポートの構成がまだ不十分な学生も何人かいる。今後学生がレジюмеやレポートを書く際に、このクラスで扱ったレジюмеやレポートの書き方をもう一度思い出し、学生自身で身につけていってもらいたいと思う。

(b クラス)

法学部の学生 10 名は春学期に「大学生の日本語 B」を履修し、レジюме及びレポートの書き方の指導を受けているため、秋学期は、既存の知識をもとに、レジюмеやレポート作成のさらなる向上を目指した。異文化の 2 名が新しく加わり、レジюме及びレポートの書き方について個別に指導を行った。秋学期からの参加であったが、最終的には春からいる学生と同レベルに達したと思われる。

資料 1 の共通教材を読む際は、グループごとに輪読を行い、内容を確認したが、読み誤りがあり、グループ内で意見が異なることがあった。話し合いや教師の助言をもとに読み直し、内容に対する理解を深めた。資料 2 のレジюмеを作成する際は、項目をうまく取り上げることができず、過不足なく情報を切り

出すことがまだまだ難しかったが、フィードバックの後はよりよいレジュメを作成することができた。レポートについては参考資料を引用して自分の意見を述べるという書き方が定着し、1回目のレポートでも上手な学生がいたが、2回目のレポートではクラスの半数以上が望ましい書き方をできるようになった。内容的にも大学生らしいものになったと思われる。

課題としては、レベルの低い学生に対する対応の仕方があげられる。そのような学生に対し、フィードバックの時間に個別に対応したが、授業内だけでは時間が足りなかった。今後も引き続き日本語学習を続けてほしい。また、資料の読み方の浅い学生がおり、レジュメ作成に問題がある。資料の読み誤りがないように、質問の仕方を変える、あらかじめレジュメの項目を一部与えるなどして、正しく読めるように、今後も授業の仕方を工夫していきたい。

[文学]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 27 名

結果と課題

レジュメ、レポート、Q&A と提出物の多いクラスであったが、出席していた学生は最後までよく頑張り、課題の作成を通して、目標とするレジュメやレポート作成の基本を身につけていった。特に学生同士の評価や話し合いに積極的に取り組む様子が観察され、その中からの学びは多かったと思う。今期は引用のルール、接続が課題となっていたが、引用については直接、間接ともにかなりできるようになった。ただ接続表現は接続詞の基本的な機能は理解できていても、文脈や構成の中で適切に使えていないことも多く、修正も多かった。

課題としては、上記の接続、またレジュメのまとめ方があると思う。レジュメは情報の取り出しだけでなく、それを階層化することがかなり難しそうだった。また、レポート作成では自分の意見の量を増やすことと、それを引用とうまく関連づけることにも課題があると感じた。再履修者はほとんど出席せず、また1年生も途中で来なくなった学生がいたことは残念だった。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 12 名

結果と課題

春学期から引き続き履修した学生が9名、秋学期からの学生が3名だったが、全体的にクラス活動に

積極的に参加し、秋学期からの学生も意欲的に課題に取り組んだ。その結果、レジュメの作成では必要な情報の抽出や視覚的な工夫に進歩が見られ、読み手にとっての見やすさを意識した資料が作れるようになった。また、レポートの作成では春学期に学んだことを活かし、全体の論理的な構成や引用、文の接続、資料解説などにおいて、より適切な組み立てや表現で書けるようになることを目指した。まだ引用や資料の出典提示に細かいミスはあるが、自己流で書くということはなくなり、自分の主張や帰結に向けて論理的なレポートを作成するスキルと日本語力は概ね身に付いたと思われる。

再履修者の1名は、ほとんど出席せず、残念な結果となった。また、合格はしたものの、出席や課題の期限提出の状況が芳しくない学生がおり、そのような学生への対応、指導が課題である。今後は、常にそれらに対する注意を喚起し、日本語力の定着と向上につなげていきたい。

[心理・福祉]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期11名

結果と課題

11名のうち9名が春学期も履修していたため、基本的なレジュメとレポートの書き方は概ね理解していた。秋学期からの履修者も学習意欲が高く、クラス全体で各課題に熱心に取り組んだ。レジュメにおいては、春学期には要約や番号・記号の使い方に改善の余地が多くあったが、秋学期には簡潔で視覚的にも整ったレジュメ作成を意識できるようになった。レポートにおいては、引用や接続表現と共に資料の解説表現の復習を中心に授業を進めた。まだ引用や資料解説に細かい誤りが見られるものの、全体の論理的な構成や、事実と引用、意見述べの表現の違いに留意し、より適切な記述ができるようになった。

クラス全体は大変真面目で、ほとんどの学生が良好な成績を修めた。しかし、長期欠席により課題を提出できなかった学生もおり、個々に様々な事情があると思われるが、毎回の出席を促し、日本語力の向上と単位の取得ができるようクラス運営を図っていきたい。

[経済・理学]

「大学生の日本語 D-8」は「J8 日本語論文作成（池袋）」と併置のため、「J8 日本語論文作成（池袋）」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 D-7」は「J7 文法」と併置のため、「J7 文法」部分を参照のこと。

「大学生の日本語 D-6」は「J6 文法」と併置のため、「J6 文法」部分を参照のこと。

[GLAP]

「大学生の日本語 D」は「Japanese Language and Japanese Culture B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture B」部分を参照のこと。

2. Placement Test 実施報告

【春学期】

2018 年度春学期 日本語プレースメントテスト受験者数

	正規学部生	特別外国人学生		正規大学院生	
	新入生	新入生	継続生	履修希望 新入生	在学学生
3月20日 正規学部生対象	90				
3月28日 特別外国人学生 正規院生対象		94	2	51 (※1)	0
4月4日 予め設定された 特別措置	19	3	0	5 (※2)	1
	109	97	2	56	1
全受験者数 265 名					

※1：3月28日正規院生51名のうち、ビジネスデザイン39名

※2：4月4日正規院生5名のうち、ビジネスデザイン4名

春学期プレースメントテスト結果

J0	32			
J1	5			
J1S	12			
J2	13			
J2S	7			
J3	13			
J3S	12			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	13	14	21	14

J5	50	27	46	50
J6	72	65	76	67
J7	49	67	60	60
J8	29(うち条件付き 14 名)			

<春学期総評>

春学期の受験者総数は 265 名で、2017 年度（279 名）と同規模であった。大学院生の受験者数は 40 名弱減少し、正規学部留学生の受験者数が 30 名弱増加した。3 月 20 日、28 日ともに「作文⇒Web⇒面接」と「面接⇒作文⇒Web」の 2 グループの流れを作り、面接室を増設して短時間に正確なレベル判定ができる態勢を組んだ。2 グループ編成でのテスト運営自体は、2017 年度の実績をもとに計画を進めることができたことで順調であった。

【秋学期】

2018 年度秋学期 日本語プレースメントテスト受験者数

	特別外国人学生		正規大学院生	
	新入生	継続生	新入生	在學生
9 月 5 日 特別外国人学生 継続正規院生対象	159	0	0	4
9 月 13 日 新規正規院生 特別措置	4	0	20	3
	163	0	20	7
全受験者数 190 名				

秋学期プレースメントテスト結果

J0	46
J1	8
J1S	15

J2	12			
J2S	9			
J3	11			
J3S	15			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	16	17	18	19
J5	31	18	28	25
J6	40	33	46	38
J7	47	41	40	43
J8	33(うち条件付き 18 名)			

<秋学期総評>

受験者総数は 190 名で、2017 年度（181 名）と同規模のテストとなった。毎学期 JO 判定者の微増が続いており、特別措置日などでのひらかたテスト対応が課題となった。確認された課題は 9 月の実務委員会、10 月のセンター運営会議で報告・共有を行うとともに改善方法が検討された。

プレイスメントテストの結果を受けての、実際の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。

	【2018 年度春学期】		【2018 年度秋学期】	
	国 籍	人 数	国 籍	人 数
特別外国人学生	アイルランド	3	アイルランド	1
	アメリカ	30	アメリカ	21
	イギリス	6	イギリス	7
	イタリア	2	インドネシア	4
	インドネシア	3	オーストラリア	6
	ウクライナ	1	オーストリア	2
	オーストラリア	10	オランダ	9
	オーストリア	1	カナダ	5
	オランダ	6	クロアチア	1
	カナダ	10	韓国	6
	ケニア	1	ケニア	1
	韓国	7	シンガポール	3
	シンガポール	6	スイス	4

	スウェーデン	4	スウェーデン	3
	スペイン	3	スペイン	13
	スリランカ	1	タイ	1
	スロバキア	1	チェコ	2
	スロベニア	1	中国(マカオ)	1
	タイ	2	中国	22
	中国	16	台湾	10
	台湾	9	中国(香港)	3
	中国(香港)	2	デンマーク	4
	ドイツ	9	ドイツ	13
	日本	4	日本	3
	ノルウェー	3	ノルウェー	2
	フィンランド	3	ハンガリー	1
	フランス	11	フィンランド	4
	ベトナム	3	フランス	18
	ベルギー	3	ブルガリア	1
	ポーランド	1	ブルネイ	1
	メキシコ	1	ベトナム	2
	ルクセンブルク	1	ベルギー	4
	ロシア	1	ポーランド	3
			マレーシア	1
			ミャンマー	1
			メキシコ	2
			モンゴル	1
			ロシア	2
特別外国人学生合計		165		188
正規留学生 (大学院)	アイスランド	1	アメリカ	1
	アメリカ	1	イタリア	1
	インドネシア	1	インドネシア	1
	エジプト	1	オーストラリア	1
	カナダ	1	カナダ	1
	韓国	2	韓国	4
	タイ	1	タイ	2

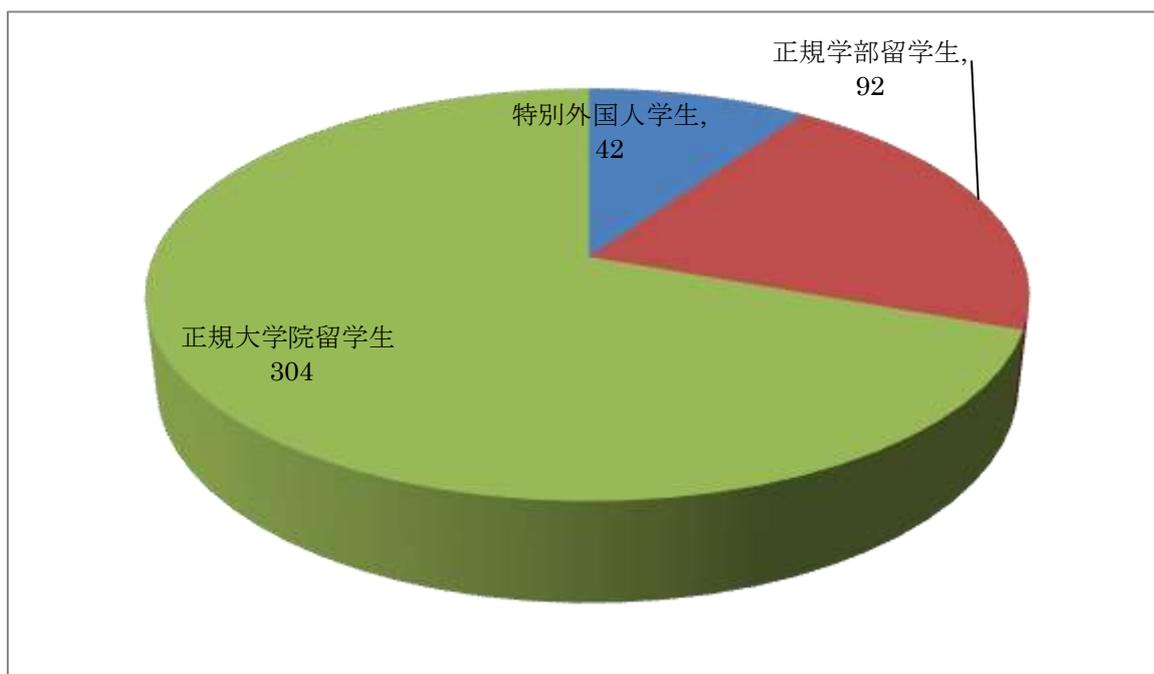
	台湾	6	台湾	6
	タンザニア	1	タンザニア	1
	チェコ	1	チェコ	1
	中国	46	中国	46
	中国(香港)	1	中国(香港)	1
	ドイツ	2	デンマーク	1
	フランス	2	ドイツ	1
	ベトナム	1	フランス	4
	ベナン	1	ベトナム	5
	ペルー	1	ベナン	2
	南アフリカ	1	ペルー	1
	ミャンマー	1	ミャンマー	1
	モロッコ	4	モロッコ	2
	ロシア	1		
正規留学生(大学院)合計		64		83
日本語履修者合計	2018年度春学期	229	2018年度秋学期	271

※春学期、秋学期とも中国国籍の正規大学院生のうち 35 名がビジネスデザイン 1 年生

3 2018年度 日本語相談室実施報告

2018年度 日本語相談室利用状況(2018年4月11日～2019年2月4日)

【相談者所属別利用件数】



2015年度に web 予約システムを導入して以来、日本語相談率の稼働率が飛躍的に伸びた。2018年度は利用件数が伸び、過去最高となった。利用者数は208人と、昨年の100人を大きく上回り、繰り返しの利用回数は平均で、正規学部生は2回程度、正規大学院生が3回程度だと思われ、学内利用が広がる一方で使い方は適正な範囲にあると見受けられる。

学生への周知は、昨年度と同じように、学生への直接の呼びかけに加えて、日本語相談室についての教員向けのちらしを作成するとともに、国際センターサポーター委員会で各部局の先生がたに日本語相談室の広報を行った。

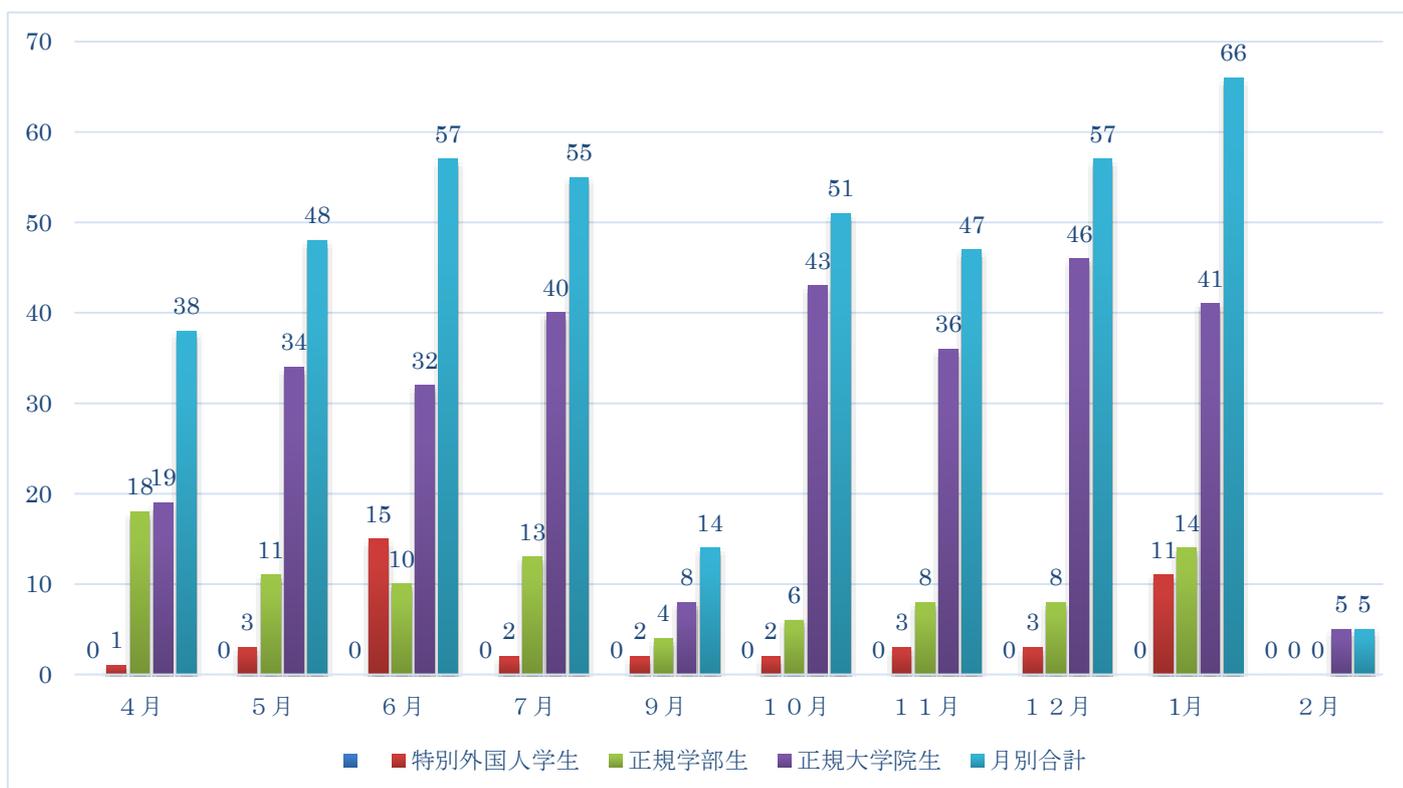
相談者の種別でみると、これまでと同じで6月以外は、正規大学院生、正規学部生の順で利用が多い。

特外生については、春学期に日本語教育センター主催の留学生のための日本語スピーチコンテストがあることにより、相談件数が多い傾向があるが、2018年度も同じ傾向が見られた。特外生は半年から1年在籍する留学生たちである。スピーチコンテストなど定例のセンター企画を一つの機会ととらえて、授業外の日本語学習サポートを周知し、また利用を広げていくようにしていきたい。

正規学部留学生の相談件数は、2017年度と同じく、学期末に利用件数が増えているのが特徴的である。

【月別推移】

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
特別外国人学生	1	3	15	2	2	2	3	3	11	0	42
正規学部生	18	11	10	13	4	6	8	8	14	0	92
正規大学院生	19	34	32	40	8	43	36	46	41	5	304
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月別合計	38	48	57	55	14	51	47	57	66	5	438



学部・研究科別の利用状況を見ると、学部生は社会学部の学生が比較的繰り返し利用している様子が見え、大学院生はどの研究科も利用件数が多いが、2018年度は観光学研究科、ビジネスデザイン研究科、経営学研究科の学生が繰り返し利用した様子が見える。

【所属別利用件数】

		実質 利用 人数	合計 利用 回数	相談キャンパス	
				池袋	新座
特別外国人学生		30	42	41	1
正規 学部生	文学部	5	8	8	0
	経済学部	3	3	3	0
	異文化コミュニケーション学部	5	9	9	0
	社会学部	13	41	34	7
	経営学部	3	4	4	0
	観光学部	7	11	2	9
	法学部	5	7	7	0
	現代心理学部	7	9	3	6
正規 大学院生	文学研究科	25	47	47	0
	観光学研究科	18	51	16	35
	ビジネスデザイン研究科	48	126	108	18
	異文化コミュニケーション	3	4	4	0
	21世紀社会デザイン研究科	9	12	12	0
	経営学研究科研究科	8	26	26	0
	社会学研究科	1	1	1	0
	経済学研究科	4	8	8	0
	現代心理学研究科	9	17	2	15
	法学研究科	5	12	10	2
特別外国人学生	計	30	42	41	1
正規学部生	計	48	92	70	22
正規大学院生	計	130	304	234	70
合計		208	438	335	93

池袋、新座の各キャンパスに所属する学生の利用状況を見ると、新座キャンパスの利用が2017年度は69件であったのが、2018年度は93件であった。ひきつづき新座キャンパスにおいても日本語相談室利用を促したい。

【曜日・時限別 利用件数および相談内容の内訳】

日本語相談室は、基本的に予約制で1コマに2件相談を受け付けられる設計となっており、試験期間を入れて各学期15週稼働している。下表は学期、曜日、時限の日本語相談室の稼働状況がわかるものであるが、2018年度についてはばらつきなく利用されている様子がわかるものである。2018年度は日本語相談室の予約が取りにくくなっているという声を耳にしたが、春学期のテレプレゼンスの時間帯を除き、どの時間帯も毎回1～2件の相談を受け付けている状況がわかる。2017年度は秋学期の利用数が春学期よりも比較的少なかった新座キャンパスでの利用件数は、2018年度は両学期とも同程度利用された。

【曜日・時限別 利用件数】

2018年度春学期

(池袋キャンパス)

	月	火	水	木	金
2限	21	25	24	21	
3限	16		18	16	19
4限					

(新座キャンパス)

火	水	金
		6
15		
11	6	

* 新座キャンパスでの利用38件のうち、12件はテレプレゼンス、26件は対面で利用。

2018年度秋学期

(池袋キャンパス)

	月	火	水	木	金
2限		22	27		25
3限				25	21
4限	24		23		18

(新座キャンパス)

月	火	水
14	14	16
	11	

* 新座キャンパスでの利用55件のうち、30件はテレプレゼンス、25件は対面で利用。

【相談内容内訳】

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文(研究計画書、中間発表を含む)	164
就職活動(エントリーシート等)	96
レポート(授業、ゼミ等)	63
発表指導(授業、ゼミ等)	30
学習方法指導(練習も含む)	29
スピーチコンテスト	24
奨学金関係(申請書類、面接練習等)	22
学会発表・予稿集・投稿論文	4
その他	6
合計	438

日本語相談室担当者コメント

全体の利用件数は、昨年度の 407 件から 438 件へと、31 件増加した。特に目立って増えたのは、116 件から 164 件に増えた「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」と、50 件から 96 件に増えた「就職活動（エントリーシート等）」である。一方で「発表指導（授業、ゼミ等）」は 59 件から 30 件に、「学会発表・予稿集・投稿論文」は 13 件から 4 件に、減少した。以下、池袋キャンパス、新座キャンパス、テレプレゼンスの利用について、順に見ていく。

<池袋>

2018 年度の利用者数は 347 件で、2017 年度と同数である。異なり利用者数は 83 名で、2017 年度の 79 名と同程度である。

相談内容で最も多かったのは、「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」で 131 件、次いで、「就職活動（エントリーシート等）」69 件、「レポート（授業・ゼミ等）」56 件であった。「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」の相談に関しては、例年同様、同一学生による定期的な相談も多かったが、論文の提出が近い時期は、新規の利用者も増加した。利用者によると、指導教授や利用経験者からの勧めもあったとのことで、日本語相談室の認知度が高くなっていることが窺える。しかしながら、新規の利用者には、一度の相談で指導可能な資料の分量を知らず、数十ページの論文を事前提出する学生もいた。そのため、利用方法や事前提出の日程、分量について引き続き周知する必要がある。

<新座>

今年度の新座キャンパスの日本語相談室利用は、50 件だった。過去最高の件数だった 2016 年度の 53 件よりは少ないものの、昨年度の 39 件は大きく上回る結果となった。利用者数（異なり数）は、2016 年度と 2017 年度が 12 名であり、今年度が 13 名だった。「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」が相談内容として最も多かったのはこれまでと変わらないが、今年度は「発表指導（授業、ゼミ等）」も 8 件あり、増加傾向が見られた。特に学位論文の締め切りが迫る時期に、利用数が急増した。2016 年度から課題に挙げられてきた事前資料の提出については、今年度定期的に提出があったことから、学生の認知も進んでいるのではないかと考えられる。今後も様子を見ながら、検討していきたい。

<テレプレゼンス>

2018 年度は 41 件で、全体の利用件数は 2017 年度 24 件から大幅に増加し、過去最多の 2016 年度 45 件に次ぐ利用の多さとなった。テレプレゼンスは新座キャンパスの学生の予約が入っていない場合、池袋キャンパスの学生が当日予約で対面面談を受けることができるようになっており、2016 年度は 45 件のうち 18 件が池袋キャンパスでの対面面談であったが、2018 年度は池袋での対面面談は 1 件のみであるため、新座キャンパスでの利用が増加したことがわかる。異なり利用者数は 10 名で、2016 年度 12 名、

2017年度 9名と同程度である。

相談内容は就職活動の相談が18件、卒業・修士・博士論文の相談が17件と多かった。また、42件のうち春学期の利用は10件であったが、秋学期は32件となった。これは秋学期に修士論文とエントリーシートの相談で10回以上来室した学生が1名ずついたことが影響している。

春学期は利用件数が少ないこともあり、機器の利用に慣れておらず手間取ることもあったが、秋学期はほぼ毎週予約が入っていたため、機器トラブルへの対応も落ち着いてスムーズにできた。機器の利用で起きやすい問題やその対応もわかってきたので、来年度の新たな担当教員にも引き継ぎ、スムーズに運営できるようにしたい。

【2011年度—2018年度 利用件数推移】

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67	42
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70	92
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268	304
その他	0	0	0	1	8	0	2	0
合計	144	153	181	237	424	428	407	438
増減	100	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6	304.2

日本語教育センターはこれまで学内での周知活動を定期的に行いながら、ウェブ予約システムを導入し利便性を高め、日本語相談室の機能を活性化させることをめざしてきた。実務委員会や日本語教育センター運営会議では毎月報告と意見交換が行われてきており、その中でこれまでは、利用件数の伸びや著しい繰り返し利用の傾向などが課題として挙げられてきたが、2018年度はこれらの課題が一通り克服され、予約が取りにくくなっていることが確認されてきた。日本語相談室の在り方について、これまでとは違う角度で検討していく段階に入った。

4. 2018 年度 立教漢字検定実施報告

2018 年度 立教漢字検定データ

2018年度	試験日	申込締切日	申 込		受 験		合 格	
第1回	5月30(水)	5月1日(火)	特別外国人学生	37名	特別外国人学生	30名	特別外国人学生	24名
			上級	0	上級	0	上級	0
			中級	19	中級	15	中級	13
			初級	18	初級	15	初級	11
			正規学部留学生	2名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			上級	2	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院留学生	3名	正規大学院留学生	2名	正規大学院留学生	2名
			上級	1	上級	1	上級	1
中級	2	中級	1	中級	1			
初級	0	初級	0	初級	0			
			第1回申込合計	42名	第1回受験合計	32名	第1回合格合計	26名
第2回	7月11日(水)	6月13日(水)	特別外国人学生	31名	特別外国人学生	10名	特別外国人学生	6名
			上級	1	上級	0	上級	0
			中級	17	中級	6	中級	4
			初級	13	初級	4	初級	2
			正規学部留学生	1名	正規学部留学生	1名	正規学部留学生	1名
			上級	1	上級	1	上級	1
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院留学生	2名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
中級	2	中級	0	中級	0			
初級	0	初級	0	初級	0			
			第2回申込合計	34名	第2回受験合計	11名	第2回合格合計	7名
第3回	11月21日(水)	10月17日(水)	特別外国人学生	41名	特別外国人学生	34名	特別外国人学生	20名
			上級	2	上級	2	上級	2
			中級	26	中級	21	中級	13
			初級	13	初級	11	初級	5
			正規学部留学生	1名	正規学部留学生	1名	正規学部留学生	1名
			上級	1	上級	1	上級	1
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
中級	0	中級	0	中級	0			
初級	0	初級	0	初級	0			
			第3回申込合計	42名	第3回受験合計	35名	第3回合格合計	21名
第4回	1月16日(水)	12月12日(水)	特別外国人学生	41名	特別外国人学生	22名	特別外国人学生	14名
			上級	1	上級	0	上級	0
			中級	25	中級	17	中級	11
			初級	15	初級	5	初級	3
			正規学部留学生	2名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名
			上級	2	上級	0	上級	0
			中級	0	中級	0	中級	0
			初級	0	初級	0	初級	0
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名
			上級	0	上級	0	上級	0
中級	0	中級	0	中級	0			
初級	0	初級	0	初級	0			
			第4回申込合計	43名	第4回受験合計	22名	第4回合格合計	14名

2018年度も例年通り4回実施した。2017年度に新座キャンパスで各学期1コマずつ、漢字検定対策のための漢字クラスを新設し、2017年度は扱う範囲を初級、2018年度は初級と中級と教材開発を進めている。クラス内で扱う範囲を広げた結果、実力以上のレベルを申し込み、途中であきらめてしまう学生が出てしまい、2018年度は、申込者数に対する受験者の割合、受験者数に対する合格者数の割合が小さくなる傾向が昨年度よりも強まった感がある。この課題についてはすでにFD委員会で確認、意見交換がなされており2019年度は授業内での指導の改善を図る計画でいる。2019年度は初級、中級に加えて、上級レベルの教材開発を進め、扱う範囲を広げる計画であることから、注意深く経過を見ていきたいと考えている。

5. 2018年度 日本語自主学習用図書貸し出し実施報告

日本語教育センターでは、1回3冊、2週間までの図書の貸し出しを行っている。2018年度の貸し出し状況は以下の通りである。

利用件数は特別外国人学生の利用が利用者数、貸出冊数ともに約3倍となった。一方で正規学生の利用は減った。貸し出し教材の内容は、日本語能力試験対策が多く、次いで文法・句型、漢字の教材の利用が見られた。

【所属別記録】

2013年度より新座キャンパスに設置（28冊）

	利用者数	貸出冊数
特別外国人学生	19	91
正規学生	3	11
（新座）	0	0

【貸し出し図書一覧】

	貸出書名	貸出回数
特別外国人学生	BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 VOL.1 第3版	3
	にほんご500問 初級	2
	みんなの日本語 初級 翻訳・文法解説英語版 English[1]	1
	みんなの日本語 初級 本冊	2

	わかって使える日本語 中級レベル	1
	にほんご 敬語トレーニング (CD 付)	1
	カタカナ語彙完全マスター 日本語能力試験 1・2 級レベル	3
	日本語能力試験文法問題対策 完全マスター 2 級	5
	新試験対応 合格できる日本語能力試験 N1 CD2 枚付き	1
	実力アップ! 日本語能力試験 N5 読む(文字・語彙・文法)	1
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 文法	5
	日本語能力試験対策 N3 日本語総まとめ 語彙	4
	にほんご作文の方法	1
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 文法	2
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 漢字	4
	日本語能力試験対策 N2 日本語総まとめ 語彙	6
	日本語能力試験対策 N1 日本語総まとめ 語彙	5
	ひとりでできる初級日本語文法の復習 英語版	4
	文法が弱いあなたへ	1
	日本語能力試験対策 N2 文法 模擬テスト	2
	日本語能力試験対策 N1 文法 総まとめ	4
	日本語能力試験対策 N1 漢字 語彙	3
	日本語能力試験対策 N2 文法 総まとめ	2
	日本語能力試験対策 N2 漢字 語彙	3
	日本語能力試験対策 N3 文法 語彙 漢字	2
	日本語能力試験スーパー模試 N1	1
	日本語能力試験スーパー模試 N2	2
	日本語能力試験 模試と対策 N2	4
	パターン別徹底ドリル日本語能力試験 N2	4
	みんなの日本語初級 I	1
	げんき I	6
	げんき II	5
正規留学生	絵でわかるぎおんごぎたいご	1
	絵でわかる日本語使い分け辞典	2
	大学で学ぶための日本語ライティング 単文からレポート作成まで	1
	BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 VOL.2 第 4 版	2

	みんなの日本語 初級I本冊	1
	日本語能力試験対策 N2 文法 総まとめ	1
	日本語能力試験対策 N2 漢字 語彙	1
	BASIC KANJI WORKBOOK 使って、身につく! 漢字×語彙 2	2

6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

2018年6月30日に『立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ー』を開催し、当日は16名の留学生が登壇した。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ<https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/6th.default.aspx>を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第7回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ースピーチ文集』を刊行した。

7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

2019年1月26日に、日本語教育センター主催で「日本語教育センターシンポジウム 2018」を開催した。留学生の受け入れに係る企画としてこれまで特別外国人学生、短期日本語プログラム生などを取り上げてきたことから、2018年度は正規学部留学生を中心テーマに据えることとし、タイトルを「正規学部留学生受け入れの新時代～多様な留学生徒の学びは大学をどう変えるか～」とした。第1部は池田伸子氏（国際化推進機構長）による本学の新たな留学生受け入れの方向性についての講演の後、郭侃亮氏（中等日本語課程設置校工作研究会秘書長・上海市甘泉外国語中学教員）、コスチコワ・アンナ氏（モスクワ市1471番学校教頭）、ゼニ・クルニアワン氏（ジョゴロト国立高校教員・インドネシア全国高校日本語教師会会長）、タン・テイ・ミビン氏（ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 日本語文化学部 講師）による各地域における日本語教育事情および日本留学の動向と課題についての報告があり、つづいて第2部では、菅沼隆氏（経済学部長）、堀中春菜氏（入学センター職員）からのコメントを受け、フロアを含めての全体討議を行った。

実施の詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/symposium/default.aspx>

の報告の通りである。当日は学内の教職員と学生のほかに、学外の方々、約 60 名の参加があった。

当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える 8』として刊行した。

8. 日本語教育センターニュースレター発行報告

昨年度にひきつづき「日本語教育センターニュースレター」を発行した。図書館に新しく設けられた立教ラーニングスタイルの語学学習コーナーや国際センター主催のグローバルラウンジにおけるワールド・カフェ、日本語教育センターHP で扱っている「日本・東京探検」について特集を組んだ。また、学内教職員の協力をえて、留学生へのメッセージを積極的に発信した。詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/>

を参照されたい。

9. 短期日本語プログラム報告 (A)

日本語教育センターの新事業として、国際化推進機構との共同開催による短期日本語プログラムを本格実施した。今年度よりシドニー大学の団体受け入れを開始し、実施規模が拡大した。

【春学期】

1 実施の概要

1 実施の概要

1) 開催期間

2018年7月3日(火)～7月23日(月) *入寮：7月2日(月)/退寮・帰国：7月24日(火)

2) 開催場所

新座キャンパス (宿舎：太刀川記念交流会館・デイリーホテル新座店)

3) コースデザイン

①単位数：4 単位（4,200 分）

* 単位数内訳：日本語科目 2 単位(2,700 分)60 分×45 回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2 単位（1,500 分）60 分×25 回

4) 開講レベル:3 レベル(初心者 Beginners Class・初級 Elementary Class・初中級 Pre-Intermediate Class)

2 結果

1) 参加学生 38 名

協定校の区分は 2018 年 7 月現在

	大学間協定校	学部間協定校	教員による紹介
授業料免除枠での参加	セントトーマス大学 1 名 セントメリーズ大学 1 名 ランドルフ・メーコン大学 1 名 延世大学 1 名 ギリシャ・アメリカン大学 1 名	ケンブリッジ大学エマニュエルカレッジ 1 名	
私費での参加	バーモント大学 1 名 ニューサウスウェールズ大学 1 名 ニューヨーク州立大学ジェネセオ校 1 名 マードック大学 1 名 RMIT 大学 6 名		
団体枠での参加	シドニー大学 22 名		

2) 学内の協力

学部		文学部、観光学部、異文化コミュニケーション学部
学 生	部活・サークル	茶道研究会・書道研究会・テニス部
	クラス	文学部 2 名、法学部 1 名、観光学部 3 名、現代心理学部 2 名、異文化コミュニケーション学部 10 名 計 18 名
	ボランティア	
	学生サポーター (住込み・入退寮サポート・歓送迎会サポートなど)	現代心理学研究科 1 名、 経済学部 1 名、理学部 1 名、社会学部 1 名、法学部 2 名、観光学部 3 名、コミュニティ福祉学部 2 名、経営学部 2 名、現代心理学部 1 名、異文化コミュニケーション学部 3 名、 計 17 名
事務		新座キャンパス事務部、ボランティアセンター、国際センター、新座メデ

	ィアセンター、新座 8 号館講師控室、新座図書館運営課、新座保健室、教務事務センター、人事課、総務課、財務部、グローバルラウンジ
--	--

3) 学外の協力

新座市役所（ホームビジット）

3 成果

- ・ 本学への留学パターンの多様化の促進
- ・ 協定校とのインバランスの解消
- ・ 本学職員のホームビジット協力(3 家庭)
- ・ 新座キャンパス国際センター主催のグローバルラウンジ企画との連携

5 授業

日本語 A クラス（入門）

授業担当者名：三浦綾乃、山内薫、高嶋幸太、長谷川孝子

履修者数：22 名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—入門 A1』（国際交流基金）、独自教材

日本語 B クラス（初級）

授業担当者名：小森由里、長谷川孝子、藤田恵

履修者数：6 名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—初級 2 A2』（国際交流基金）、独自教材

日本語 C クラス（初中級）

授業担当者名：金庭久美子、浅野有里、神元愛美子

履修者数：10 名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—初中級 A2/B1』（国際交流基金）、独自教材

今期の短期プログラムは、38 名の参加があり、日本語クラスは 3 クラス体制で進めた。

A クラスは、日本語学習歴のない学生対象のクラスとし、22 名となった。『まるごと』テキストを使用して日常会話を学習し、独自教材を用いてひらがなの導入を行った。さらに、学生ボランティアとの活動も取り入れた。前年度より、A クラスの文字学習は、ひらがな学習のみとし、カタカナは希望者のみとすることにし、かなクイズの形式も、ディクテーションから、50 音図表の穴埋めに変更した。これにより、文字学習の負担が軽減され、学生たちの日本語学習の意欲がプログラム中途切れることなく、進めるこ

とができた。『まるごと』テキストでは、会話と聴解練習を中心に行い、徐々に日本語でのやりとりが増える姿が見られた。しかし、ローマ字のルビのない課に入ってから、テキストの読みに困難が見られたため、指導が計画通りに進まないことがあった。次回は、『まるごと』で扱う課を調整したい。

Bクラスは、6名の小さいクラスとなったが、クラス内にレベル差があったため、個別対応が必要な場面が多かった。教員によっては、テキストのレベルと学生のレベルが一致していないと感じられる場面があり、当初の計画よりも、ゆっくりとテキストを進めるように進度を調整した。日本語既習のクラスでは、今後もレベル差への対応が必要となることが予想されることから、担当者間で学生の様子を共有し、柔軟な対応をしていきたい。プログラムの最後に実施したプレゼンテーションでは、日本語での発表を初めて経験させることができ、学生自身も達成感を得られているようであった。今後の課題としては、発表内容が発表者だけでなく、クラスメートにも理解できるように、PPTに意味の説明を入れるなどの指示をし、よりよい発表の活動としたい。

Cクラスは、新しいテキストを用いた新設のレベルであり、10名のクラスとなった。クラス内にレベル差はあったものの、全員が熱心に取り組み、順調にクラス運営をすることができた。新しく採用したテキストは、他のレベルに比べて、学習項目が絞られており、さらに四技能がバランスよくカバーされていた。そのため、学生たちのレベルに合わせて進めることができ、非常に扱いやすかった。本クラスにおいても、最終発表に課題が残った。クラスの中では日本語を使う部分の準備を進め、教師の指導を受けてほしかったが、計画通りに進められず、教師の指導があまり受けられないまま発表当日を迎えてしまう学生がいた。Cクラスらしい日本語発表となるように、適切な指導が受けられるよう進め方を検討したい。

日本社会文化講義 1 クラス

授業担当者名：三浦綾乃、神元愛美子、高嶋幸太、小森由里

履修者数：19名

使用教材：独自教材

日本社会文化講義 2 クラス

授業担当者名：小森由里、長谷川孝子、山内薫、浅野有里

履修者数：19名

使用教材：独自教材

専門教員による日本の社会・文化に関する講義とそれに関連させたフィールドトリップを軸に、事前学習と事後学習を配置した。①マーク・カプリオ先生（異文化コミュニケーション学部）による「From Edo to Meiji, Japanese Modernization」と題する講義と都内の史跡の見学、②水谷隆之先生（文学部）による「浅草・向島と日本古典文学」と題する講義と講義にまつわる名所見学、③豊田由貴夫先生（観光学部）による「Tokyo Disney Resort and Japanese Culture」と題する講義と江戸東京博物館が、異文化コミュニケ

ーション学部の翻訳通訳養成プログラム RiColas の協力を得て実施された。

本プログラムの規模拡大により、フィールドトリップの際の移動に課題が認められた。

【秋学期】

1 実施の概要

1) 開催期間

2019年1月9日(水)～1月24日(木) *入寮：1月8日(火)/退寮・帰国：1月25日(金)

2) 開催場所

新座キャンパス (宿舎：太刀川記念交流会館・デイリーホテル志木店・デイリーホテル新座店)

3) コースデザイン

①単位数：4単位 (4,200分)

*単位数内訳：日本語科目 2単位(2,700分)60分×45回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2単位 (1,500分) 60分×25回

4) 開講クラス：4クラス(初心者 Beginners Class×2クラス・初級 Elementary Class・初中級 Pre-Intermediate Class)

2 結果

1) 参加学生 46名

協定校の区分は2019年1月現在

	大学間協定校	学部間協定校	教員による紹介
授業料免除枠での参加	ヴァージニアウエスレヤン大学 2名 ランドルフ・メーコン大学 2名		
私費での参加	RMIT 大学 15名 ダラス大学 1名 華東師範大学 1名		
団体枠での参加	シドニー大学 25名		

2) 学内の協力

学部	法学部、コミュニティ福祉学部、異文化コミュニケーション学部
部活・サークル	テニス部
クラス	文学部 2名、観光学部 7名、コミュニティ福祉学部 3名、現代心理学

学	ボランティア	部 2名、異文化コミュニケーション学部 7名	計 21名
生	学生サポーター (住込み・入寮・歓送迎 会サポートなど)	文学部 6名、社会学部 3名、法学部 1名、観光学部 4名、コミュニ ティ福祉学部 5名、異文化コミュニケーション学部 1名	計 20名
事務		新座キャンパス事務部、ボランティアセンター、国際センター、新座メデ ィアセンター、新座 8 号館講師控室、新座図書館運営課、新座保健室、教 務事務センター、人事課、総務課、財務部、グローバルラウンジ	

3) 学外の協力

新座市役所 (ホームビジット)

3 成果

- ・ 本学への留学パターンの多様化の促進
- ・ 協定校とのインバランスの解消
- ・ 本学職員のホームビジット協力(2 家庭)
- ・ 新座市 (国際事業活動) との地域連携
- ・ 本学学生との国際交流の促進
- ・ 新座キャンパス国際センター主催のグローバルラウンジ企画との連携

4 今後の課題

- ・ フィールドトリップの事前打ち合わせ強化
- ・ 受け入れ人数増加に伴う宿舎・移動等の対応
- ・ 年 3 回実施にむけた受け入れ態勢の強化

5 授業

日本語 A クラス (入門)

授業担当者名：武田聡子、布村猛、高嶋幸太、東平福美

履修者数：16 名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—入門 A1』(国際交流基金)、独自教材

日本語 B クラス (入門)

授業担当者名：藤田恵、守屋久美子、長谷川孝子、猪口綾奈

履修者数：16 名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—入門 A1』(国際交流基金)、独自教材

日本語 C クラス (初級)

授業担当者名：山内薫、長谷川孝子、泉大輔、斉藤紀子

履修者数：10名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—初級 1 A2』（国際交流基金）、独自教材

日本語 D クラス (初中級)

授業担当者名：浅野有里、金庭久美子、神元愛美子

履修者数：4名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—初中級 A2/B1』（国際交流基金）、独自教材

今期の短期プログラムは、46名の参加者があり、日本語クラスは4クラス体制で進めた。

A、Bクラスは、日本語学習歴のない学生と、ひらがなの読み書きが少しできる学生向けのクラスとした。Aクラスでは全員ひらがな学習を行い、Bクラスではひらがな学習と並行して、希望者にはカタカナ学習の時間もとるようにした。クイズの形式は、前回と同じようにし、全員文字学習に意欲的に取り組んでいた。『まるごと』の会話練習では、前回の反省から、ローマ字でルビ振りがされている課のみを扱うようにし、その結果、学習歴のない学生も文字の困難さを感じることなく進めることができた。また、語彙リストを配付し、会話で用いる語彙の導入も先行して行うように心がけた。これまで課題に挙げた点を改善したことにより、非常にスムーズにクラス運営ができたが、学習歴が少しある学生には、教師から見て、もう少しチャレンジさせたいと思う場面もあった。既習歴があっても一つ上のレベルには満たない学生が今後も参加する可能性は非常に高い。したがって、入門テキストを用いながら既習の学生にも学びの多いプログラムとなるように授業活動を改善していきたい。

Cクラスは、10名となり、テキストはこれまでよりも一つ下のレベルを使用することとした。新しく採用したテキストであったが、今期のCクラスの学生には適切なレベルであった。本クラスは、既習項目が会話で活かさないという点に課題のある学生が多く、授業では会話練習を多く取り入れるように心がけた。学生も会話練習を熱心に行い、授業時間だけでなく、休み時間や移動時間などにも積極的に日本語で会話する姿勢が見られた。最終日の成果発表は全員が日本語で発表することとし、ディスカッションを英語で行うようにした。日本語での発表はこのレベルの学生にとっては非常にチャレンジングであったが、全員が目標を達成することができ、学生自身も達成感を得られていた。日本語既習レベルのクラスでは、今後も日本語での発表を課すようにしたい。

Dクラスは、4名と小さいクラスとなった。本クラスには、日本語能力試験 N1 合格の学生もいたが、語彙と文法の知識があっても会話力が伴っていないという課題があったため、これまでと同じ『まるごと』初中級レベルのテキストを用いることにした。学生4名は基礎語彙や活用が定着しており、テキストが易しめにとらえられることもあったが、まとまりのある文章の読み書きの経験が少なかったことか

ら、適切なレベルであったと思う。最終日の成果発表では、発表とディスカッションを日本語で行うことを課し、発表時間はほかのレベルよりも長めに設定した。その結果、Dクラスらしい発表とディスカッションを行うことができ、学生にとって実りの多い活動となったようである。一番上のレベルのクラスは、今後もレベル差の対応が必要になると思われる。テキスト+αの活動をどのように進めていくかを今後の課題としたい。

日本社会文化講義

授業担当者名：武田聡子、布村猛、高嶋幸太、東平福美

履修者数：23名

使用教材：独自教材

授業担当者名：山内薫、守屋久美子、泉大輔、神元愛美子

履修者数：23名

使用教材：独自教材

専門教員による日本の社会・文化に関する講義とそれに関連させたフィールドトリップを軸に、事前学習と事後学習を配置した。①孫斉庸先生（法学部）による「Media and Politics in Japan」と題する講義と国会議事堂と迎賓館の見学、②ライトナー・カトリン先生（コミュニティ福祉学部）による「Sport in Japan」と題する講義と弓道、和太鼓体験、③川崎晶子先生（異文化コミュニケーション学部）による「Japanese Language in Daily Life」と題する講義と新座キャンパスでの言語調査が、異文化コミュニケーション学部の翻訳通訳養成プログラム RiColas の協力を得て実施された。

国会議事堂と迎賓館の見学で、初めてバスによる移動を導入した。

評価アンケートの内容と結果は以下のとおりである。

【参加者による評価アンケート】

【学習面】

- 1 プログラムを通して日本語能力が向上しましたか（5段階）。

Do you think you improved in Japanese language skill through this program?

- 2 日本語の授業や文化社会講義に、積極的に参加しましたか（5段階）。

Did you actively take part in the Japanese language class and lectures on Japanese culture and society?

- 3 日本語の授業で使用した教材は、学習意欲を高めるものでしたか（5段階）。

Did the learning materials of the Japanese class facilitate your learning motivation?

- 4 日本語の授業のスピードは適切でしたか（1が早い、5が遅い）。

Was the speed of the Japanese class appropriate?

- 5 日本語の授業の中で、日本語で話す機会が十分にありましたか (5段階)。

Did you have enough time to speak in Japanese during each class?

- 6 日本語のクラスの学生数は適当でしたか (5段階)。

Was the number of students per Japanese class appropriate?

- 7 教員の説明や指示は明確でしたか (5段階)。

Did your teachers give clear instructions and explanations in class?

- 8 教員は授業の準備を周到に行っていましたか (5段階)。

Were your teachers sufficiently prepared for every lesson?

- 9 日本語の授業に、立教大学の学生が参加して、よかったですか (5段階)。

Was it good that local university students took part in the Japanese class?

- 10 文化社会講義を通して、日本の文化や社会に対する理解が深まりましたか (5段階)。

Did you deepen your understanding of Japanese culture and society through the lectures?

- 11 文化社会講義を通して、日本の社会や文化に対する興味・関心が強まりましたか (5段階)。

Did your interest in Japanese culture and society increase through the lectures?

- 12 フィールドトリップを通して、日本の文化や社会に対する理解が深まりましたか (5段階)。

Did you deepen your understanding of Japanese culture and society through the field trip?

- 13 あなたは立教の短期日本語プログラムに満足していますか (5段階)。

Were you satisfied with Rikkyo Short-Term Intensive Japanese Program?

自由記述

- 14 このプログラムを通して、日本語で何ができるようになりましたか。

Please tell us what you've got to be able to do in Japanese language through the program.

- 15 (質問9に4・5と答えたひとに) どのところがよかったですか教えてください。

If you chose 4 or 5 in the previous question, please tell us why it was good.

- 16 日本文化社会の中で特に興味を持ったトピックはありましたか。もしあれば、そのトピックと理由を教えてください。

In the lecture on Japanese culture and society, is there any topic that you found interesting? If yes, please specify the topic and the reason.

- 17 (質問12に対して) その理由を教えてください。

Please specify the reason to the previous question (Question 12).

- 18 プログラムについて、よかったところを教えてください。

What are the things that you're satisfied with the program?

- 19 プログラムで、改善すべきだと思う点があれば、記入してください。

Do you have any suggestion for the improvement of the program? If you have any, please write.

【生活面】

20 来日前までに立教大学から十分な情報が得られましたか (5段階)。

Did you get enough information from Rikkyo before arriving in Japan?

21 立教の学生と十分に交流はできましたか (5段階)。

Were you able to interact with local students as much as you wanted to?

22 オプショナルプログラムに参加した場合は、楽しめましたか。

If you participated in the optional programs, did you enjoy the program?

23 食事には満足しましたか (5段階)。

Were you happy with the board (meal)?

24 太刀川記念交流会館での生活はどうでしたか (5段階)。

How did you think of living in Tachikawa International Hall?

25 住みこみアルバイトから十分なサポートを得ることができましたか (5段階)。

Were you able to get the support you needed from the student supporters at the accommodation?

26 参加費はどうでしたか (1が安い、2が適切、3が高い)。

How was the tuition fee?

27 日本に留学する前に、立教大学について知っていましたか (1がいいえ、2がはい)。

Did you know about Rikkyo University before study abroad?

自由記述

28 来日前に、立教大学から知りたかった情報はありますか。

Is there information you wish you had got from Rikkyo before arriving in Japan?

29 出願の手続きについて、意見や提案があれば、記入してください。

If you have any opinion or suggestion regarding our application and admission procedure, please write.

30 オリエンテーションのときに知りたかった情報はありますか。もし、オリエンテーションについて意見や提案があれば、記入してください。

Is there any other information you wish you had got during the orientation? If you have any opinion or suggestion regarding the orientation, please write.

31 ホームビジットプログラムに参加した学生は、参加した理由をおしえてください。

If you participated in the home-visit program, please tell us the reason you participated in the program.

32 ホームビジットプログラムに参加しなかった学生は、参加しなかった理由を教えてください。

If you didn't participate in the home-visit program, please tell us the reason you did not participate in the home-visit program.

33 オプショナルプログラムについてコメントがあれば、記入してください。

If you have any comments on the optional program, please write.

34 プログラムの間に、こんなイベントがあればよかったと思うものはありますか。もしあれば、記入してください。

Is there any event you wish you had had during the program? If yes, please write.

35 (質問 23 に対して) その理由を教えてください。

Please specify the reason to the previous question.

36 日本での生活で、不便だったことがあれば、記入してください。

If you had any inconveniences or troubles in your daily life, please write.

37 日本での生活で、便利だと思ったことやよかったと思うことがあれば、記入してください。

If there is anything you found convenient or good in your daily life in Japan, please write.

38 (質問 25 に対して) その理由を教えてください。

Please specify the reason to the previous question.

39 立教短期日本語プログラムを選んだ理由を教えてください。

Please tell us the reason you chose Rikkyo Short-Term Intensive Japanese Program to study abroad.

40 プログラムの前と後の立教大学に対する印象の立教大学の印象を教えてください。

Please tell us your impression of Rikkyo University before and after you come to Rikkyo University.

41 立教大学に関して、いいと思ったことはなんですか。

What did you find good about Rikkyo University?

42 立教大学で参加したいプログラムがあれば、教えてください。

Please tell us if there is any program.

43 最後に、今後の参加者に一言アドバイスがあれば、記入してください。

Lastly, if you have any advice to the future program, please write.

アンケート結果は以下の通りとなった。

各設問の平均値：春学期

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	
4.4	4.4	4.2	4.0	4.8	4.4	4.6	4.7	4.4	3.9	
Q11	Q12	Q13	Q20	Q21	Q22	Q23	Q24	Q25	Q26	Q27
3.8	3.3	4.1	4.1	3.8	4.7	3.8	4.0	4.6	2.4	1.1

各設問の平均値：秋学期

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	
4.6	4.7	4.6	4.3	4.6	4.7	4.5	4.7	4.8	4.3	
Q11	Q12	Q13	Q20	Q21	Q22	Q23	Q24	Q25	Q26	Q27
4.1	4.4	4.6	4.3	4.3	4.6	4.2	4.3	4.6	2.1	1.8

Q1 から Q13 は授業についての設問で、Q4 以外は、平均値の数値が高いほど平均的に評価が高かったと解釈できる内容になっている。日本語クラス (Q1 から Q9) については春秋学期とも同程度に高い評価を得た。授業のスピード (Q4) は平均値で見るとゆっくりめであるという評価となっている。日本文化社会講義 (Q10 から Q12) については、春学期よりも秋学期のほうが平均値が高めになった。特にフィールドトリップの満足度は秋学期のほうが高い。春学期はプログラムの規模を拡大して初めての実施で、フィールドトリップの移動が課題になったことが、この経験を踏まえ秋学期は移動方法を改善したことが高評価につながったのではないかと思われる。

Q20 から Q27 は生活面についての設問で、こちらも春学期よりも秋学期のほうが平均的に高い評価を得た。特に立教の学生との交流 (Q21) と食事 (Q23) に対する満足度が高くなっているが、内容に大きな変更を施していないため、気候による影響以外の要素が考えにくい。今後経過を見ていきたい。住み込みアルバイトのサポート (Q25) は春秋ともに同程度に高い評価を得た。

プログラム参加前から本学について知っていたかどうか (2 択) については、知っていたという回答が増えており、少しずつ本学が各地域で知られるようになってきた様子が見え、本プログラムのねらいにかなう結果となった。

自由記述では、日本語話者との授業を通じたインタラクションがあること、授業の内容、教員の質、快適な宿舎での生活などについて肯定的評価があった一方で、門限が早いことに対するコメントがあった。夏のプログラムについてはフィールドトリップ時の移動についてのコメントもあった。

短期プログラムの参加を検討する中で、本学について調べ魅力を感じて本プログラムを選択したが、とてもいい選択であったというコメントもあった。特にオセアニア地域で短期プログラムによる派遣が推奨される動きがある中で、海外の学生たちが日本国内外で展開されている短期プログラムを検索することが本学を知るきっかけになっていることがわかる。

10. 短期日本語プログラム報告 (B)

経営学研究科・日本語教育センター・国際化推進機構の共同運営により、2018年7月と2019年1月に1週間の短期プログラムを実施した。

1 実施の概要

時期：2018年7月24日(火)～7月28日(土)、2019年1月28日(月)～2月1日(金)5日間

主管部局：経営学部、日本語教育センター、国際化推進機構グローバル教育センター

連携大学：パジャジャラン大学大学院経済経営学研究科経営学専攻 (修士課程)

内容：経営学分野における講義に加え、日本の文化や簡単なビジネスマナーを含む初級日本語授業を取

り入れる。通常コースの学生は、初級の日本語基礎編、エグゼクティブコースの学生は日本文化と初級ビジネス会話の2クラスを用意する。

学籍：あり

単位：単位付与なし

修了証書：受講記録として Certificate を受講生ごとに発行（MPMA,日本語教育センターそれぞれで発行）

人数：参加学生 7月 43名、1月 29名

全体スケジュール：7月

	午前	昼	午後
7/23 (月)	Arrive at Haneda Airport		Tokyo Overview
7/24 (火)	Opening Ceremony Conversational Japanese① MPMA①4151、4251～4254 教室	Lunch	Campus Tour
		Pray	Tokyo Overview
7/25 (水)	Conversational Japanese②③ 4151、4251～4254 教室	Lunch Pray	MPMA② 4151 教室
7/26 (木)	Conversational Japanese④ MPMA③ 4151、4251～4254 教室	Lunch Pray	Company Visit
7/27 (金)	Conversational Japanese⑤ MPMA④4151、4251～4254 教室	Lunch Pray	Tokyo Overview
7/28 (土)	MPMA⑤(Final Presentation) MPMA⑥(Final Presentation) Closing Ceremony 4151 教室	Pray	Tokyo Overview

全体スケジュール：1月

	午前	昼	午後
1/27 (日)	Arrive at Haneda Airport		Tokyo Overview
1/28 (月)	Opening Ceremony Conversational Japanese① MPMA①4151、4251～4254 教室	Lunch	Campus Tour
		Pray	Tokyo Overview
1/29 (火)	Conversational Japanese②③ 4151、4251～4254 教室	Lunch Pray	MPMA② 4151 教室
1/30 (水)	Conversational Japanese④	Lunch	Company Visit

	MPMA③ 4151、4251～4254 教室	Pray	
1/31 (木)	Conversational Japanese⑤ MPMA④4151、4251～4254 教室	Lunch Pray	Visit to Tokyo Stock Market
2/1 (金)	MPMA⑤(Final Presentation) MPMA⑥(Final Presentation) Closing Ceremony M201,M202 教室	Pray	Tokyo Overview Depart from Haneda Airport

日本語クラス担当教員 (50音順) :

7月…浅野有里、神元愛美子、小森由里、高嶋幸太、谷啓子、長谷川孝子、山内薫

1月…浅野有里、神元愛美子、小森由里、高嶋幸太、長谷川孝子、守屋久美子

2 担当者連絡会

日時：2018年6月29日(金)16時40分～

2018年12月10日(月)17時～、2018年12月14日(金)16時～

内容：学生情報(学習歴、ニーズ確認)、目標設定、教材・教具、教室配置・クラス分け、
学生ボランティア配置日など

3 学生ボランティア等の授業協力

- ① 7月25日(水)異文化コミュニケーション学部2-4年 6名
- ② 7月27日(金)異文化コミュニケーション学部2-4年 4名、異文化コミュニケーション学研究所1名、本語教育センター職員1名、異文化コミュニケーション学部教員1名
- ③ 1月29日(火)異文化コミュニケーション学部3-4年 6名、
- ④ 1月31日(金)異文化コミュニケーション学部3-4年5名、日本語教育センター職員1名、異文化コミュニケーション学部教員1名

4 成果

- ・本学への留学パターンの多様化の促進
- ・本学学生との国際交流促進
- ・協定校の送り出し教員の本学への理解促進
- ・2019年度夏のセミナーの継続展開
- ・出欠管理の厳格化

11. センター員活動報告

池田伸子

研究論文

1. 「多様なニーズに対応可能な日本語教員養成プログラムの開発—シミュレーションによる態度変容可能性の検討 2—」『日本語・日本語教育』第2号、立教大学日本語教育センター、2019年、1-17頁.
2. 「多様なニーズに対応可能な日本語教員養成プログラムの開発—視聴覚教材利用による態度変容可能性の検討 2—」『日本語教育実践研究』第7号、立教日本語教育実践教育学会、2019年（印刷中）

研究発表

1. 「開発型評価を取り入れた日本語教育プログラム評価の実践 —新規開講の漢字クラスを対象に—」（藤田恵・金庭久美子・数野恵理・嶋原耕一・丸山千歌との共同ポスター発表）ヴェネツィア 2018年日本語教育国際研究大会、於イタリア、ヴェネツィア「カ・フォスカリ」大学、2018年8月4日

発表

1. 「グローバル人材の育成について」、日中大学学長フォーラム、於淡路夢舞台国際会議場、2018年11月26日
2. 「多様な正規学部留学生受け入れにおいて日本語教育（センター）の果たすべき役割」、立教大学日本語教育センターシンポジウム 2018、於立教大学、2019年1月26日

受賞

1. 「「can-do」の理念に基づいた教材開発—『新界標日本語総合教程』1-4冊（教材）」証書番号 2017018、華東師範大学本科教学成果賞 一等賞（編集委員として参加）
2. 「「can-do」の理念に基づいた教材開発—『新界標日本語総合教程』1-4冊（教材）」G-2-2017164、上海市級教学成果賞 二等賞、上海市教育委員会・上海市人力資源和社会保障局（編集委員として参加）

研究助成

1. 2015.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「ディスレクシア学習者に対する実現可能で個別的な日本語教育支援体制の構築」（研究代表者）（課題番号：15K02657）
2. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価—持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）

丸山千歌

研究論文

1. 「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触—日本に住み、働きつづける日本留学経験者Bの場合—」(小澤伊久美との共同執筆)『日本語・日本語教育』第2号、立教大学日本語教育センター、2019年、19-38頁.
2. 「日本に住み、働き続ける径路に表れる日本留学、日本語学習経験—日本留学経験者AとBについての考察—」『日本語教育実践研究』第7号、立教日本語教育実践教育学会、2019年(印刷中)

研究発表

1. 「日本に住み、働き続ける径路に表れる日本留学、日本語学習経験」(小澤伊久美との共同ポスター発表)、ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会、於イタリア、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、2018年8月4日
2. 「開発型評価を取り入れた日本語教育プログラム評価の実践—新規開講の漢字クラスを対象に—」(藤田恵・金庭久美子・数野恵理・嶋原耕一・池田伸子との共同ポスター発表) ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会、於イタリア、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、2018年8月4日
3. 「留学体験を持つ日本語学習者 X が日本に住み、働き続ける径路——X は分岐点でどのような葛藤を経験しているか——」(小澤伊久美との共同発表)、沖縄日本語教育研究会第16回大会、於琉球大学国際教育センター、2019年3月9日

講演

1. 「これからの教師教育—開発型教師を目指して—」2018年全国高校日語系主任及日語骨干教师論壇、於華東師範大学、2018年5月19日(招待講演)

受賞

1. 「「can-do」の理念に基づいた教材開発—『新界標日本語総合教程』1-4冊(教材) 証書番号2017018、華東師範大学本科教学成果賞 一等賞 (徐敏民との連名での受賞)
2. 「「can-do」の理念に基づいた教材開発—『新界標日本語総合教程』1-4冊(教材) G-2-2017164、上海市級教学成果賞 二等賞、上海市教育委員会・上海市人力資源和社会保障局 (徐敏民との連名での受賞)

研究助成

1. 2016.4～現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「移動して学ぶ」時代の日本語教育—留学体験の意味づけの変容・維持過程の分析から」(研究代表者)(課題番号:16K02824)
2. 2017.4～現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評

価—持続可能で有用な開発型評価とは」(研究分担者)(課題番号:17K02863)

金庭久美子

著書

1. 『ICT×日本語教育』(李在鎬(編)、當作靖彦(監修)、「メール作成タスクを用いた作文支援システム」(川村よし子、橋本直幸との共同執筆)、2019年2月、ひつじ書房、(印刷中)

研究発表

1. 「Role-based Listening の実践—『なりきりリスニング』のより効果的な授業を目指して—」(奥野由紀子・山森理恵との共同発表)、口頭発表、韓国日語教育學會 第33回國際學術大會、於建国大學校(韓国)、2018年4月28日
2. 「開発型評価を取り入れた日本語教育プログラム評価の実践—新規開講の漢字クラスを対象に—」(藤田恵・数野恵理・嶋原耕一・池田伸子・丸山千歌との共同発表)、ポスター発表、ヴェネツィア2018年日本語教育國際研究大会、於イタリア、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、2018年8月4日
3. 「日本語学習者のメール文における配慮表現の課題」、ポスター発表、ヴェネツィア2018日本語教育國際研究大会、Venezia ICJLE 2018、於イタリア、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、2018年8月4日
4. 「メール返信時の韓国人学習者の自分の意志を伝える表現—婉曲表現の有無に焦点を当てて—」(金蘭美・金玄珠との共同発表)、口頭発表、韓国日本學會(KAJA)第7回國際學術大會、於漢陽大學校(韓国)、2018年8月24日
5. 「メールタスクにおける「V ようと思う」の使用状況—日本語学習者と日本語母語話者の違いに着目して—」(金蘭美との共同発表)、口頭発表、ならびにポスター発表、第51回日本語教育方法研究会、於国士館大学、2018年9月8日
6. 「引用の仕方の違い—相手からの情報を前提情報とする場合—」(金蘭美・金玄珠との共同発表)、口頭発表、韓国日語教育學會 第34回冬季國際學術發表大會、於建国大學校(韓国)、2018年12月8日
7. 「慣用表現に対応したやさしい日本語書き換えシステム」(川村よし子との共同発表)、口頭発表、日本語教育学会 2018年度支部集会、於武庫川女子大学、2019年3月23日(予定)

受賞

1. 「「can-do」の理念に基づいた教材開発—『新界標日本語総合教程』1-4冊(教材) 証書番号2017018、華東師範大学本科教学成果賞 一等賞 (編集委員として参加)
2. 「「can-do」の理念に基づいた教材開発—『新界標日本語総合教程』1-4冊(教材) G-2-2017164、上海市級教学成果賞 二等賞、上海市教育委員會・上海市人力資源和社会保障局 (編集委員とし

て参加)

その他

1. 交流ひろば出展、「メール作成支援システム『花便り』: 読み手に配慮してメール文を書こう!」、日本語教育学会 2018 年度支部集会 (九州沖縄支部)、於福岡女子大学、2018 年 7 月 1 日
2. 交流ひろば出展、「受け答えに見られる不自然さの要因—OPI インタビュー時の「繰り返し」に着目して—」、日本語教育学会 2018 年度 (支部集会関東支部)、於文化外国語専門学校、2018 年 10 月 28 日
3. 交流ひろば出展、「やさしい日本語書き換えシステム『チュウ太のやさしくな—れ』」、日本語教育学会 2018 年度日本語教育学会秋季大会、於プラサヴェルテ (沼津市)、2018 年 11 月 24 日

研究助成

1. 2015.4～至現在 科学研究費助成金 (基盤研究 (B)) 「多義語の意味の自動特定機能を組み入れたやさしい日本語による読解支援環境の構築」(研究分担者) (課題番号: 15H03219)

藤田恵

研究論文

1. 「視覚に障害のある学習者を対象としたオンライン通話システムによる日本語授業の実践報告—Skype による授業の可能性と課題—」(河住有希子・北川幸子・浅野有里との共同執筆)、『日本語教育方法研究会誌』Vol.24 No.2、日本語教育方法研究会、2018 年、118-119 頁
2. 「インクルーシブ教育の実現に向けた中級読解授業の実践—日本語教師による読解教材点訳の試み—」(浅野有里、河住有希子・北川幸子との共同執筆)『日本語・日本語教育』第 2 号、立教大学日本語教育センター、2019 年、83-97 頁。

研究発表

1. 「あん摩マッサージ指圧師国家試験に見られる語彙の分析—用いられる語彙の傾向と学習優先度の検討—」(河住有希子・浅野有里・北川幸子との共同ポスター発表)、2018 年度日本語教育学会 春季大会、於東京外国語大学、2018 年 5 月 27 日
2. 「開発型評価を取り入れた日本語教育プログラム評価の実践—新規開講の漢字クラスを対象に—」(金庭久美子・数野恵理・嶋原耕一・池田伸子・丸山千歌との共同ポスター発表)、ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会、於イタリア、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、2018 年 8 月 4 日
3. 「視覚に障害のある学習者から見た ICT 教材のアクセシビリティに関する一考察—既存のデジタルコンテンツへのアクセシビリティの検証—」(河住有希子・北川幸子・浅野有里との共同ポスター発表)、

日本語教育国際研究大会 Venezia ICJLE 2018、於イタリア、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、
2018年8月4日

4. 「視覚に障害のある学習者を対象としたオンライン通話システムによる日本語授業の実践報告—Skypeによる授業の可能性と課題—」（河住有希子・浅野有里・北川幸子との共同発表及びポスター発表）日本語教育方法研究会 第51回研究会、於国士舘大学、2018年9月8日

受賞

1. 「「can-do」の理念に基づいた教材開発—『新界標日本語総合教程』1-4冊（教材） 証書番号 2017018、華東師範大学本科教学成果賞 一等賞（編集委員として参加）
2. 「「can-do」の理念に基づいた教材開発—『新界標日本語総合教程』1-4冊（教材） G-2-2017164、上海市級教学成果賞 二等賞、上海市教育委員会・上海市人力資源和社会保障局（編集委員として参加）

研究助成

1. 2016.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「視覚障害教育から切り拓く国際共生社会における日本語インクルーシブ教育の基盤構築」（研究分担者）（課題番号：JP16K02819）

数野恵理

報告

1. 「留学生のレポートに見られる不適切な引用と学生の意識 —レポート分析とインタビュー調査から—」『日本語・日本語教育』第2号、立教大学日本語教育センター、2019年、57-72頁。

ポスター発表

1. 「ある中国人留学生のレポートを書く力の変化—引用の仕方に注目して—」、第50回日本語教育方法研究会、於名古屋大学、2018年3月24日
2. 「開発型評価を取り入れた日本語教育プログラム評価の実践 —新規開講の漢字クラスを対象に—」（藤田恵、金庭久美子、嶋原耕一、池田伸子、丸山千歌との共同発表）、ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会、於イタリア、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、2018年8月4日

小林友美

研究論文

1. 「日本語の情報収集の談話の展開方法—大学生と留学生による就職活動の相談の談話を対象に—」『日本語・日本語教育』2号、立教大学日本語教育センター、2019年、39-55頁。

嶋原耕一

著書

1. 『接触場面への参加による日本語母語話者と非母語話者の変化—初対面雑談会話における話題の分析を通して—』立教大学出版会、2019年

研究論文

1. 「日本語教師とティーチングアシスタントによる作文フィードバック観自覚のための実践」（益本佳奈との共同執筆）『日本語・日本語教育』第2号、立教大学日本語教育センター、2019年、73-81頁.

研究発表

1. 「開発型評価を取り入れた日本語教育プログラム評価の実践—新規開講の漢字クラスを対象に—」（藤田恵・金庭久美子・数野恵理・池田伸子・丸山千歌との共同発表）ヴェネツィア 2018年日本語教育国際研究大会、於イタリア、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、2018年8月4日
2. 「日本語教師と TA による作文フィードバックの実践—評価観を自覚するための試み—」（益本佳奈との共同発表）日本語教育方法研究会第51回研究会、於国士舘大学、2018年9月8日

研究助成

1. 2018.4～至現在 科学研究費助成金（若手研究）「母語話者と非母語話者による成員カテゴリーの交渉と社会的行為について」（研究代表者）（課題番号：18K12433）

12. 2018年度 F D記録

(1) 担当者連絡会など

①2018年度FD委員会（2018年7月20日、8月31日、2月23日、3月5日 計4回）

2018年度のFD計画に沿って計画的に進めた。活動の詳細は以下の通りである。

- a.2018年7月20日（金）実務委員会終了後〔場所〕マキム第1会議室〔参加者数〕10名〔議題〕2018年度のFD活動の課題（日本語科目のさらなる開発と改善）について
- b.2018年8月31日9:00-16:00〔場所〕12号館会議室〔参加者数〕29名〔議題〕日本語教育科目運営について、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、個人情報の取り扱い注意、日本語教育センターシンポジウムほか
- c.2019年2月23日（金）実務委員会終了後〔場所〕マキム第1会議室〔参加者数〕10名〔議題〕2018年度のFD活動の課題（短期日本語プログラムの運営についての検討、日本語科目のさらなる開発と改善についての検討）、来年度のFD活動の課題ほか
- d.2019年3月5日（火）9:00-16:00〔場所〕12号館会議室〔参加者数〕31名〔議題〕日本語教育科目運営、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、個人情報の取り扱い注意ほか

(2) 短期日本語プログラムの運営についての検討

2018年度より短期日本語プログラムの団体受け入れを開始することに伴い、実施規模が拡大することになったため、2018年度は実施の経過を観察しながら、第3回のFD委員会で本課題を重点的に扱うことにした。

事務局業務については、これまで日本語教育センターが扱ってこなかった参加生のビザ対応が増えていることが確認された。また、宿泊についても分宿体制をとったことから門限管理が課題となっていることが確認された。教務面では、カリキュラム開発がほぼ順調であることが確認されるとともに、成果発表までのクラス運営について工夫が必要であることが確認された。また、初日の日本語プレイスメントテストは合理的な運営がなされ規模拡大に伴う大きな問題はないことが報告された一方で、授業面について担当教員間の連絡業務が煩雑化している課題が確認され、その対応策について意見交換が行われた。今回確認された課題については2019年度に対応をしていきたい。

短期日本語プログラムの拡充については兼任講師が参加する第2回、第4回のFD委員会で報告がなされた。

(3) 日本語科目のさらなる改善と開発

2017年度のFD委員会で取り上げた聴解会話および作文科目について、7月のFD委員会で改善の取

り組みについて共有し、意見交換を行った。また、2018年度より学習範囲を広げた漢字クラスについては、7月のFD委員会で業務量や学習状況の課題について共有し意見交換を行い、2月のFD委員会で改善状況を確認、2019年度に向けた課題について意見交換を行った。

2018年度に新たに確認された課題、特に学部間協定による特別外国人学生の帰国などの条件による学習時間の確保と学習成果の確認の課題については、7月のFD委員会でこれらの課題への取り組みのうち、特に学習時間の確保のための具体的な方策について意見交換を行い、2月のFD委員会では学習時間の確保と学習成果の確認についての検証について報告を受けたのちに意見交換を行った。

またこれらの取り組みについて、第2回、第4回のFD委員会で、科目コーディネーターが兼任講師と情報共有を行った。

(5) 2018年度の学生による評価アンケート結果（特別外国人学生対象J0～J7）

日本語教育センターでは、特別外国人学生用日本語科目について、J0からJ7レベルの日本語科目を履修したプログラム修了予定学生（帰国予定学生）を対象に日本語プログラムに関するアンケートを実施している。国際センターの協力によりウェブによるアンケートを実施し、春学期111名、秋学期（集計中）から回答を得た。

質問内容は以下の通りで、自由記述以外は、5：はい 4：まあそうである 3：どちらともいえない 2：あまりそうでない 1：いいえ の5段階の選択式で回答を得た。

1 以前より日本語を聞いて理解できるようになった。

I can listen and understand Japanese better than before.

2 以前より日本語を話すことができるようになった。

I can speak Japanese better than before.

3 以前より日本語を読んで理解できるようになった。

I can read and understand Japanese better than before.

4 以前より日本語で書く力が伸びた。

I can write Japanese compositions (or reports) better than before.

5 以前より多くの日本語の単語を使えるようになった。

I expanded my Japanese vocabulary, and use it in my spoken/ written Japanese.

6 以前より多くの文型を使えるようになった。

I can speak/write Japanese using different sentence patterns.

7 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びた。

My ability to discuss and give a presentation in Japanese improved.

8 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信がついた。

My confidence to discuss and give a presentation in Japanese increased.

9 宿題は日本語の勉強の役に立った。

The homework helped me to learn Japanese.

10 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになった。

The Japanese class's activities help me think about Japanese social and cultural issues.

11 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確だった。

My teachers gave clear instructions and explanations in class.

12 日本語で話す機会が十分にあった。

I had enough time to speak in Japanese during each class.

13 立教の日本語科目数に満足している。

I am happy with the variation of the Japanese classes of Rikkyo University.

14 1クラスの学生の人数は適当だった。

The number of students per Japanese class was appropriate.

15 立教の日本語プログラムに満足している。

Overall, I am happy with the Japanese course of Rikkyo University.

自由記述

立教の日本語プログラムでいいと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was good.

立教の日本語プログラムで改善すべきだと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was not good, and any suggestions for improvement.

アンケートに対する回答者数 137 名、回収率 88.4%で、結果は以下の通りとなった。

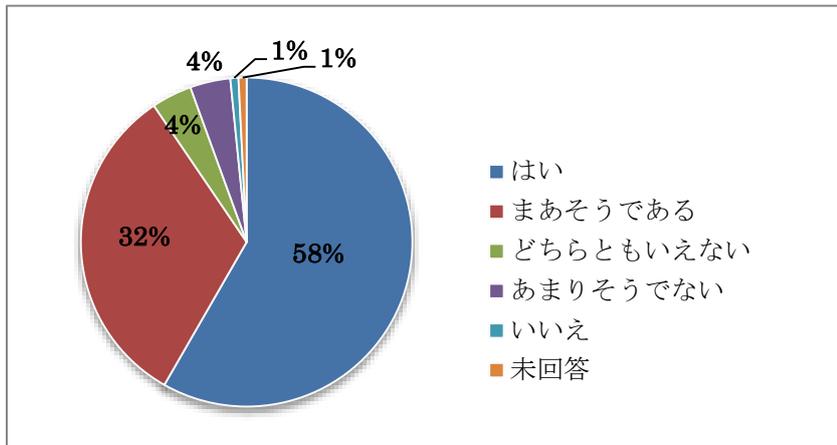
春学期は、4 技能の向上、語彙力の向上、書く力の向上、教師のインストラクション、クラス人数の適正さ、科目数、全体的な満足度などに対する評価が非常に高い。ディスカッションをしたりする力、それに対する自信、日本の文化社会への理解について考えるようになったかについての評価はやや高い。

自由記述では、教師の対応やインタラクティブな授業運営、教師の専門性、日本語による日本語クラスの展開科目数、授業の構成などについて具体的で肯定的な評価があった。。一方で、読解教材に表れる語彙の多さ、宿題の量が多い、小テストが多いなどのコメントがあった。

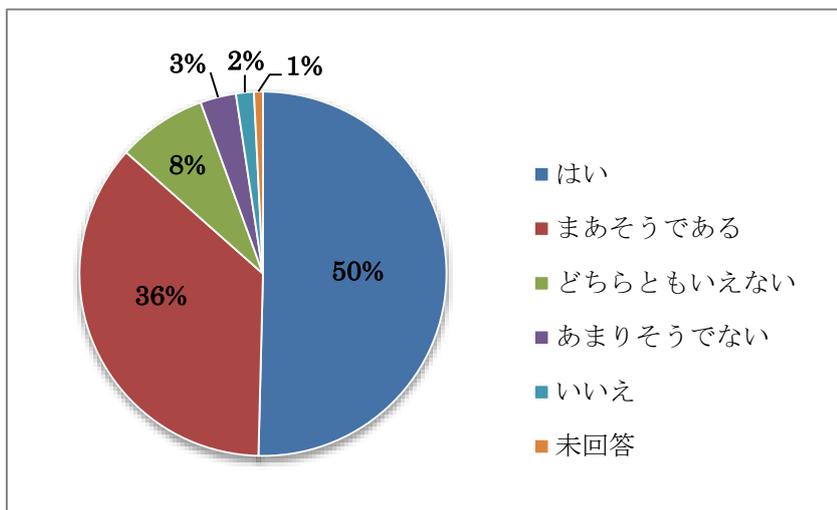
【2018年度春学期プログラム修了予定学生アンケートの結果の内訳】

() 数値は%

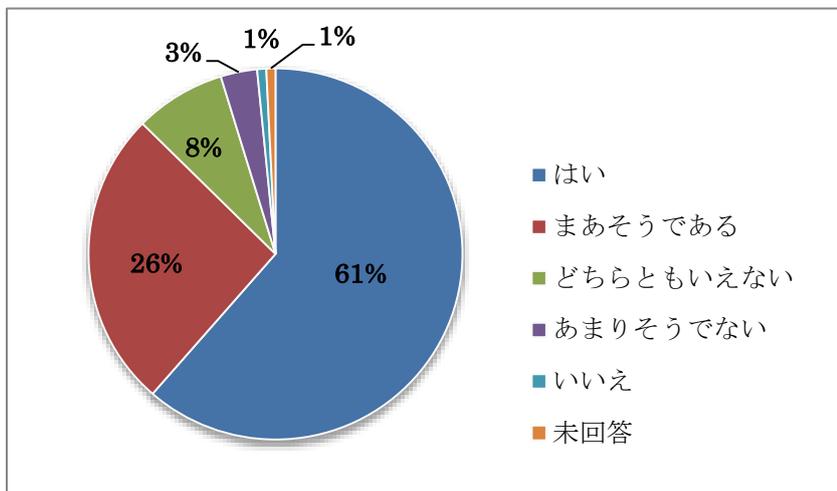
1. 以前より日本語を聞いて理解できるようになりましたか？



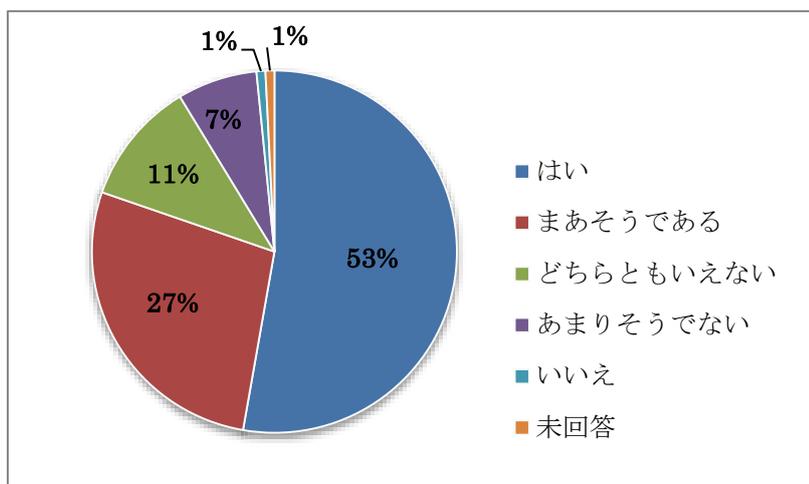
2. 以前より日本語を話すことができるようになりましたか？



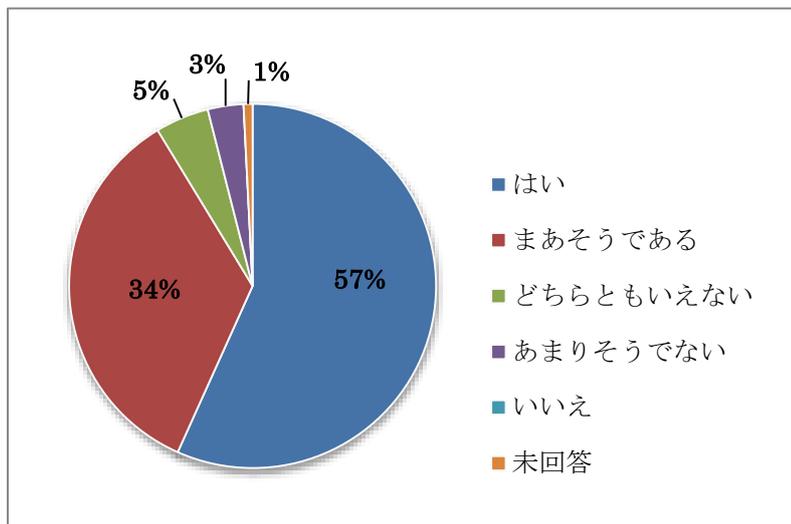
3. 以前より日本語を読んで理解できるようになりましたか？



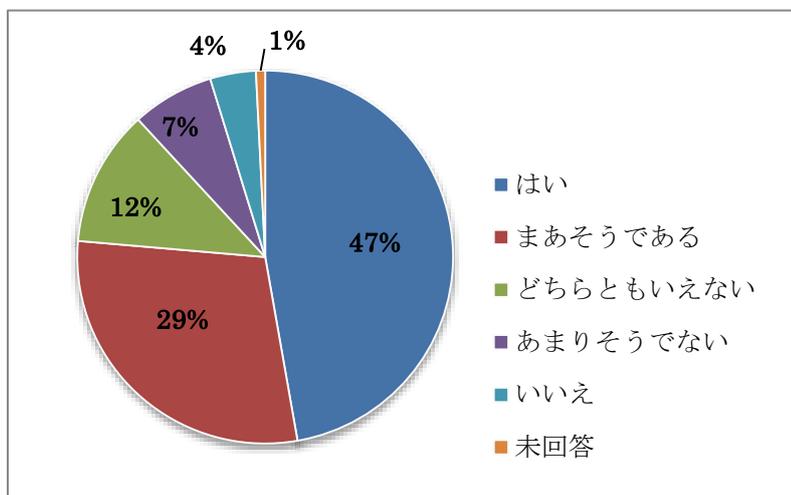
4. 以前より日本語で書く力が伸びましたか？



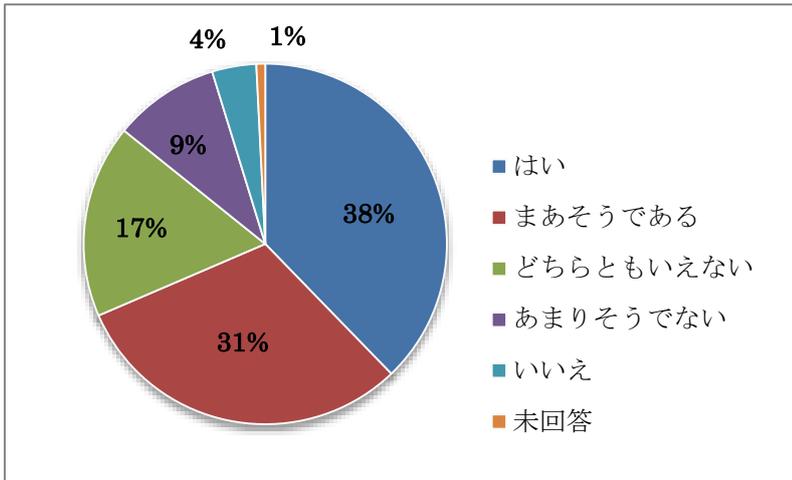
5. 以前より多くの日本語の単語を使えるようになりましたか？



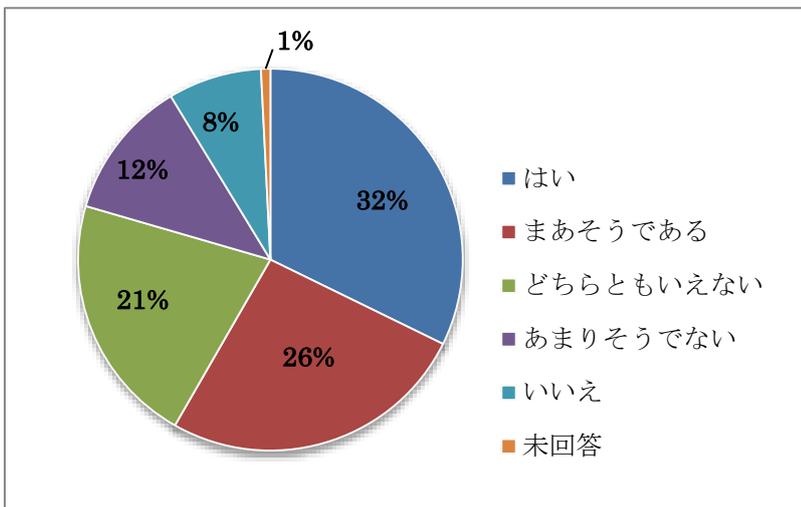
6. 以前より多くの文型を使えるようになりましたか？



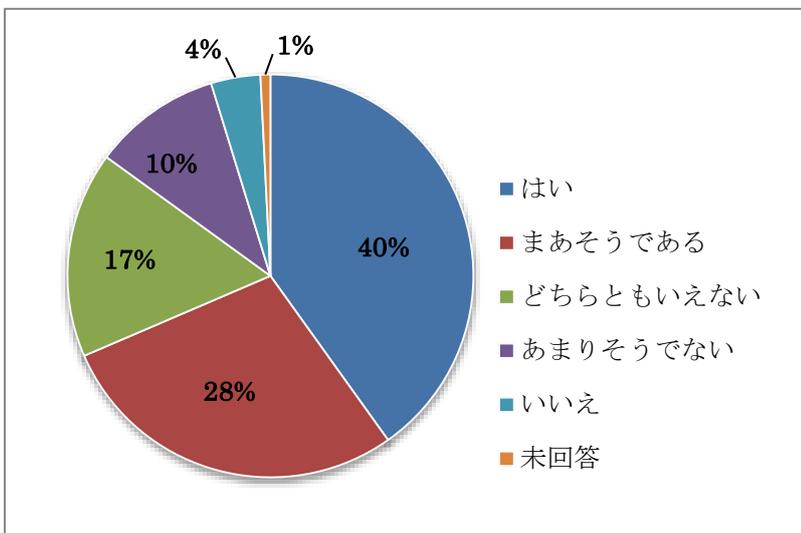
7. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びましたか？



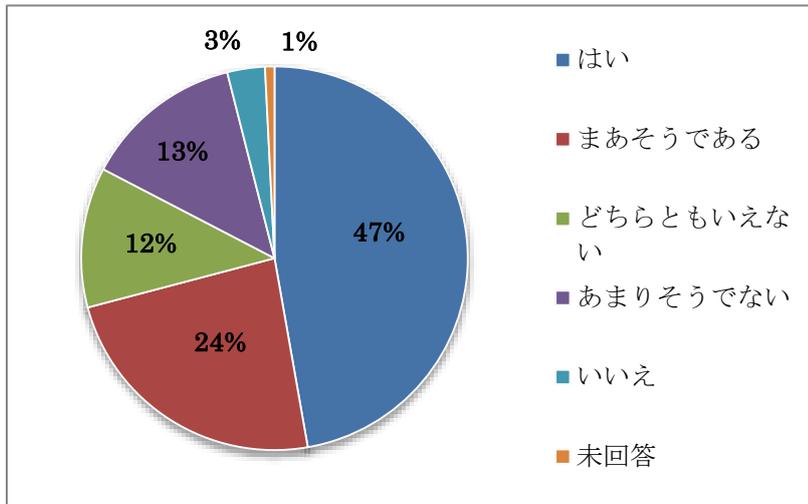
8. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信ができましたか？



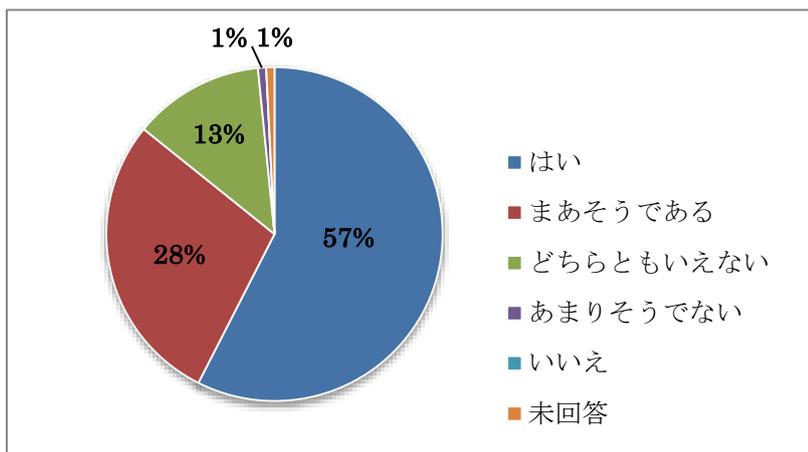
9. 宿題は日本語の勉強の役に立ちましたか？



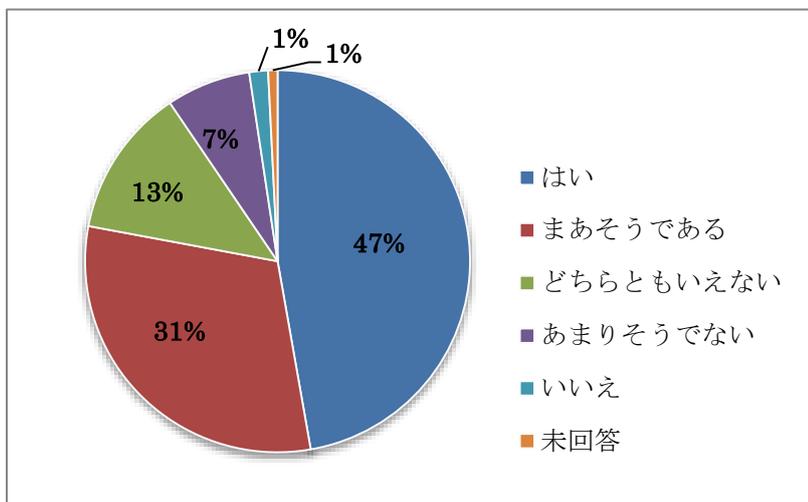
10. 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになりましたか？



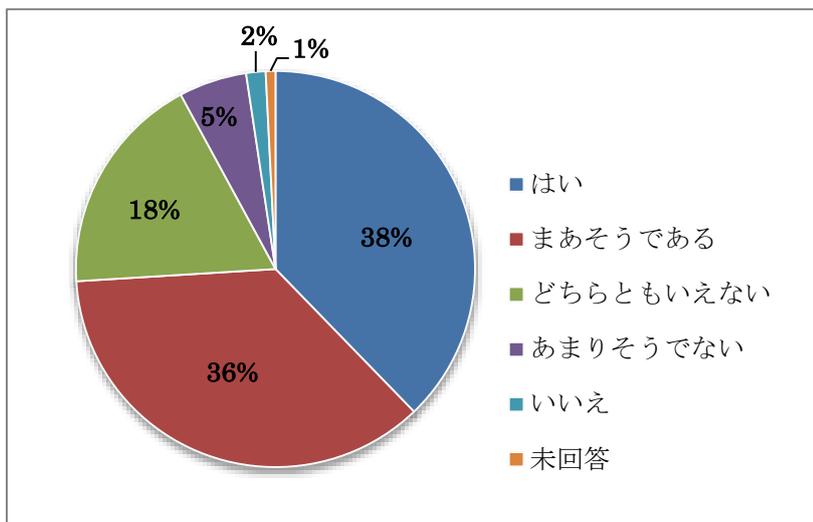
11. 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確でしたか？



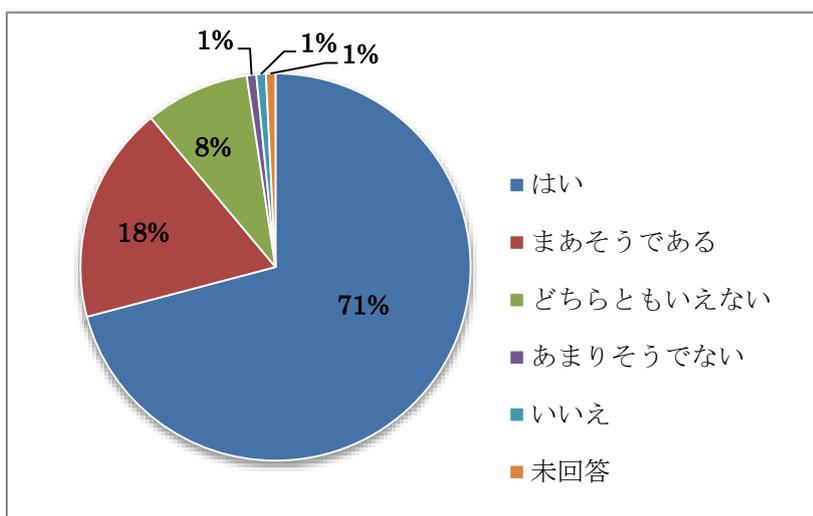
12. 日本語で話す機会が十分にありましたか？



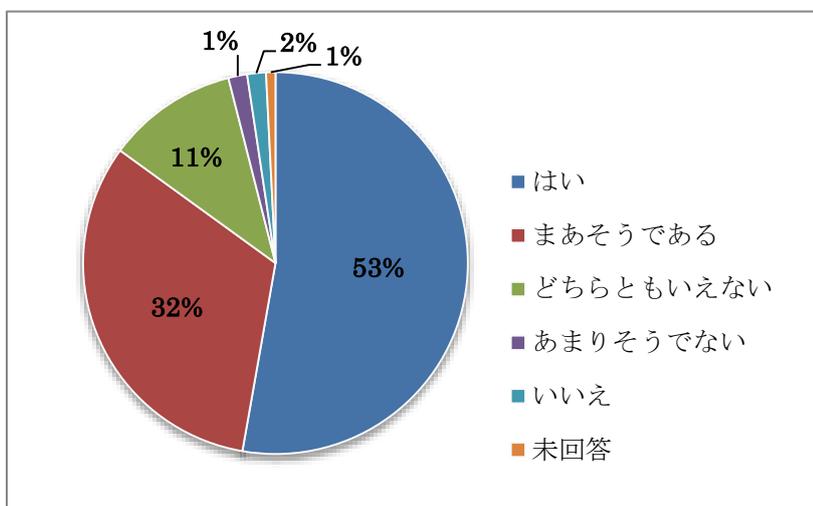
1 3. 立教の日本語科目数に満足していますか？



1 4. 1クラスの学生の人数は適当ですか？



1 5. 立教の日本語プログラムに満足していますか？



【2018年度秋学期プログラム修了予定学生アンケートの結果】

集計中

(6) 2018年度の学生による評価アンケート結果（全カリ言語B、自由科目）

正規留学生が履修する全学共通カリキュラム言語B 日本語科目「大学生の日本語A/B」および自由科目（特別外国人学生用J 8科目と同時開講）については、各学期末に科目履修者全員を対象に授業評価アンケートを実施した。結果は、担当者連絡会で科目担当者が閲覧できるようにした。分析結果は全学共通カリキュラムの授業評価アンケート報告書に掲載する予定である。これが刊行された後に日本語教育センター部分を転載する。

(7) 2019年度の課題と計画

課題1：短期日本語プログラムの運営についての検討

短期日本語プログラムはこれまで年2回の実施だったが、次年度より年3回実施することになった。年間を通して短期日本語プログラムを円滑かつ安定的に展開できるよう、プログラム設計、運営について検証を行う。

課題2：日本語科目のさらなる改善と開発

留学生のためのグローバル教養副専攻プログラムの開発の一環として言語自由科目の再設計を行う。また漢字ABなどを中心に日本語科目のさらなる改善と開発を行う。

2018年度 日本語教育センター運営体制

運営委員会

センター長	：丸山 千歌	（異文化コミュニケーション学部教授）
副センター長	：巖 成男	（経済学部 教授）
運営委員	：水上 徹男	（全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、文学部教授）
運営委員	：黄 盛彬	（国際センターから、社会学部教授）
運営委員	：韓 志昊	（センター長指名による、経済学部准教授）

実務委員会

センター長	：丸山 千歌	（異文化コミュニケーション学部教授）
-------	--------	--------------------

副センター長：巖 成男 (経済学部 教授)
 センター員：池田 伸子 (異文化コミュニケーション学部教授)
 センター員：韓 志昊 (観光学部 教授)
 センター員：藤田 恵 (特任教員)
 センター員：金庭 久美子 (特任教員)
 センター員：数野 恵理 (教育講師)
 センター員：小林 友美 (教育講師)
 センター員：嶋原 耕一 (教育講師)
 事務局：吉田 友子、阪下 利哉
 事務局：山崎 真紀子
 事務局：佐藤 遥

兼任講師

浅野 有里	谷 啓子
泉 大輔	富倉 教子
井上 玲子	長島 明子
猪口 綾奈	長谷川 孝子
小柳津 成訓	西内 沙恵
神元 愛美子	布村 猛
川端 芳子	東平 福美
草木 美智子	開 めぐみ
小森 由里	平山 紫帆
斎藤 紀子	保坂 明香
佐々木 藍子	三浦 綾乃
沢野 美由紀	守屋 久美子
清水 知子	森井 あずさ
高嶋 幸太	山内 薫
武田 聡子	

2018 年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	13	第1回実務委員会
	18	第1回運営委員会

5	11	第2回実務委員会
	16	第2回運営委員会
6	22	第3回実務委員会
	27	第3回運営委員会
7	20	第4回実務委員会
	25	第4回運営委員会
9	28	第5回実務委員会
10	3	第5回運営委員会
	9	第6回実務委員会
11	14	第6回運営委員会
12	7	第7回実務委員会
	12	第7回運営委員会
	1	第8回実務委員会
2	22	第9回実務委員会
	27	第9回運営委員会

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局

運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2018 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2018)

2019 年 3 月発行

編集兼発行者	日本語教育センター
発行責任者	丸山千歌
発行所	立教大学日本語教育センター 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 Tel: 03-3985-4202